43418
教科書文庫
4
710
41-1941
20000
90701

教科書文庫
4
710
41-1941
2000090701

中學
維新圖畫の理論と實際
實際篇　三

広島大学図書
2000090701

文育振興會

4a
710
B816

中央図書館
資料室

教科書文庫
4
710
41-1941
2000090701

維新圖畫の理論と實際

實際篇

広島大学
教
90701
図書

美育振興會

広島大学図書
2000090701

巻三目次

1	薔薇	参考用	宮本三郎
2	風景のスケッチ	参考用	赤城泰舒
3	春の風景		木下義謙
4	いちご		小泉繁
5	石膏像 その一	説明用	
6	石膏像 その二	参考用	齋藤素巖
7	中學生		伊原宇三郎
8	人物のスケッチ	参考用	木下孝則
9	運動服の生徒		木下孝則
10	往來	参考用	中西利雄
11	風景の構圖 その一	説明用	
12	風景の構圖 その二	説明用	
13	夏の風景		板倉賛治
14	陶磁器 その一		
15	陶磁器 その二		山田喜外義
16	柘榴といちぢく		松村巽
17	獣類のスケッチ	参考用	寺内萬治郎
18	犬		清水良雄
19	舟		藤島武二
20	山水圖	説明用	
21	秋の風景	参考用	結城素明
22	賞牌		大智浩
23	木工品		上山藹
24	金工品		羽野禎三
25	鳥類のスケッチ	参考用	井上恒也
26	傳書鳩		井上恒也
27	雪景色	参考用	
28	冬の風景		赤塚忠一
29	漆器		山崎覺太郎
30	掛物の表裝	説明用	
31	家具		上山藹
教授指導の要項補遺			

1 薔 薇 (參考用)　　宮 本 三 郎

要 旨

花瓶に挿した薔薇を寫生させて水彩によるとれが表現力を養ひ、暗いバツクと明るい花との對照の美しさを味はせ其の描寫を練習させる。

說明と鑑賞

1. 琉球燒の花瓶に數輪の薔薇の花を挿したもので、縱長の畫面の中央につつましく畫かれてゐる。
2. 畫面の四分の一をテーブルとし、四分の三をバツクとしてゐる。テーブルラインの中央を區切つて花瓶の脹らみが配され、その花瓶の首が段々細くなると又花が挿されて畫面に變化と統一とを與へてゐる。
3. 花の挿し方も一樣ではない。正面を向くもの、横を向くもの、上を向くもの、半開きのもの、それが各々個性を發揮してはゐるが、全體としてのまとまりにも意が注がれてゐる。花瓶の傍に葉を落したのは卓上の單調を破るためである。
4. 描法は鉛筆を細く削つて輪廓を描いた上へ純透明風な筆法で繪具を重ねていつたものである。色彩は赤や朱や桃色や黃色や綠が用ひられてゐるが、少しもけばけばしいところはなく落着いた美しさを見せてゐる。
5. 光は上方から來てゐるから、花と上向の葉と、花瓶の脹らみとが明るくなつてゐる。又黑いバツクに明るい花、明るいテーブルに黑い花瓶が畫面を引締め、全體から受ける感じは諡味のある高雅さである。
6. この繪の特異な手法は花の表現に獨創的な筆觸が用ひられてゐることと、思ひ切つて强烈な眞黑のバツクを用ひてしかも全體の調和を保つてゐる點である。
7. **宮本三郎氏**　二科會員で錬達の新進洋畫家である。挿繪界にも確固たる地步を占めてをられる。(卷末1頁參照)

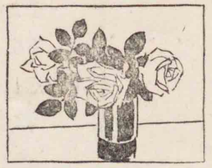
指 導

1. 花と花瓶と暗いバツク布とを與へて生徒に美的な挿し方と置き方を工夫させる。教室內數箇所にモデル臺を配置し、分團式取扱を以て畫題を決定させる。
2. 位置、形狀、色彩、明暗等を十分觀察させ花、葉、花瓶等の大體の當りをつけ、全體を常に對象に置いて鉛筆で輪廓をとらせる。
3. 次に繪具を以て描寫させる。初め主題の花葉、花瓶を描かせ、バツクを塗り、卓上を塗る。なるべく筆數を少くして最初から適確な色を塗ることを心がけしめるのではあるが、勿論部分によつては一回や二回で終るものではないから、順次全體に加筆して仕上げしめるのである。
4. 一部分だけ完成したが、他は少しも筆がはいつてゐないやうな變則な描方はいけないことを自覺させる。

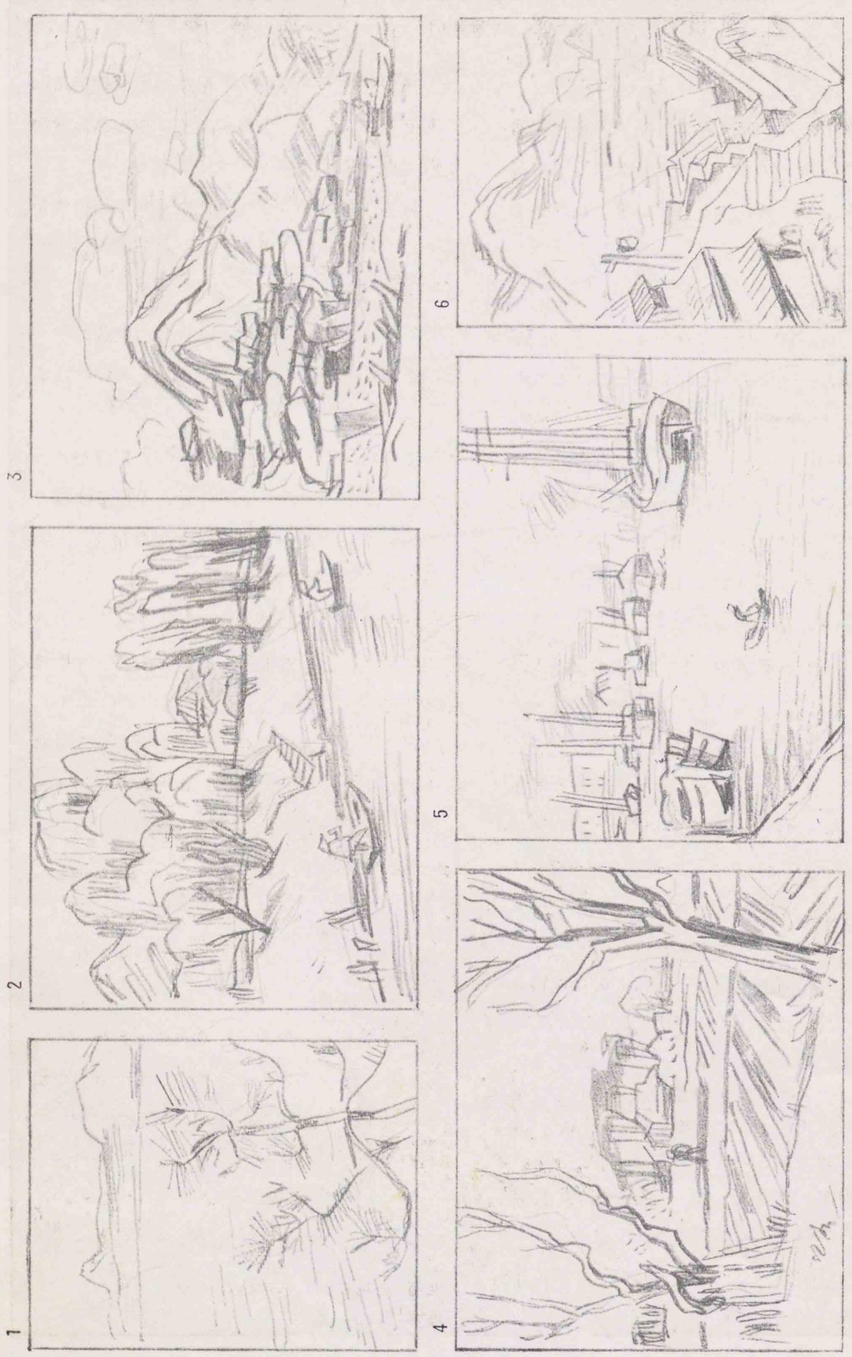
注 意

1. 薔薇がないときは他の花を以て代用してもよい。花瓶は暗いバツクに調和するやうなものにしたい。
2. 一時間で完成せしめることは出來ないから自然次週に繼續しなくてはならない。その場合花の大樣は必ず最初の時間に描かせる。
3. 本教材は臨畫として扱つてもよい。各種の描法を練習させることは表現技法を習得させる上に大變役に立つことである。

準備　花、布、花瓶等
參照　卷末1頁
參考　下圖は各種の構圖



1 薔 薇 (參考用)　　宮 本 三 郎



●風景のスケッチは寫實を基調とすることは勿論　略に二種あり、一は複雜多岐な場合に其の數を省
であるが、また よく感じをつかむことが肝要であ　略することで、他は主要なものを捉へて表現し重
る。●スケッチはものを省略して表現するが、省　要でないものを省略するのである。

赤城泰舒

2 風景のスケッチ（參考用）

2 風景のスケッチ（參考用）　赤城泰舒

題材

本課は風景スケツチの參考用として各種の實例を示したものである。スケツチを奬勵して速寫の練習をさせ、描寫力を養ふと共に自然に親しむ態度に生徒を導く。

説明と鑑賞

1. スケツチ Sketch は佛蘭西語では Croqu's といふ所謂速寫、即ち自然から直寫された略畫、畫的思想の記錄をいふ。完成した一幅の畫とは違つてスケツチの特色は其の細末に拘泥しない簡淨なところにある。或る組立畫の最初の暗示は普通スケツチの形式でなされるが、多くの場合完成畫よりも最初のスケツチの方が感興に富んで面白いものである。
2. スケツチには鉛筆やペンや毛筆が多く用ひられる。ペンは萬年筆がよく、筆は矢立入のものがよい。しかし最も便利なもので且つ妙味のあるのは鉛筆が一番である。輕快な鉛筆の走りや、淡彩を施した瀟洒な感じには捨て難い趣がある。
3. ここに示した圖例は何れも鉛筆による風景スケツチである。筆者赤城氏はすでに前卷で述べたやうに現水彩畫壇に於ける著明な畫家で、其の描線には自由、輕妙な味がある。
4. 上段左は一本の松と海、松が主眼となり、海と遠山とを配したもの、十分略筆してゐる中央は河岸のスケツチ、堤、柳、水、船、遠見の家が要領よく寫されてゐる。

　右は海濱と松と山と雲、簡單な鉛筆の描寫でよく自然の姿を捉へてゐる。

5. 下段左は樹木と畑と遠見の松と家、遠近感がよく現はれてゐる。

　中央は港のスケツチ、船舶の形狀遠近水の動きなどよく捉へられてゐる。右は鳥瞰式構圖で海と山と人家とを扱つてゐる。

　以上各圖共簡素な筆致でよく對照の自然を寫してゐる。

指導

1. 生徒を郊外に引率して一時間に數圖スケツチさせる。一圖の大きさはハガキ大位に仕切る方がよい。
2. 畫用紙の代りにスケツチブツクを持たせ、これに鉛筆でスケツチをさせる。鉛筆は餘り軟いのはよくない。3B又はHB位がよいであらう。
3. 構圖については既習の知識を基としてこの機會に於てその實習をも行はせるやうに指導する。
4. スケツチは細密描寫よりは全體の感じを寫すことを主眼として從つて省筆、略筆の實際についても具體的に指導する。

注意

1. スケツチブツクは白紙又は色紙を綴ぢたノートブツクである。生徒には自ら畫用紙を切つて之を作らしめる方がよい。
2. 鉛筆描、ペン描の上へ水彩繪具を塗つて淡彩として仕上げてもよい。ペンの場合は製圖中のインキを用ひるか、或は色を先に塗つてその後でペン描きをするかによつて色の流れ出すのを防ぐ。
3. スケツチは可成多く描くやうに仕向ける。

準備　各種のスケツチ實例其の他

參照　卷末2頁

3 春の風景　　木下義謙

要旨

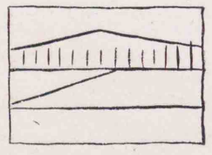
春の郊外を題材として水彩による風景描寫をなさしめ、且つ季節による色彩の變化を觀察させ、春の雰圍氣を表現せしむる。

説明と鑑賞

1. この繪は郊外の春を寫生したものである。晴れた空には白い輕やかな雲が浮び、軟かな綠が地上を蔽ふてゐる。中景に立ち並んだ木立の間には一もとの桃が美しく咲き、其の向ふには綠の森を背景にした民家の白壁が見える。前景も又綠の麥畑、その中には赤土色の野道が通り、小川には小さな木橋が架けられてある。水蒸氣が多いためであらう、空の色はまだ淡く、草木の綠は潤ひを帶びすべては平和で靜かな情景、長い冬の眠から醒めた春もまだ早い頃の長閑な田園が描かれてゐる。

2. 色調も筆致も自然から受ける感じをその儘に素直に傳へてゐる。從つて繪はのんびりとしてしかも明るく暖かく、如何にもよく春の情趣を漂はせ高い氣品を見せてゐる。

3. 構圖は中央を稍々高くした平行線とこれを區切る縱と斜の直線とによつた溫和な組立、色は桃が萬綠叢中紅一點の美しさを示してゐる。

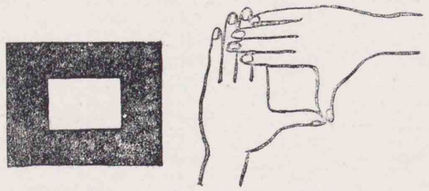


4. **木下義謙氏**　一水會系の新進洋畫家、其の作風は溫雅、健康、生徒の描寫參考として好適なものである。（詳細は卷末3頁）

指導

1. 學校附近の田園を寫生せしめる。田園のない場合は、場末風景又は家屋樹木等を畫題として學校の構内又は附近を描かせる。

2. 自然の如何なる部分を仕切り、紙面の如何なる位置に描くべきかを研究せしめる。構圖を定めるには見取枠を使ふか、又は手の指を四角に組合せて、そを見取枠として景色を嵌めて見る方がよい



3. 書色を描くに當つても常に主題は何に求めこれを畫面の如何なる位置に置くかは最も大切な條件であるから、この點は特に注意して構圖せしめる。

4. 直線で大體の形を描き、これを訂正しつゝ輕く下繪をし、繪具で描くこととする。鉛筆の下描は十分省筆してよい。色彩は濁らぬやうに注意させる。

5. 遠近による形の變化、色調の變化に注意させ、空の塗り方を投げやりにせぬやう又遠景ばかりの廣々とした景色を選ぼぬやう部分的な細密描寫にならぬやう指導する。

注意

1. 二時間に亙つて寫生する場合、第二時も又畫初の寫生と同時刻であるやうに注意する。

2. 生徒の個性的表現を尊重する。取題、構圖、筆致等可成生徒獨自の傾向を補導育成するやうに心掛ける。

3　寫生場所のない時は本圖を臨畫させる。その場合は手本の忠實な模寫をさせる方がよい

準備　範畫數種
參照　卷末3頁

3 春の風景　木下義謙

4 いちご　　小泉　繁

要旨

苺と三寶柑とを寫生せしめて、水彩による表現の力を養ひ、且つ卓上に於ける靜物の組合と配色とを研究させる。

説明と鑑賞

1. 卓上に白布を敷き、それに箱入の苺と三寶柑と更に二粒の苺とを配したものである。苺はおらんだいちごと稱する西洋種、三寶柑は別に三寶蜜柑ともいひ夏蜜柑の一種、共に美味である。
2. テーブルの線と箱の縁が角度を持つやうな位置に苺箱を置き其の横に三寶柑と粒の苺を配したもので構圖は賑かで變化に富んでゐる
3. 色彩は赤と綠と黃との派手な配合でやゝもすれば卑俗に流れやうとするのをテーブルの白と背後の褐色がうまくこれを牽制して落着を保つてゐる。調子の上からいつてもこの色の強さは苺の赤と對照して畫面を引締めるに役立つてゐる。
4. 鉛筆で形をとり、陰影を描いて、その上へ鮮麗な彩色を施してゐる。筆致を餘り多く使はず色の濁らぬやうに行屆いた注意を拂つてゐる。綠の紙を通した陰、三寶柑の陰、苺の陰が夫々異つた色調を帶びてゐることも表現上注意された點である。
5. **小泉　繁氏**　帝展(文展)系の中堅洋畫家で靜物は氏の得意の畫題である。(詳細は卷末4頁)

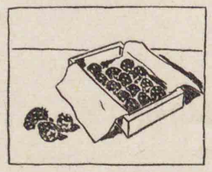
指導

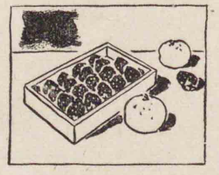
1. 苺、三寶柑(又は夏蜜柑)、苺の箱布等を與へて生徒を分團式に取扱ひ、モデル臺の上に布置排列の練習をさせる。
2. 色彩の配置を構圖の上からも考へて色との對照の美しさを發揮し、俗な組合せにならぬやう考慮させる。
3. モデル臺や箱の透視を間違はぬやう、蜜柑や苺の位置大きさを誤らぬやう、又發色、陰の色をよく觀察して寫實的な表現を試るやうに指導する。
4. 主題となる苺や蜜柑は丁寧に描くべきであるが、バツクや布には適當な省筆を行ふことがよい。それは主題を生かすことになる。
5. 白布の代りに縞や模樣の布を掛け、その上に靜物を配す場合は一層色彩配置の上の注意が必要である。都合で卓布を用ひず、机上、臺上にそのまゝ靜物を置いてもよい。

注意

1. モデルは苺や蜜柑が得られぬ場合は他のものと代へてもよい。この頃の資料としては筍豌豆、百合根等の野菜類が好畫題となるであらう。
2. 臨畫をさせてもよい。臨畫の場合は筆法、色彩共手本を忠實に模寫して技法上の眞面目な研究をするのがよい。
3. 果物や野菜は新鮮感を描出することが特に必要である。そのためにはパレツトや筆を度々洗ふことが大切で、筆洗の水は可成多く代へるやうにさせる。

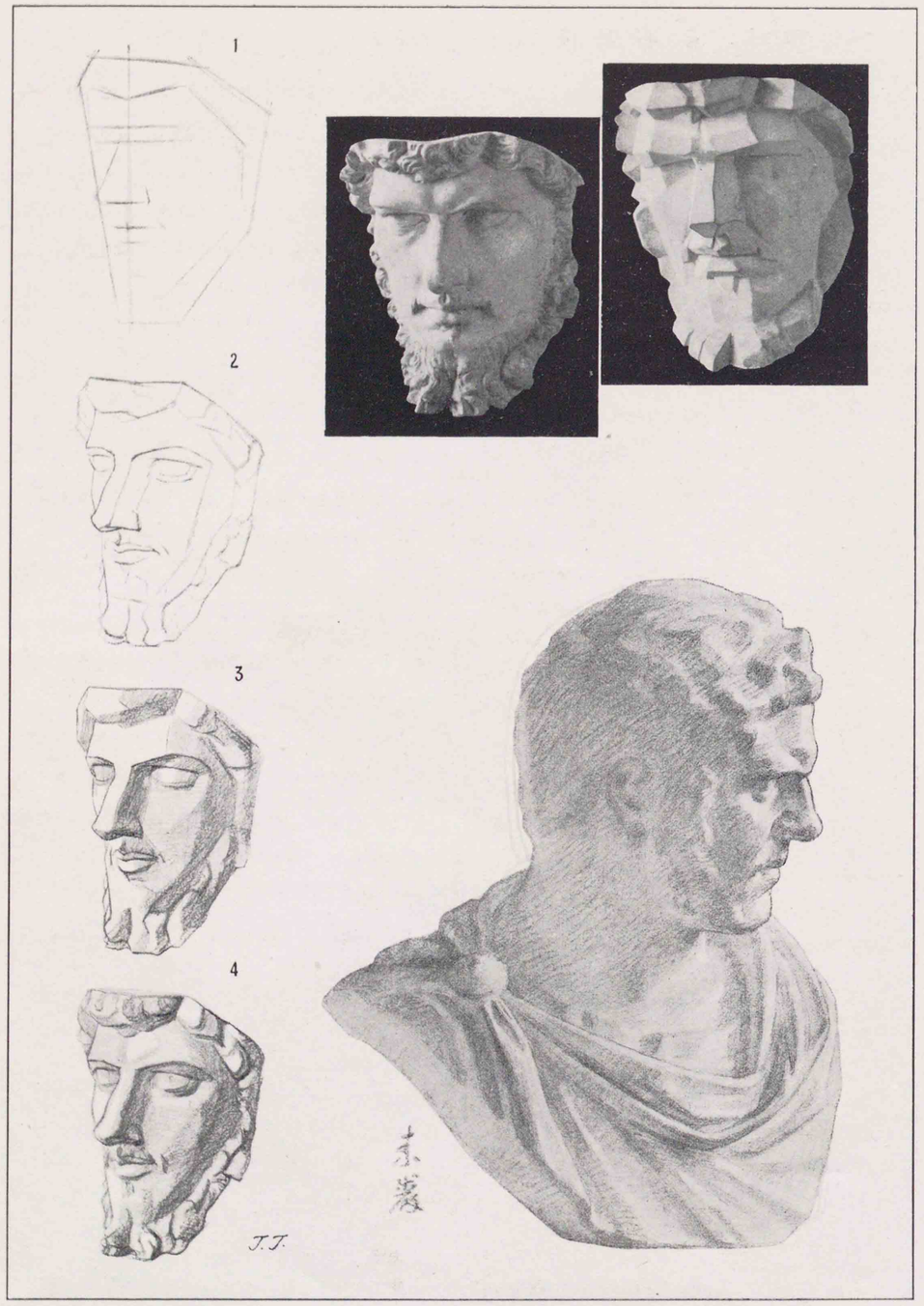
準備　苺、三寶柑、其の他
參照　卷末4頁
參考　下圖は各種の構圖例





小泉　繁

4 いちご



5 石膏像 その一 (說明用)

5 石膏像 その一 (說明用)

要旨

次課に於て石膏像を寫生せしむる豫定であるから、其の豫備知識を持たしむるためにこの課を加へた。次課と聯絡して石膏像を描寫する上の諸注意を與へることにしたい。

說明と鑑賞

1. 石膏像はもと塑像や彫像を原型としてこれを石膏にとつたもので、デツサンの題材として扱はれるものである。石膏は色が純白であるから、これに光を當てれば些細な明暗もあらはれ形の表現と共に調子の勉强には絶好の資料であるといはれる。

2. 1、2、3、4 は**大顏面**と稱する石膏半面像の描き方順序を示したものである。大顏面像は長さ35糎、幅20糎の大きさのもので、顏面の實物大よりははるかに大きい。

3. 何れも鉛筆寫生である。立體感を出すのが容易であるやうに、顏面をやゝ側面から寫生した。光線は右上からこれに當つてゐる。1 は輪廓の取り方、2 は主要な線描、3 は調子の描き分け、4 は仕上である。

4. 輪廓から線描にかけ、其の描線は直線的に取扱はれてゐる。これは初學のものの必ず心得ねばならぬことである。直線を輕く使つて形の大要をつかんで要領を得ること、そして稍强く主要な直線によつて面の區分けをし、次に調子をつける。調子は大きい部分から細かい部分に及び、墨色も段々濃度を加へる。この作者は東京高師助教授田原輝夫氏である

5. 中央上部に載せた二枚の寫眞は大顏面の二種である。一つは粗面、一つは普通の面である。粗面の方は描方順序を說明するために作られたもので、輪廓、線描、明暗の觀察、描寫共にこの粗面を觀察されたい。卽ちこの粗面を寫生するつもりで立體的の描法を心がけるやうにするのである。

6. 右下の圖は**カラカラ半身像**である。作者は彫刻家**齋藤素巖氏**齋藤氏は又素描の大家として英國仕込の確實な腕を振はれてゐる。これは木炭畫の作品で、木炭紙全紙にかいたもの、石膏胸像の完成した素描の一例として示したものである。(齋藤氏に就ては卷末 6 頁)

カラカラはローマの皇帝 Marcus Aurelius Antonius Caracalla 188—217

7. 其の畫風は溫和である。光線は右背面から來て、顏面から胸部にかけて逆光線の位置にかつてゐるが、穩やかな調子のうちに、石膏の質感と立體感とが如實に表現されてゐる。

8. 陰の面の描寫は特にむづかしい。顏の表情も出しにくいが、實に手際よく描かれてゐる。明部と空間との限界をなす輪廓の線には抑揚があつて量感の說明に役立つてゐる。顏の顎の線と左肩の線との調子上の違ひもよい參考にならう。

注意

1. 石膏像は石膏像を原型として雌型を作り、これを割型とすれば、同一のものをいくつでも作ることが出來る。教授上同一モデルの多いことはまことに便利である。

2. 右の作業は工作科に置ける生徒の實習に充ててもよい。その場合浮彫や半面像は立體に比し操作が大變容易である。

3. 場合によつては左の大顏面を短時間で臨畫させるのもよい。

準備 石膏像各種

參照 卷末 5 頁、理論篇 48 頁、51 頁、58 頁

6 石膏像 その二（參考用）　齋藤素巖

要旨

石膏頭像又は顏面像を寫生せしめて木炭による素描練習を行はしめ、形及び調子の描寫を研究せしめる。

說明と鑑賞

1. 木炭、ペン、コンテなど黑又は他の一色で描くことを普通にデツサン Dessin と稱する。素描といふのはその譯語である。素描は時に粗畫又は下圖の意味にも使はれる。
2. デツサンといへば石膏像や裸體人物などを木炭で描いたものばかりを指すやうであるが事實はさうでなく、一色の調子と筆觸のみで表現せられたもの全部、卽ち花卉、靜物、風景、動物一切に用ひる言葉である。
3. デツサンは繪に志すものの基礎的な修養として頗る重視されてゐる。形の描寫、調子の研究はデツサンの條件で、形と調子との表現は寫生の基礎だからである。（卷末6頁）
4. こゝに載せたものは前課に擧げた大顏面を木炭で寫生したもので、原畫の大きさは木炭紙半切大である。作者**齋藤素巖氏**は畫家としても又彫刻家としても著名である。（齋藤氏に就て詳細は卷末6頁）
5. **大顏面**は左上からの光線を受けて殆ど正面向に置かれてゐる。眞面目な態度で忠實に描寫され、指で擦つたあとも餘り目立たず、相當木炭の筆目を生かし石膏の質感を寫すと共に彫刻其の物の立體感が十分表現されてゐる
6. 陰影の法則によれば、調子の最も强いのは畫者の目に最も近いところであつて、この繪に於ては鼻の陰影が最も暗く額の反射が最も明るくなつてゐる。それから顏の兩側に向つて漸次調子が弱められ顏の奧行を出してゐる
7. 線も又無意味に用ひてはならない。鼻、頰、口、髮、髯の線が夫々に强弱、抑揚を以て引かれてゐることをよく觀察せしめたい。

指導

1. 寫生すべき石膏像は大顏面の外小兒顏面、アグリツパ半面像、ミケランジエロ半面像、アグリツパ、ホメロス、セネカ、シセロ、カラカラ等の胸像がよい。
2. モデルの位置をきめるには光線の具合、背景の設備、モデルの高さ、モデルの方向を考慮して定める。
3. 用紙は木炭紙半切とする。勿論カルトンを用意して其の上へ新聞紙二三枚重ねてから木炭紙を置くとよい。
4. 各部の比例を十分に觀察し、先づ直線で大體の當りをつけ、これを訂正しつゝ次第に各部の形を描く。
5. 形がとれると共に先づ明部と暗部とに二大別して調子をつけ、漸次細かい明暗に及ぼす。調子を落着けるために指の腹を以て畫面を擦り、消し去るためには食パンを用ひる。
6. 餘り小さく描き過ぎること、形も明暗も大局を忘れて部分的になること等について注意を與へる。

注意

1. 木炭の用意が出來難い時は鉛筆を以て寫生させてもよい。
2. 本圖は參考用ではあるが若し臨畫をする場合には鉛筆を用ひるのがよい。
3. 石膏像は壞れ易く汚れ易いものであるから其の取扱には十分注意すること。

準備　石膏像、木炭畫其の他

參照　卷末5頁、6頁、理論篇51頁

6 石膏像 その二（參考用）　齋藤素巖

7 中學生　　伊原宇三郎

要　旨

生徒を寫生せしめて鉛筆淡彩によるこれが表現の力を養ひ、人物描寫に關する一般的の知識と技法の大要とを會得せしめる。

說明と鑑賞

1. 圖は中學生を寫生したもので、鉛筆淡彩による半身像である。
2. 中學校の三年生位の年配であらう。丸々とした顏、肉附のよい體に健康と若さが漲り、血色のよい頰、締つた唇に潑剌とした元氣を見せ前方を凝視した瞳に聰明さを宿して居る、然しどことなくあどけないところの見える少年の純眞さが誠によく寫されてゐる。
3. 構圖に格別な新し味はない。しかし畫面と少年とのスペースの上の釣合、帽子と制服との對照、左腕を曲げた姿勢、各部の正しい割合等細心な用意が拂はれて、構圖上聊かの不安もない。
4. 光は前方上から來てゐるために顏と、胸とが明るくなり、帽庇の下、顎の下、腋の下には夫々暗い部分が出來てをり肩や腕にも陰が描かれてゐる。
5. 鉛筆は比較的軟かいものを使つて大まかなタツチで描かれてゐる。自由で潤達で、元氣のよい描線を以て忠實な寫生が行はれ、調子の表現には特に細心の注意が拂はれてゐる。そして量感もよく出てゐる。
6. 着色には筆數を餘り多く使つてゐない。決定的な色を最初から用ひ、更に明暗濃淡に從つて加筆し、鉛筆の調子と繪具の調子とが互に助け合つて相當强い感じを出してゐる。
7. 質感も十分現れてゐる。特に描寫上の參考とさせたい點は帽庇や帽章の光澤、筋肉の描寫、釦の省筆等である。
8. **伊原宇三郎氏**　（詳細は卷末7頁）

指　導

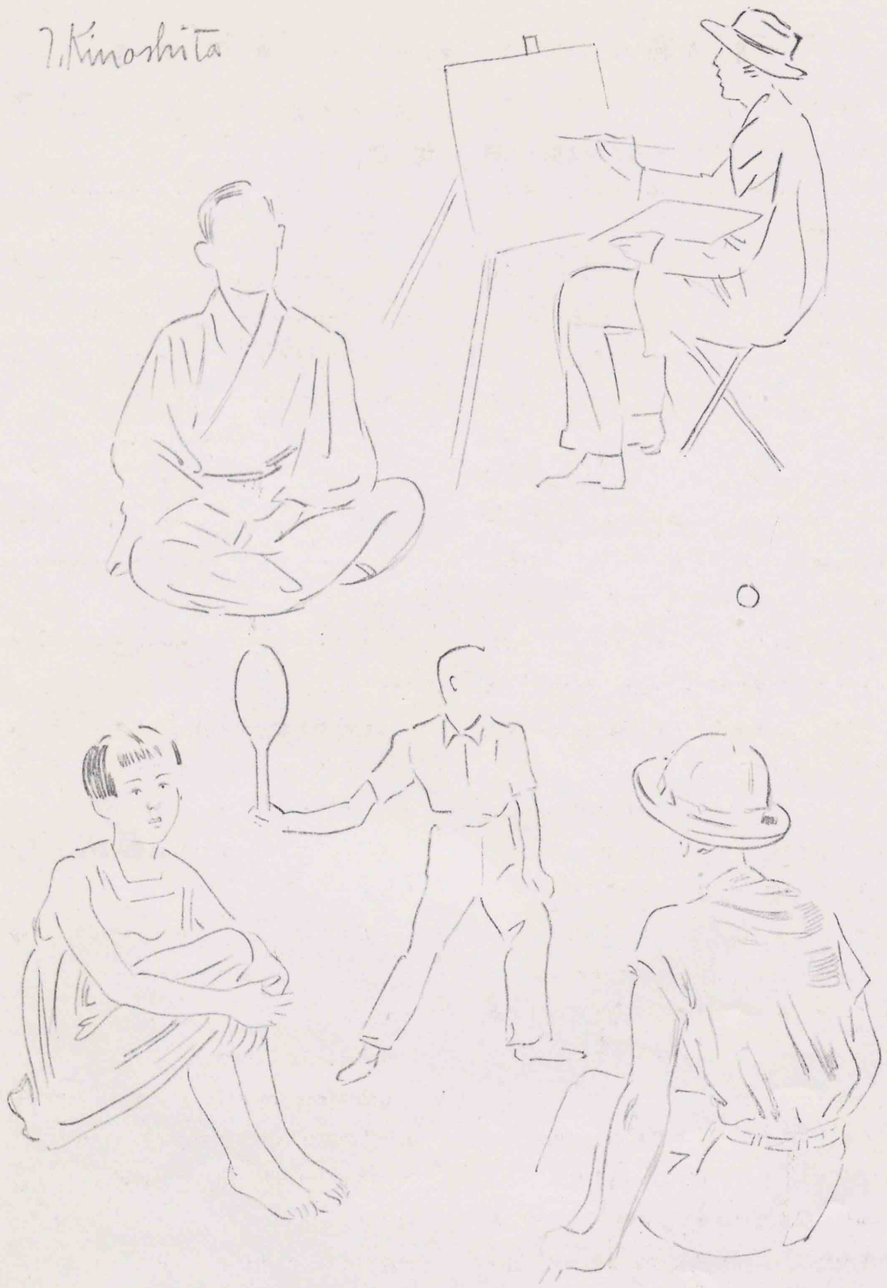
1. 生徒の中から數名をモデルとして出し、適當な位置に腰をかけさして寫生せしめる。
2. 場合により各自鏡を持參せしめて自畫像をかかせるのもよい。顏ばかりでなく、胸部まで取り入れて半身像をかゝせる。（理論篇59頁）
3. 鉛筆を以て先づ忠實に寫生させ、その上更に水彩で描き加へさせる。生徒によつては鉛筆淡彩でなく水彩描寫をするものがあつても差支ない。
4. 紙面に對して可成大きく位置せしめる。餘り部分的に細密描寫をするのはよくない。

注　意

1. 頭と胸との大さの比例を誤り頭部を過大に描くものが多いから豫め注意を與へる。
2. 顏面の描寫を特に細かくして、その代り殆ど明暗に無關心なのも亦生徒の常である。指導上の注意が必要である。人物の特徵に注意させる。
3. 本圖は臨畫教材として取扱つてもよい。その場合は手本を忠實に臨模して表現上の技法を研究させる。

準備　人物畫數點
參照　卷末 7 頁、理論篇 58 頁
參考　下圖は各種の構圖例

7 中學生　　伊原宇三郎



●人物のスケッチは寫實を基礎にして感じを捉へることは勿論であるが、活動せる人物は其の運動の或る刹那のよい形を記憶してこれを畫かねばならない。

8 人物のスケッチ（參考用）　　木下孝則

8 人物のスケッチ（參考用）　木下孝則

要旨

本圖を參考として人物各種の人物姿態と特徴とを觀察させ簡略な描き方練習を行はしめる。

説明と鑑賞

1. スケッチは對象の細末に拘泥しないで大體の形、動き、感じ、特徴を捉へて表現するところに特色がある。スケッチとは鉛筆や、ペンや毛筆による速寫であるが、本圖は何れも鉛筆によつたものである。
2. 上段左は和服を着た大人が足を組んで坐つたところである。目も鼻も描いてゐないが體各部の割合や特徴に注意され、略々年配さへ判る程である。
3. 右の圖は寫生する畫家の姿である。三脚に腰を下ろし畫架に向つて油繪の寫生をしてゐるところで、簡單な筆で青年畫家らしい樣子が描出されてゐる。
4. 下段左は小學校の女兒が揃へた膝を抱いて腰を下した圖である。洋服を着てゐる姿、お河童にした髪の形、愛らしい顔、そして丈も高さうな女の子である。
5. 中央はテニスのボールを打つ姿勢の男子である。思ひ切つた省略がしてあるけれども腕に力が漲り、ボールを注視した瞬間の感じがよく現はれてゐる。
6. 右は少年の後向きの姿である。半袖のシヤツと白ズボンをはいた夏姿と見られる。
7. 何れも簡易な描線を以て説明してゐる。**木下孝則氏**は義謙氏の令兒で京大及び東大出身の畫家である。（詳細は卷末 9 頁）
8. 動ける人物のスケッチは其の運動の或る刹那の形を記憶して置いて畫くより外はない。

指導

1. スケッチブックか或は畫用紙を用意させる
2. 生徒中よりモデルを定め適當なポーズをとらせ、描寫時間を限つて一齊にスケッチせしめる。一圖五分乃至十分位で替らせる。
3. 一人の生徒をモデルとして描いたならば次に他の生徒を出してモデルとする。
4. 斯くして三四人の生徒を交替にモデルとし夫々違つたポーズのものを描かしめる。
5. モデルについては十分考慮し同一人が長時間モデル臺に立つことのないやうに注意する

注意

1. スケッチは全體として概形を寫すことに努力せしめる。
2. 生徒は兎角部分に拘泥して全體としての各部の比例等を誤り易いものであるから十分注意させなければならぬ。
3. 生徒の缺點として頭のみ過大に描くことを豫め注意する。
4. 平素スケッチブックを持たせ可成多くの機會にスケッチせしめるやうに指導したいものである。
5. 臨畫教材として取扱つてもよい。
6. 本圖は參考用であり、且つ次の課に於て改めて人物寫生を課すのであるから、場合によつてはこゝは説明の程度に止めてスケッチ練習は見合せてもよい。そしてスケッチは課外に於て生徒の自由研究に任せる。

準備　人物スケッチの作品數枚

參照　卷末 8 頁

9 運動服の生徒　　木下孝則

要旨

運動服の生徒を寫生せしめて鉛筆淡彩によるこれが表現の力を養ひ、人物描寫に關する一般的の知識と技法の大要とを會得せしめる。

說明と鑑賞

1. 圖はラケツトを持つ生徒を寫生したもので鉛筆淡彩による七分身である。
2. すくすくと伸びた輕快らしい長身の少年が何かに腰かけ兩腕を輕く膝に置いてラケツトの柄を握つてゐる。服裝は白の半袖シヤツと白ズボンである。

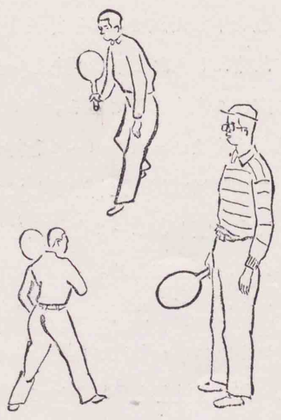
   光線は前方から來てゐるので、陰影は背後に僅かに見える。
3. 描法は簡素な描線で極めて要領よく各部の特徴が說明され、形も質も感じもよく現はれてゐる。
4. 筆致は輕妙穩和である。描線流暢、如何にも少年の無邪氣さを寫すに適はしく、着色は僅かに數色を用ひたに過ぎない。バツクを淡青色に塗つたことは畫面を引締め且つシヤツの白さを出すために役立つてゐる。
5. 畫面全體から受ける感じは平明溫雅、表現は誠に要領を得た態度である。7 の「中學生」とは感じや表現が大變違つてゐる。

指導

1. 生徒の中から希望者又は抽籤によつて數名のモデルを選び、これを適當な位置に腰かけさせる。
2. 畫用紙上に對象の位置を決定し、輕い直線風の描き方で下描をさせる。
3. 下描を十分訂正しつゝ鉛筆による本描をなさしめる。鉛筆のタツチは可成數少く簡にして要を得るやう工夫させる。
4. 着色は顏、手足を先にし頭、運動服等を後にする。バツクは背後の色の通りにする。
5. 光線は前方又は斜左右から導いた方がよい背後から光線を取つた所謂逆光線の場合は顏も體も陰の面となつて暗く現はれ、その描寫は生徒には少し難しいかも知れない。然し寫生に於ける逆光線の影響は一種の味を出すものである。

注意

1. 紙面に對して可成大きく位置せしめるがよい。
2. 頭部と胴、足との比例を誤らぬやうに豫め指導する。7「中學生」の場合と聯絡指導を心掛ける。
3. モデルのポーズは豫め自由な動作によつて自然な姿勢をつくらしめ、これによつて定める。モデルは出來上るまで同一姿勢をつゞけさせることは無理であるから十五分間に五分或は二十分に五分位づゝ休憩させるやうにしたい。(理論篇 58 頁)
4. 取扱上生徒をモデルとすることが困難ならば本圖を臨畫教材として取扱つてもよい。



準備　ラケツト其の他の運動具及び範畫
參照　卷末 8 頁
參考　上圖は各種の構圖

10 往來（參考用）　中西利雄

要旨

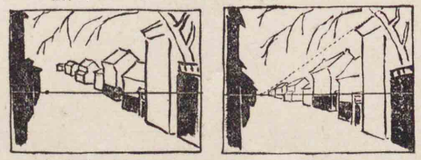
往來を寫生せしめて道と樹木と家屋の綜合された風景につき觀察せしめ水彩による之が表現の力を養ひ特に遠近の描寫を正しく指導する。

說明と鑑賞

1. この圖は都市の住宅街を寫生したものである。所謂住宅街は樹木も多く色彩も豐富であり建物の樣式にも近代的な特色があつて新鮮明朗な一種の雰圍氣を持つてゐる。
2. 廣い道路を挾んだ住宅が夫々に綠の生垣を圍らして特徵のあるスタイルを發揮してゐる木材、瓦、ガラス、コンクリート、スレート土などの質と感じと色とが變化に富み、よく統一されて大變美しい。
3. 構圖の上から見ると路の向ふ側の屋根の線が段々斜めに下がつて居り、右端にこちら側の家と樹木がこれを受けて立つてゐるのは畫面を引締めることに役立つてゐる。數本の電柱が空高く突き出てゐることは構圖の單調を破つて居り、白い屋根、赤い屋根、黃色の屋根が近景中景遠景を代表して距離の遠近を說明してゐる。
4. 晴れた夏の日の光が左上から來て、生垣や樹木は暗くなり、路には濃い蔭が落ちてそれが畫面に一層すがすがしさを漂はせてゐる。點景人物を入れたことは住宅街の情景を現はすために行屆いた用意である。
5. **中西利雄氏**　新制作派協會會員（卷末 10 頁參照）

指導

1. 學校附近の往來を寫生せしめる。適當な畫材がない場合は、校舍其の他の建物と樹木を入れた校庭の風景に代へてもよい。
2. 自然の如何なる部分を仕切り、紙面の如何なる位置に描くべきかを研究させることは度々述べた通りである。
3. 目の高さによる地平線の位置を決定し、對象をよく觀察して建物や樹木の高低を定め、直線で當りをつけて輕く下描をする。
4. 下描が濟めば着色をする。初め全體を大きな調子に分け、段々細部へ描き進める。描寫の過程に於ては常に個々のものにつき形狀、大小、色彩、明暗を比較研究せしめ可成寫實的な表現をさせる。
5. 遠近による形と色と明暗の變化に注意させる。空の描寫を投げやりにせぬやう注意させる。特に遠近法について確實な知識を持たせるやうに指導する。
6. 遠近の表現について生徒一般の缺點は遠い物を近い物より高いところに書く癖である。目の高さ（地平線）より下に置いた物體ならばそれでよいが、地平線から上にある屋根や塀の線が段々上つて見えるといふ法はない。この點をはつきりさせる必要がある。



不可　　可

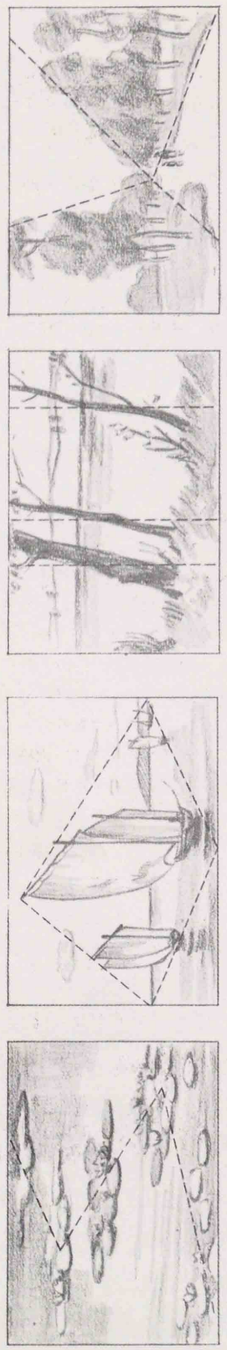
注意

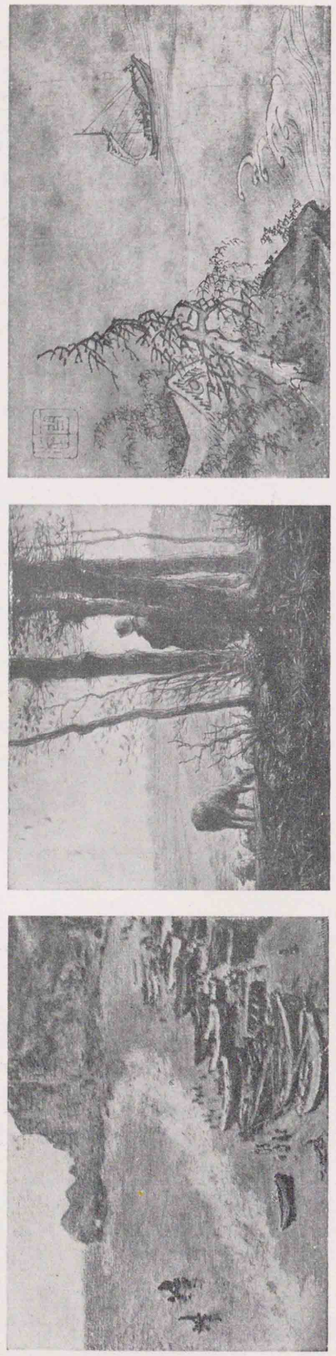
1. 生徒の寫生態度を眞面目に熱心にすること
2. 生徒の個性的表現を尊重し、構圖、筆致等可成生徒獨自の傾向を善導する。
3. 寫生場所のない時は本圖を臨畫せしめる。

準備　筵畫數點

參照　卷末 10 頁

10 往來（參考用）　中西利雄





●1は斜線の電光形構圖である。2は大小變化ある三個の組合せで山形又は菱形的構圖と見ることが出來る。3は垂直線と水平線の交叉形構圖で大小の變化あるスペースがこの畫の趣を增してゐる。4は中心へ斜線が集まりよく統一のとれてゐるX形の構圖である。●下段の三圖は基本的構圖を巧に應用した實例である。

11 風景の構圖 その一 (說明用)

11 風景の構圖 その一 (說明用)

要旨

次課に於て各種の風景構圖を指導する準備として、略畫、寫眞、及び文字によつて說明したのが本課である。

本課では次の課と聯絡をとり風景描寫上の構圖に關する知識を與へるのを題目とする。

說明

1. 構圖とは畫面の組立のことで Composition ともいふ。モデルとなつた素材を如何に構成するかといふことは繪畫上の大きな要件で、このことは前卷靜物の構圖に於ても述べた。
2. 上段四種の圖は挿入の活字によつて說明してゐる通り各種の構圖例で、次課の四つの圖柄に對する構圖の骨法を說明したものである
3. 下段の三圖は何れも東西大家の風景作品を示したもので、左からモネー、ミレー、雪村の作である。
4. **モネーの作品**は所謂カーブによる構圖で、これは又S字形構圖とも呼ばれる。リズムのある不定曲線には自由な面白さがあり、長閑さを感じさせる。曲汀につゞく白い波頭とカーブの尖端に突兀として岬が出て、水平線が現れてゐることは畫面に締りをつけ、且つ前景の船や人影が變化を見せてゐる。
5. **ミレーの作品**は畫面を横に區劃する地平線や丘の線と、畫面を縱に切る樹木の線とが直交して出來た構圖で、水平、垂直兩線の交叉による場合の例である。この際所謂十字形構圖で其の交叉が中央に來ると畫面は餘りに整齊になつて窮屈を感ずるが、この場合は縱横幾本かの線によつて畫面が大小樣々のスペースに區劃され、しかも點景の人とによつて一層畫面の統一が工夫されてゐる。
6. **雪村の作品**は雄健な筆法で樹木と波と船とを描いたものである。船と波と、樹木との方向が、畫面の中心に集つてゐる傾向から見れば、X形の構圖と考へられる。X形の構圖は其の交點を畫面の中央へ持つて來る不動のないものとなるが、これを一方へずらせば變化ありしかも纏りあるものとなる。この場合樹木、波、船夫々の姿には變化がありしきかも大局から見れば一つの親しみ合ひをもつてゐるのである。

モネー Monet, Claude 十九世紀後半から二十世紀へかけての佛蘭西の畫家、印象派の主領として著名である。外光による寫生を多く描いた。

ミレー Millet, Jean Francois 十九世紀の佛蘭西の畫家で巴里郊外のバルビゾンに住み、田園に親しみ農民の生活や農村の風景を畫題にした。

雪村 足利時代の畫僧である。名は周繼、如主と號した。常陸の人で雪舟の筆意を慕つて雪村と號し遂に一家を成した。北宗畫家。

7. 構圖 1、2、3、4 については次の課に於て述べる。又構圖上の說明も同課で補足することとする。

注意

1. 第二卷第三課、第四課の靜物畫の構圖に於て學んだことを想ひ起さしめ、本課の指導と相俟つて風景の場合を理解に導く。
2. 第四課とよく聯絡すること。

準備 各種構圖の風景作品

參照 卷末 11 頁、理論篇 32 頁

12 風景の構圖 その二（説明用）

要旨

前課と聯絡をとり且つ前學年に於ける既習事項を復習して構圖の知識を確實にし、風景の諸構圖を例示して其の構圖法を會得させる。説明教材ではあるが、寫生の場合の參考となり又略畫練習に利用することも出來る。

説明

1. 構圖とは視覺に訴ふべき線、形、色、光等の畫面上に於ける排列で、風景も靜物も其の關係に變りはない。構圖の要素は卽ち美の要素で、これは變化と統一であり、畫面に變化あり統一あらしむるためには均衡、均齊、平衡、律動等の條件を必要とし、其の手段としては次のやうな諸點に留意する。
2. 卽ち、(1) 物の配置を親和の狀態に置くこと、(2) スペースの美に注意すること、(3) 安定の感じを持たせること、(4) 主眼點を置くこと等で、これ等を基礎として各種の構圖が生み出されるのである。
3. 靜物の構圖に於てはモデルの布置排列を自由に動かすことが出來るけれど、風景の場合はそれが出來ない。しかし大自然はあらゆる場合の實例を我等の前に提示してゐるのであるから、居ながらにしてこれを求むることは出來ないが、歩を動かせば希望の構圖は到る處に求め得られる。
4. 上段左の圖は斜線が電光形（前課 1）に組合つた構圖で、其の屈折は遠景程小さくなり且つ角度と長さとに變化があつて働きのあるしかも纏つた感じを見せてゐる。睡蓮の花咲く初夏の池を寫したものである。綠系統の新鮮さに少許の赤を點じ畫面は潑剌としてゐる
5. 上段右は夏の海に浮ぶ帆船を寫した風景畫青い空、綠の海、そして遠近適當な距離を置いて船が走つてゐる。構圖は三角形(山形)又は菱形的構圖と見ることが出來る。

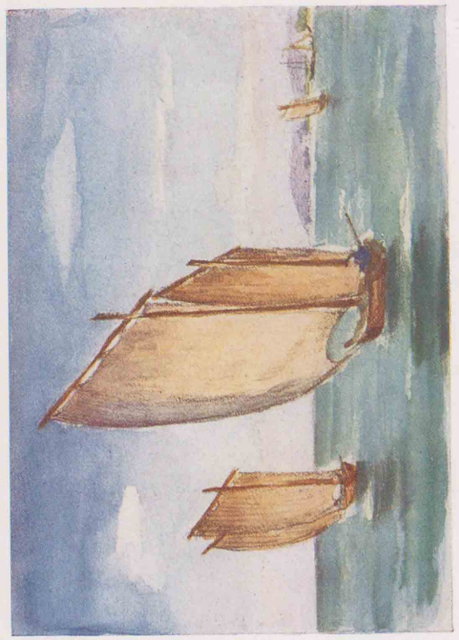
   これは類例の多い構圖で、亦最も安全な模式的構圖といはれてゐる。統一と安定の感じを與へる。しかし山の頂點が畫面の中心線上に近づく程、その畫面は整齊に過ぎて窮屈になることを免れない。
6. 下段左は水邊の樹木と對岸の丘や遠景の山を描いた秋の景色である。垂直線と水平線の交叉による構圖で、これによつて畫面が大小種々のスペースに區劃され、安定のうちに變化を與へてゐる。殊更に新味はないが無難な穩健な構圖といふことが出來る。色調は黃系統の落着いた感じである。
7. 下段右圖は並木を描いたもので綠色の多い風景畫である。X字形の構圖で斜線が交叉したものと見ることが出來る。交叉點が畫面の中央へ來ると繪は窮屈になるが、總じて視覺を畫面に導いて統一と安定とを感じさせる。點景人物は畫面に餘裕を與へる。

注意

1. 理論篇構圖の章及び卷二の第三課、第四課參照、又本卷前課と聯絡して構圖に關する知識を徹底するやうに指導する。
2. 風景寫生に當つては構圖の知識を生かすやうに指導する。

準備 各種の構圖による繪畫

參照 卷末11頁、理論篇32頁、第二卷靜物の構圖



13 夏の風景

板倉贊治

要旨

川添の夏を題材として水彩による風景描寫をなさしめ、且つ季節による色彩の變化を觀察させ、夏の雰圍氣を表現せしめると共に、特に水の描寫を練習せしめる。

説明と鑑賞

1. この繪は川添の風景を寫生したもので、季節は夏、場所は千葉縣御宿（おんじゅく）である。

畫面の廣いスペースを占めてゐるのは川で二條の川岸はリズムあるカーブをなしてうねり、その盡くるところには橋がかゝつてゐる。橋と平行に野や丘や山の線が描かれて畫面を水平に切り、これに對して橋杭や、柵や、水棹が縱に並び、川添の路傍には調子の強い木の繁みが配されて畫面に變化を與へてゐる。構圖上のいろいろな條件を抱容して極めてよく纏つた作品である。點景の配置も要を得てゐる。

2. 色彩上から見ると暖色と寒色とがよく配合し、陽をうけた木の葉の潑剌さ、路上に落ちた蔭の清々しさ、中景の田の面や草の明るさ、溢れるやうな水の多さ、遠山の上の白い雲、それ等が美しく取扱はれて夏の感じを十分に表現してゐる。

3. 描法上から見ると粗いタツチで短時間に纏めた感じが見える。手法は元氣で若々しいがそれでゐて水の表現や點景の描き方に手堅い老巧さを見せてゐる。

指導

1. 學校附近に題材を探して川のある風景を寫生せしめる。本圖は田園であるが、田園のない場合は市中に流れる川や、家屋や樹木を配した川を題材として描かせる。

2. 最初には畫題を決定することである。それには見取枠を用ひ又は指を組合せて自然の一部分を切取り、構圖を工夫する。

3. 對象を十分に觀察しつゝ大體の圖取りをし繪具で描かせる。この場合下圖にのみ頼ることなく常に對象の形、色彩、明暗に注意して筆を進めるやうに指導する。

4. 繪具は必ずしも淡色から順次筆數を重ねないで、最初から適確な色調で描寫し潑剌たる筆觸を現はすやう、白を濫用せぬやう、繪具は濁らぬやう、筆は可成度々洗ふやう夫々注意せしめる。

5. 經驗によれば生徒は下圖をかくために頗る長い時間を要するものであるが、可成早くこれを決定させるやうに、それには小部分に捉はれることなく、大局を捉へて其の大樣を寫すやうに指導する。

6. 餘り廣範圍に亙つて一畫面に各種の畫材を多く取り入れることはよくない。

注意

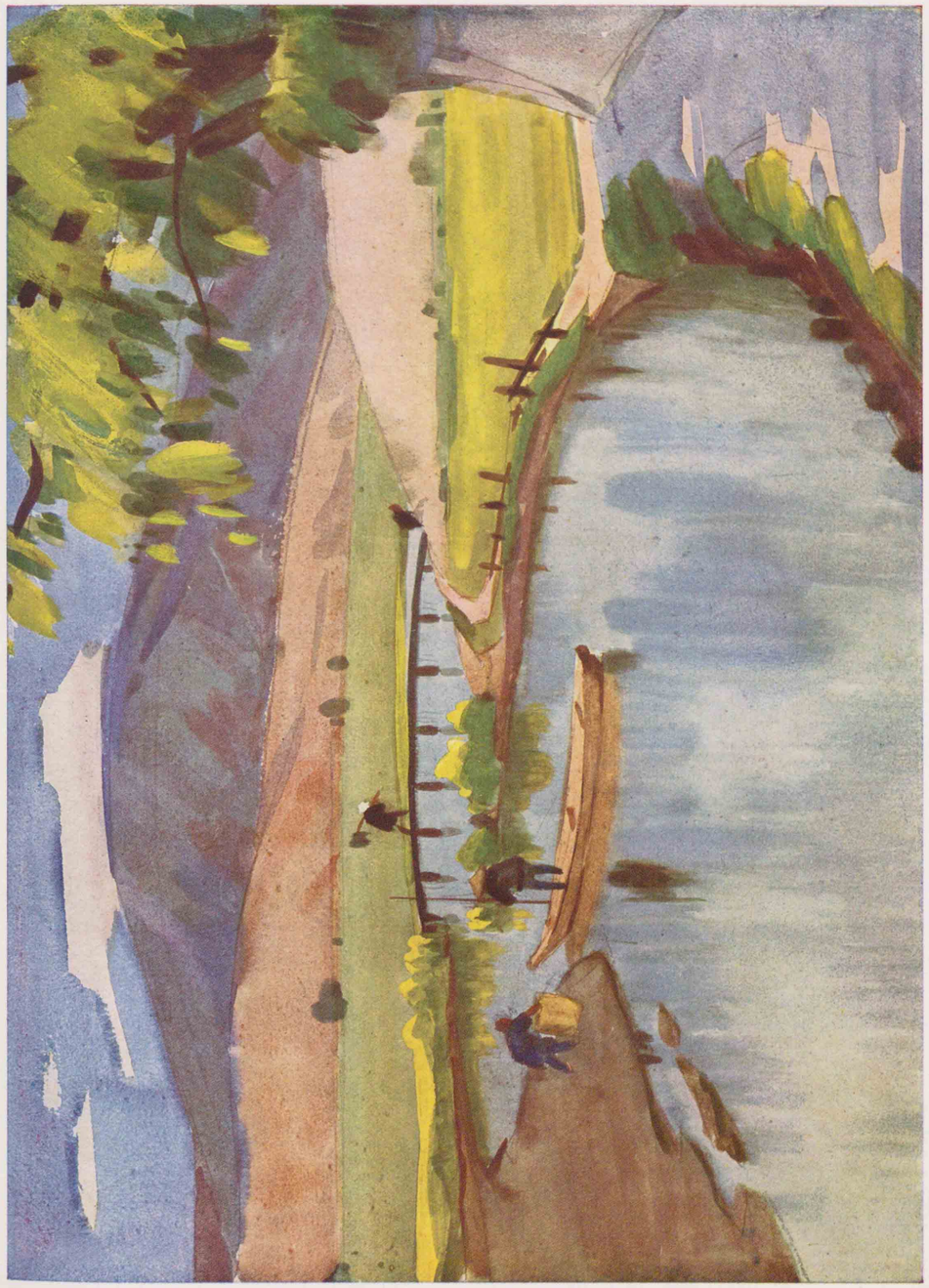
1. 二時間に亙つて寫生する場合、第二時も又最初の寫生と同じ時刻に行はせること。

2. 郊外の寫生に於ては生徒は兎角開放的な氣分になつて不規律になり易いものであるから管理上特に注意が必要である。

3. 成績品は可成一齊に提出せしめるやうに訓練すること。

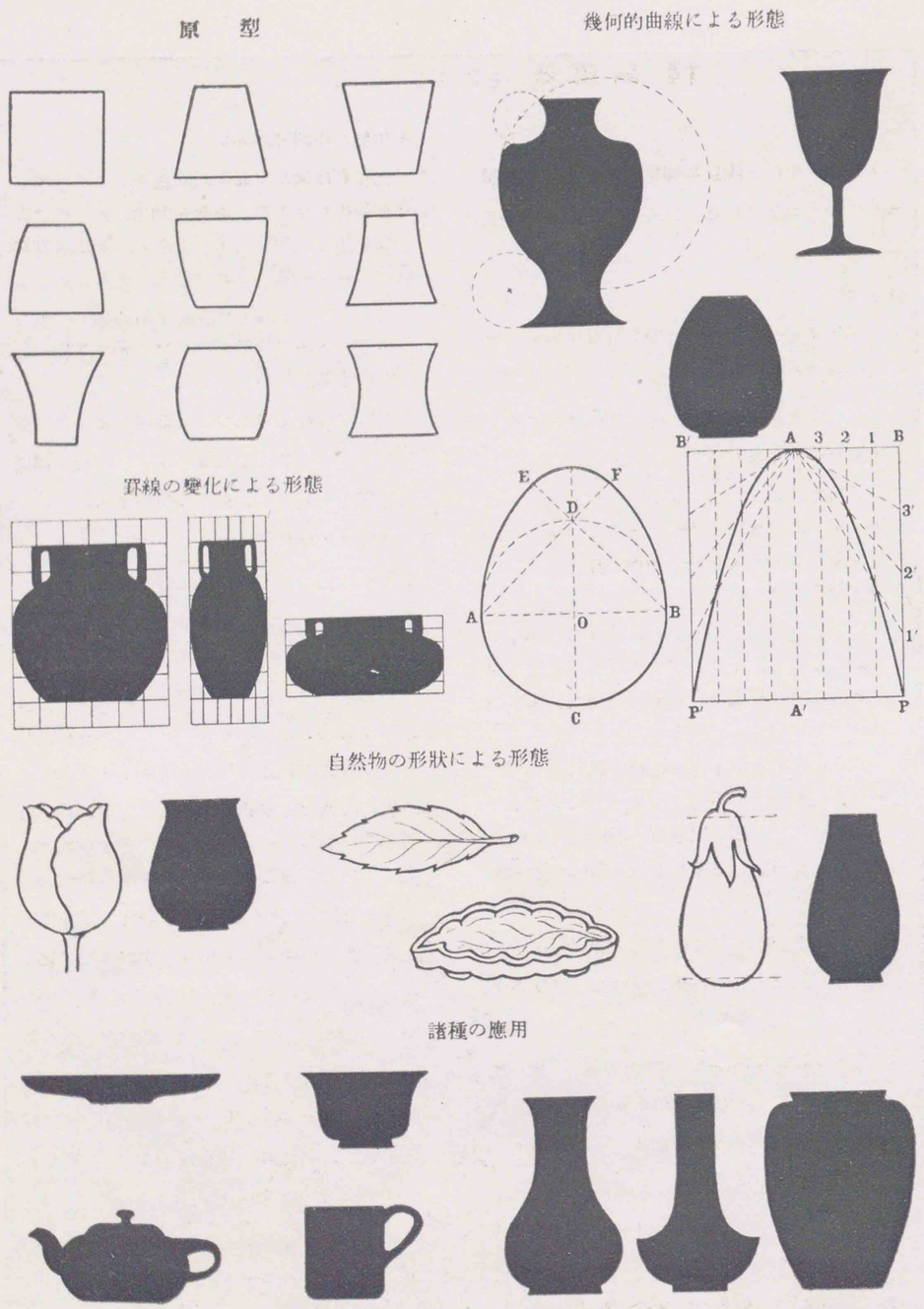
4. 寫生場所を求め得ない場合は臨畫させる。

準備 範畫數點
參照 卷末 12 頁
參考 カット及び下圖は各種の構圖例



板倉贊治

13 夏の風景



14 陶磁器 その一

要旨

次の課に於ける陶磁器圖案の準備として器體構成に關する樣式を知らしめるための說明圖である。

說明

1. 器物は用途の上からこれを分類するに、實用的のものと、裝飾的のものと、兩用共通のものとの三者となる。しかし實際上は實用、裝飾兩樣のものが多いのである。

2. 器物はこれを形式の上から分けると一は平板的のもの、他は立體的のもので、盆、皿の類は前者であり、花瓶、書棚、電氣スタンド等は後者に屬する。

3. これを材料の上から見ると、木竹、金屬、土膠、皮革等があり、又用途の上から見れば飲食器、家具調度品、容器、裝飾品、文房具裝身具、携帶品等となる。

4. これ等の形體を構成の資料上から分けると物象的形體と、人爲的形體との二つになる。植物、動物、人類、天象等に取材したものが前者で、幾何學的形態其の他人爲的に工夫考察した形態を後者とする。

5. こゝに示したものは以上の器物中陶磁器の形體で、其の用途は容器、裝飾品、飲食器等である。

6. **器物の基本形體**は其の種類が極めて多く從つてこれを簡單な基本形に歸せしめることは困難であるが、其の大要を考へると九種となる。上段左の原型がそれで、これをアレキサンダー・サンデエー氏原型といふ。一氏は佛國セーブル陶器製作所の技師長一。すべての器物はこの何れかに屬するか又はそれ等の結合による。これは立面形で、其の平面形は圓、正多角形、楕圓等が多い。

7. 上段右は何れも幾何的曲線による形態で、圓を利用したもの、卵形を利用したもの、及び拋物線を利用したものである。卵形及び拋物線の圖法は圖に示した通りである。

8. 二段の左は罫線の變化による形態で、直交せる縱横各線の長短の違ひによつて各種の器物が出來る。

9. 三段は何れも自然物から取材したもの、即ちチューリップ、木の葉、茄子から夫々器體を考案した例で、花瓶と灰皿である。

10. 下段は各種の器體である。左から皿と水差盃洗と水飲、右の三つは花瓶である。何れも各種の手法を應用した實例である。

注意

1. 器體考案の條件としては、各部の釣合、調和を考慮して安定感を與へることゝ其の器物の使用目的に合致させるといふことである。

2. 器物の圖案は器體を工夫することと、それを裝飾化することとの二つの仕事から成る。從つて色調や模樣をも考へねばならない。

3. 卵形と拋物線との圖法は次の通りである。

卵形 Oヲ中心トシテ任意ノ半徑ノ圓ヲ畫キ直交スル AB・CD 二直徑ヲ引ク、AD・BD・ODヲ延長シ、夫々A、B、Dヲ半徑トシテ弧BF・AE・EFヲ畫ケバ卵形ガ出來ル。

拋物線 矩形 B′P′PB ニ於テ B′B、P′Pヲ夫夫八等分シ、七本ノ平行線ヲ引ク。次ニ B′P′・BPヲ夫々四等分シ、其ノ各分點トAトヲ結ビ、各平行線トノ交點ヲ連結スレバ拋物線トナル。

準備 器物各種

參照 卷末 13 頁、理論篇80頁

15 陶磁器 その二　　山田喜外義

要旨

陶磁器に關する一般知識と、これが施工法の大要を授け、茶器、皿、花瓶の如きものの形體と其の裝飾とに關し考察描寫の練習をなさしめる

説明と鑑賞

1. 陶器を廣義に解釋すると、土又は粉末とした石の一種或は數種を捏ねて成形し、窯に入れて燒成した器物をいふ。燒物、瀨戸物又は唐津物といふのがこれである。

2. 陶器は嚴密にいふとこれを土器、陶器、炻器、磁器の四種に分ける。(理論篇 80 及卷末 13 頁) 何れも燒成の熱度を中心としてこれ等の別がある。即ち土器は火度低く質も脆く、磁器は火度高く質緻密である。これ等の中陶器と磁器とは最も一般的のものであるからこれ等を代表する意味で陶磁器といつてゐる。

3. 上段はコーヒー用の皿と茶碗である。硬質陶器で光澤あり、質は堅牢である。コーヒー器は皿と茶碗とが一組となつてゐるから、その模様には統一がなければならない。これは赤と黄とを兩方に用ひて聯絡あらしめてゐる模様は極めて簡潔ですつきりとしてゐる。手の黑色も非常によい。尙コーヒー器はセツトとして普通半打を一揃とするが、更に盆、コーヒー差し、牛乳入、砂糖壺を添へる場合もある

4. 中段は何れも磁器に屬する皿と茶器である皿は刺身皿の類で矩形の氣のきいた形である周圍の赤の模様は釉藥をかけて燒成した上へ描いたものである。澁い味がある。普通五枚を一組とする。茶器は急須と茶碗で、煎茶用のものである。日本風に洋風を加味した新味のある圖案で所謂染付と稱する手法によつたものである。一揃としては急須一個に茶碗五個を添へ更に湯ざましと茶托を要する。茶托だけを切離して他は何れも同一系統の模様とする。茶器には煎茶器の外、番茶器及び抹茶器がある。番茶器は茶碗も急須も大形が普通である。抹茶器は所謂我國古來の茶道に用ひる。其の道具は多種多樣であるが、茶碗は何れも大形で雅味がある。

5. 下段は花瓶である。素地は陶器でも磁器でもよい。左は青磁色の捻形花瓶で植物の廣葉をレリーフとして添へてゐる。形と色とに新味が見える。右は葉牡丹を資料とした模樣で花瓶の胴から下を包んでゐる。色は綠と紫が主となり淸新な感じを現はしてゐる。

6. コーヒー茶碗と花瓶の兩側にある同樣の形及び模樣は、立體圖案表現上の手法を示したもので、胴の三倍に模樣を展開したのである。

7. **山田喜外義氏**　陶器圖案家（卷末13頁參照）

指導

1. コーヒー器、茶器、花瓶の中一種を選定せしめ先づ形の考案をさせる。形の考案には定規、コンパスを使用し又は紙を切つて型とするもよい。

2. 模樣の資料を決定し、便化排列を考へさせる。樣式は獨創的であり淸新であらねばならない。

3. 本描には不透明の繪具を使用させる。そして器體の全形へ地塗をした上に描かせる。白素地とする場合は紙の地を利用させる。

4. 實物の知識を基として模樣を考案するやうに導く。

注意

1. 器物の圖案については實用をも顧慮することが必要である。

2. 器物表面の模樣と器體の形とが調和するやうにする。

3. 器體の表現手法については特に指導する方がよい。

準備　各種陶器其の他
參照　卷末 13 頁、理論篇 80 頁

16 柘榴といちぢく　　松村　巽

要　旨

柘榴、無花果、布、器物等を組合せて布置排列の研究をさせると共にこれを觀察寫生せしめ水彩による表現の力を養ふ。

說明と鑑賞

1. この圖は卓上に白布を置き、陶器の水差と皿、及び二個の柘榴と四個の無花果とを配したもので組合せも複雜、色彩も典麗である。作者**松村巽氏**はすでに述べた通り文展無鑑査の洋畫家である。(詳細は卷末及び卷二第八圖)
2. 構圖上から之を見ると中心に水差を置き、その左右に柘榴、無花果及び皿を添へて所謂三角形構圖を形成してゐる。しかし三角形の頂點に當る水差の位置が畫面の左方へ寄つてゐるために構圖が一層溫和になり、上部を區切るテーブルラインは畫面を引締めることに役立つてゐる。
3. 色彩はまことに豐である。布と皿の白に對して赤や紫や綠や青や褐色が美しい階調をなしてゐる。
4. 溫和な筆觸、着實な描法によつて布、皿、水差、果實の質が夫々によく表現され、畫面が明るく高雅で一種の氣品を感じさせる。

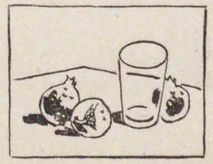
指　導

1. 教室內數箇所にモデル臺を置き、生徒を分團式に取扱ひ、これに器物、果物、布等を與へて自由に配置せしめ構圖の指導をする。
2. モデルの形狀、大小、色彩、明暗、質感につき觀察しつゝ畫用紙上に配置の當りをつけ位置、大小の比較を誤らぬやうに鉛筆を以て形の大要を寫し、後繪具を以て描寫する。
3. 最初からモデルに卽した寫實的の色を用意して主要な部分から順次着色し、次に布、影バツクに及び、更に又器物果物に加筆を繰返して仕上げる。
4. 全體の調子に注意して描き進め、一部分だけ强きに失し又は弱きに傾いて畫面の均衡を破らぬやう、又筆觸も部分的に特殊な表現をして全體の統一を亂さぬやう注意をする。
5. 署名(サイン)のことについては今迄注意をしなかつたが、サインは畫面の一隅へなるべく畫面の美を傷けない程度に、畫面に調和した色目を以て書くべきで、サインも亦畫面構成上の一要素である意味を指導し、總じて華麗な色、大きな文字、强い調子を避けるやうにさせる。

注　意

1. 柘榴や無花果が得られない場合は、葡萄、柿其の他の果物を以てこれを代用する。器物も自由に適當な物を用ひればよい。
2. 臨畫の教材として取扱つてもよい。その場合は構圖、色調、筆法等手本をよく觀察しこれを忠實に描寫するやうに心がけしむることが必要である。
3. 筆をよく洗い、パレツトを清潔にして發色を美しくすることに注意する。

準備　果物及器物、範畫等
參照　卷末 14 頁
參考　下圖は構圖例二種



16 柘榴といちぢく　松村　巽

17 獸類のスケッチ（參考用）　寺内萬治郎

17 獸類のスケッチ（參考用）　寺内萬治郎

要旨

獸類を鉛筆又は鉛筆淡彩によつて速寫させ各種の姿態と特徴とを研究させようとするのが眼目である。

說明と鑑賞

1. この圖は動物寫生の參考用として載せたものである。八種の獸類が夫々違つた姿勢で扱はれてゐる。
2. **寺内萬治郎氏**は第一卷に於て柿を、第二卷に於てチューリツプを描いてゐるが、氏は東京美術學校出身の文展系洋畫家で、舊帝展及び新文展で審査員を勤めた。（詳細は卷末 16 頁及び卷一第二十一圖）
3. 上段左は木柵の中の豚である。鼻と口とが其の特徴を示してゐる。相當肥滿した豚である。

右は二頭の山羊、顏が如何にも溫和であり、大きな角と髯に山羊の特徴を物語つてゐる。立つたものと座つたものとが草原に遊んでゐる姿である。

4. 中段左は象、その長い鼻や丸太のやうな脚は象の特徴であり、これを正面から寫してゐる。

中央の犬は日本犬である。日本犬にも色々な種類があるが、これは最北系の秋田犬である。耳の立つてゐるところや尻尾を卷いたところが特徴。

右は母猿が子猿に乳を飲ませてゐるといふ特殊な場面である。親子親愛の情がよく表現されてゐる。

5. 下段左は虎の圖である。鉛筆の强い筆法がこの猛獸の表現に適はしい。

中央の圖は馬である。草を食ふ時の前脚を張り後脚をゆるめた自然の姿。

右下の圖は猫の眠つたところのスケツチで其の下にあるのは座蒲團である。

6. 何れも短時間の寫生であるが簡素な筆致よく獸類の特徴を捉へて餘すところがない。

指導

1. 一時間に二種又は三種を描く程度の略筆を以て寫生させる。
2. 動物園へ引率することが出來れば何よりであるが、出來ない場合は路傍に立つて車を引く馬や走る犬、田に働く牛又は生徒の家から犬を連れて來させて寫生させる。
3. 田の馬や飼つてある羊などは、動くけれども、暫くすると又もとの姿勢にかへるから、その時によく見て畫くように注意を與へてをく。
4. 鉛筆を以て速寫する。始終動いてゐる姿を寫すのであるから、手早く對象の特徴を看取し姿勢の大要、各部分の割合を記憶に留めて描寫させる。
5. 教室へ歸つてから淡彩の着色をさせるのもよい。

注意

1. モデルを自由に求めることは困難であるから、宿題としてこれを課し、各自の家庭に於て或は街頭や田園に於て寫生させてもよい。
2. 附近の牧場等へ出かけて寫生するもよい。
3. 臨畫の取扱をしてもよい。

準備　範畫數枚

參照　卷末 15 頁、16 頁

18 犬　　清水良雄

要旨

犬を寫生させて淡彩によるこれが表現の力を養ふと共に獸類の描寫法につき其の大要を會得せしめる。

說明と鑑賞

1. 本圖は草原に立つ犬を寫生したものである犬はセツターがかりの雜種、勇敢で强健な體姿である。筆者は**清水良雄氏**、いつもながら氏の清新明快な作品である。（清水氏に就て詳細は卷末及び卷一第十七圖參照）

2. 一頭の犬が前方を正視し、草原に立ち留つた姿勢である。しかし將に次の體勢に移らうとする動きが現はれてゐる。後脚の一方は前に他方は後に踏張つて構圖の上からも畫面に變化を見せ、上にはね上つた尾は空間の單調を破つてゐる。

3. この作品について特に感ずることは描線の巧さである。鉛筆が自由自在に驅使されて、質も感じも實によく表現されてゐる。眼の光、鬚、毛並、筋肉、明暗が緩急强弱の描線によつて說明され、生生した健康な肉體と血行とを感じさせる。草の描寫にも行屆いた注意が拂はれ、夫々の草が適當な筆法によつて表現されてゐる。

4. 鉛筆描寫の上に淡彩を施してゐる。犬の體には餘り色彩の變化はないが、草には濃淡があり、色の違ひもあつて感じの表現を助けてゐる。草原を越えて岱赭色の土が見え、これが段々淡くなつて遠方を省略した表現上の手法も味ふべき點である。

指導

1. 犬を繫いで寫生するか、或は犬小屋に入れて寫生するか、何れにしても動物描寫は、モデルの取扱に苦心を要する。

2. 一定した姿勢を望むことも出來ない。場合によつては横臥した犬を寫生せねばならないこともあらう、正面から描かねばならぬ生徒も出來よう。

3. それで豫め犬を自由な姿勢にし、動くままに任せて置いて各自の好む姿勢を捉へさせるのである。その姿勢で何時までもゐるものではないが、動いては居つても其の體軀の割合や個有の形狀は變らないのであるから、常にモデルを觀察しつつ描き進めさせる。

4. 初め輪廓をとり、下描をし、十分訂正してから線描陰影に及んで、最後に着色をする。主題は犬であるから先づこれから描き始め漸次草や地面に及ぼさせる。バツクは省略させる方がよいであらう。

5. 動物描寫に際して生徒の一般的の缺點は頭部を大きく且つ綿密に描き過ぎることと體が硬直したやうになることである。前者については豫め姿態の割合を測らせ、後者については筆法に注意させる。

注意

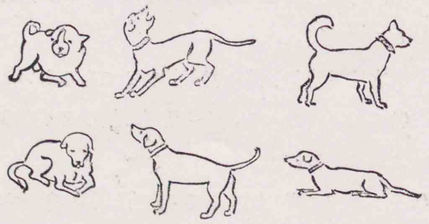
1. 犬が得られない場合は牛、馬等其の他の動物を以て代用する。剝製の兎、猫、栗鼠等を描かせてもよい。

2. 本圖を臨畫教材として取扱つてもよい。その場合は鉛筆の使ひ方、着色、其の他すべての條件を手本中心に研究するやうに指導する。

準備　犬其の他及び範畫

參照　卷末 17 頁

參考　下圖は犬の姿態各種



清水良雄

18 犬

19 舟　　藤島武二

要旨

舟を主題として水彩による海景の描寫をなさしめ、且つ季節及び時刻による色彩の變化と水の表現につき工夫せしめる。

說明と鑑賞

1. この作品は海上を漕ぐ一艘の小舟を主題として海景を寫生したもので、場所は臺灣の海、季節は初秋である。午後の陽は遠く一連の岬を照してをり、海上は濃い群青色に光つて、特殊の形をした臺灣舟が一艘、長い艪を持つた支那服の漁夫が一人、それに紅い帆と鉛色の帆船と二羽の水鳥とが題材として扱はれてゐる。
2. 畫面に横溢せる海洋の雄大さと、男性的な壯快さとが先づ感得される作品である。畫面の上部僅かに空を見せただけで、可成廣く海を入れて雄大な感じを出し、その變化を圖るために三艘の舟を配して更に形と色と方向とに工夫を示し、水平線上に岬を見せてその單調を緩和してゐる。
3. 荒削りのやうに見えて、細心の注意が拂はれた作品である。ぐいぐいと太い鉛筆で無雜作に描かれた水が潮騷の音を傳へ、前景所々に塗り殘された紙の素地が海のしぶきや波がしらを語つてゐる。
4. 群青の海に明るい舟板、綠と橙との取合せもまことに美しく、船上の漁夫の黑い着物と黃色の笠は周圍の色彩からくつきりと浮き立つて畫面を引締めることに効果を擧げてゐる
5. 原畫はワツトマン紙の十六切に描かれた水彩スケツチである。濃い鉛筆で輪廓をとり、繪具が大膽に塗られてゐるが流石に達筆と才氣とを以て他の追隨を許さぬ藤島氏の畫風が遺憾なく發揮されてゐる。
6. **藤島武二氏**　は東京美術學校教授、現代洋畫壇の耆宿であるが、其の作風が常に新鮮潑剌たることも又著名である。（詳細は卷末18頁）

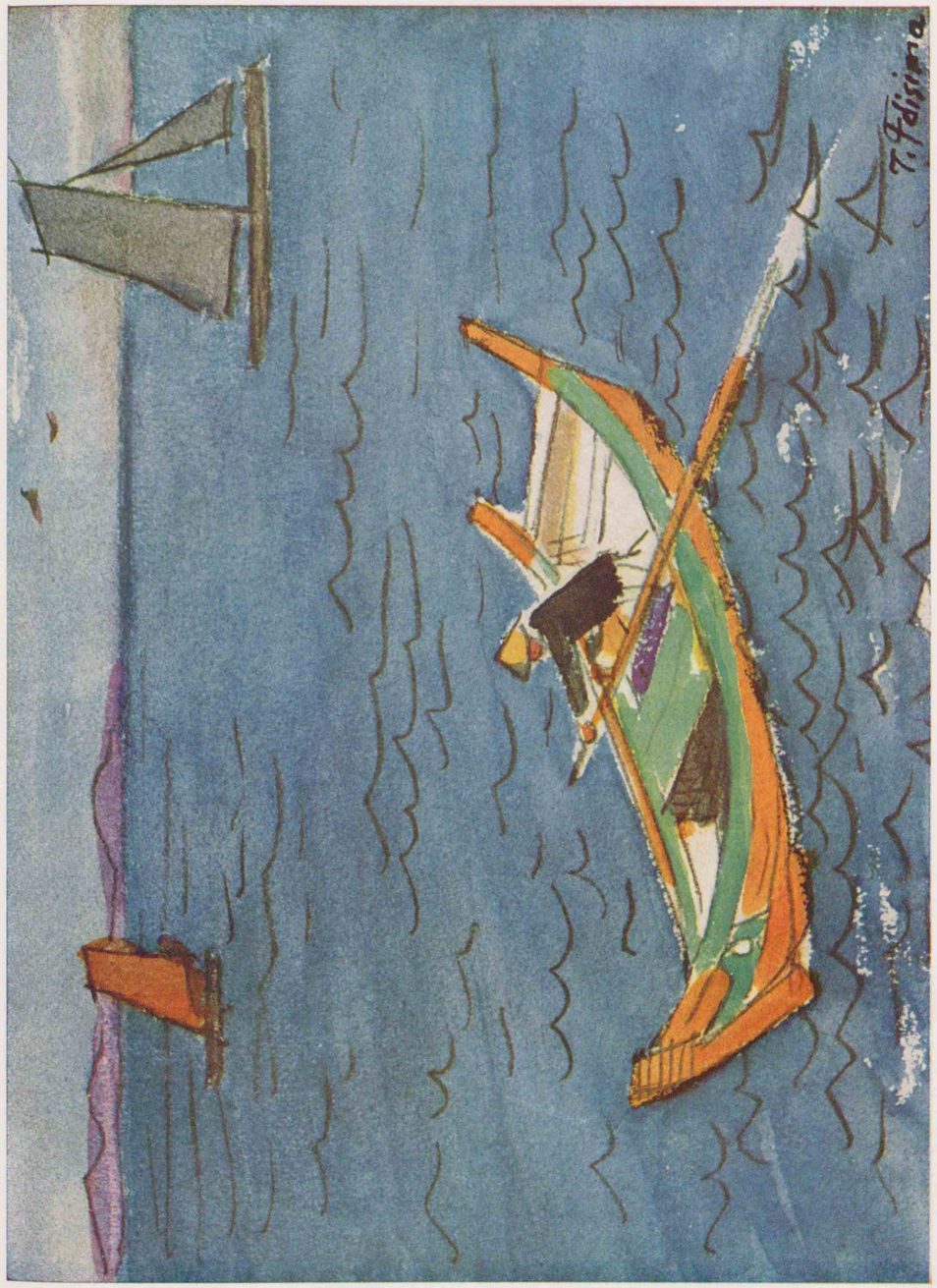
指導

1. 學校附近に海景を求めることは概ね不可能と思はれるから、海に遠い處はこれを湖水、河川、沼澤にかへて寫生せしめる。
2. 見取枠を用ひ、又は指を組合せて自然の一部を切取り、構圖を決定させる。
3. 題材について十分に觀察しつゝ大樣を圖取りし、繪具によつて描かしめる。圖例の如く鉛筆を濃く用ひてもよし、又純水彩風に描いてもよい。
4. 色彩、明暗、調子について注意を怠らぬやう特に遠近感の表現に一層留意して描き進める
5. 細密描寫を避け、可成大局を捉へて明快大膽に描寫するやうに指導する。

注意

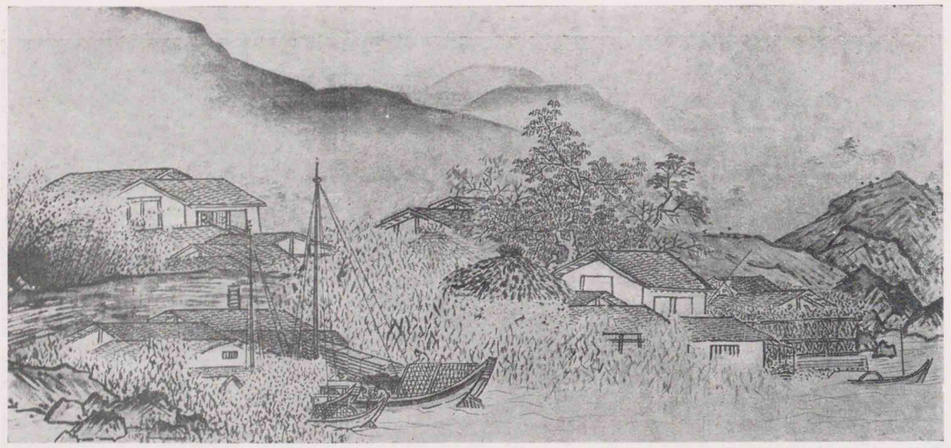
1. 水の色の表現は殊にむづかしい。晴れた日の水の色に於ても太陽の位置の關係で、必ずしも明るく感じない場合がある。
2. 適當な題材を學校附近に得られないときは宿題としてこれを課し、自由に寫生せしめられたい。
3. 本課は臨畫教材としても絶好のものである

準備　範畫數點
參照　卷末 18 頁

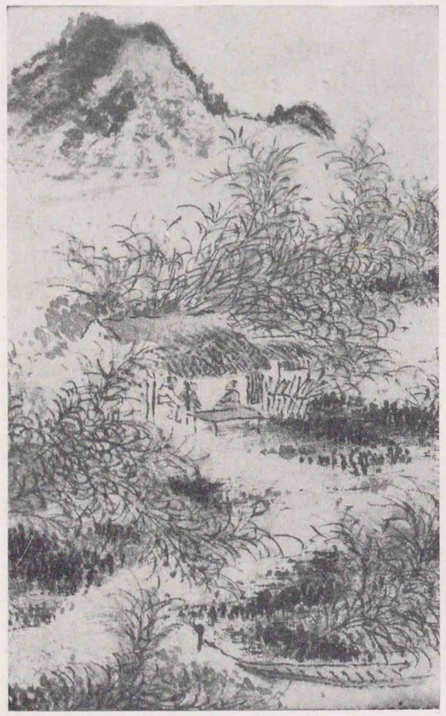


19 舟　藤島武二

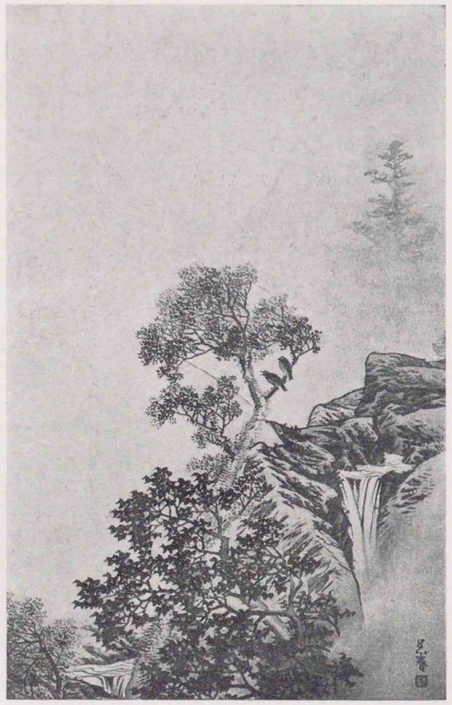
1



2



3



● 1は僧雪舟(北畫派)筆、2は田能村竹田(南畫派)筆、3は松村月溪(四條派)筆、三圖は各その趣を異にしてゐる。これによつて風景の描寫にも種々の表現法のあることがわかる。

● 21秋の風景は寫生を基礎にした毛筆畫で、和紙に畫いてあるから、そこに和紙獨自の妙味を味ふことができる。

20 山水圖 (說明用)

要旨

次の課に於て毛筆による風景畫を扱ふのであるが、これと關聯して日本畫に於ける山水畫一般の概念を授けようとする。

說明と鑑賞

1. 洋風繪畫では題材によつてこれを風景、人物、靜物等に大別し、日本畫ではこれを山水人物、花鳥等と呼んでゐる。卽ち山水圖は洋風畫に於ける風景畫に相當するものである。支那では風景畫は多く山と水とを描いたのでかくいふやうになつた。

2. 我國に於て山水畫の發達は比較的遲い。美術史に於て明なやうに山水畫として獨立したのは鎌倉室町時代宋元畫の傳來以來である。最初北宗畫が入り、後江戸時代の初期に南宗畫が傳はり、次で圓山四條派が發達するに及んで山水畫の領域が廣くなつた。

3. 1は**雪舟作の山水畫卷**の一部である。これは紙本淡彩、幅一尺三寸五分、長さ五丈四尺の長卷で、雪舟傑作中の傑作と稱せられる。全卷を四季に分けて描いてゐる。支那西湖の佳景を骨子として描いたものであらう。

西湖は本名錢塘湖といつて浙江省の杭縣城の西にあるもので支那著名の勝地である。

本畫卷は中心に湖面を展開して、楊柳、草廬、舟檝を取扱ひ、それに沿ふ陸上の山水を前後に按排してゐる。特に浙江、江西兩省の特種の風景を偲ぶものがある。卷末の「文明十八年嘉平日、天童前第一座雪舟叟等楊、六十有七歳筆」の款識も注意すべき處である。公爵毛利元昭氏の藏品となつてゐる。本畫卷は又狩野安信、狩野芳崖に依つて模寫せられ、狩野家の粉本として畫學生の貴重な參考資料になつてゐる。

圖示したものは其の一部で、山水、樹木、民家、草廬等が雄勁な筆致によつて描かれてゐる。季節は秋である。所謂北宗畫に屬する繪畫で描線が强く、しかも直線的であるところに特徵がある。詳細は卷末に述べる。

4. 2は**田能村竹田筆の船窓小戯帖**の松陵渡圖で、紙本淡彩、竪七寸一分横四寸三分の小品竹田五十三歳の時の作である。

竹田が文政十二年四月二十三日船で豐後の佐賀の關を出發して海路上京の途次、伊豫の三津濱を過ぎ安藝の忠海を通り、三十日に播磨灘で暴風に逢つたことどもを畫いたものが船窓小戯帖で、全六圖の中この圖はその二段目の松陵渡圖である。卽ち四月二十四日青嶼に泊り雨に遭つて蓬底に燭を把りながら、無聊を慰めるために描いたものでこれは松陵の渡で船から上つて附近の風光を賞してゐる彼自身を題材にしたと見るべきであらう。

本圖は荻蘆柳楊のほとりに一屋あつて高士談笑の樣を畫き、前景に小舟を置き、遠景に山を配したもので、其の構圖、筆致共に磊落にして不羈、自由にして淵達、南畫本來の畫境を體現した作品である。しかも自ら畫中の人となつて感懷を叙す、正に竹田の詩人たる一面を遺憾なく語つてゐるといへよう。

南畫は氣韻生動を生命として寫形よりも寫意を目標とした。

5. 3は**松村月溪筆の雨雪山水圖**雙幅之中雨之圖である。月溪は又吳春とも號した。男爵故藤田傳三郎氏の舊藏にかゝる作品である。

絹本淡彩、各縱三尺七寸二分、幅二尺四寸、雨の樹梢に佇む二羽の山禽に自ら雨意あり、本圖としてはこの點景的小禽はなくてはならぬものである。

6. 北宗畫、南宗畫、四條派及び雪舟、竹田、月溪については卷末に詳述する。

注意

1. 繪畫史をまとめて取扱ふことにすれば北畫南畫、四條等も其の時に說明し、作者雪舟、月溪、崋山についても其の時詳述することが出來るから、こゝでは特に時間を設けないでもよい。簡單な解說に止める。しかし繪畫史を取扱ふ機會がなければこれを一時間教材として取扱ふのがよい。

2. 實物幻燈機を利用して印刷のよいものを見せたいものである。この外同じ畫家の作品複製を數點づゝ用意して置きたい。

準備 複製畫數葉

參照 卷末 19 頁、理論篇 119頁、136頁、146頁

21 秋の風景（參考用）　結城素明

要旨

本圖は秋の風景を寫生せしめる場合の參考に供し且つ日本畫の趣味と常識とを與へる。

說明と鑑賞

1. 作者結城素明氏は東京美術學校日本畫科の主任教授で現畫壇の巨匠である。（詳細は卷末21頁參照）
2. 圖は山村に於ける溪流と橋と樹木とを主題とした寫生畫で、秋の風景を扱つたものである。畫面の中央に木の橋があり頭に物を載せた人と子供と犬が通つてゐる。
3. 秋もまだ早いのであらう、草は綠の名殘を留め木は落葉を始めてはゐないが、季節に敏感な楓やどうだんは既に色づき、水はつゝましく流れて秋のさゝやきを傳へてゐる。

   澄んだ大氣の中に立つて山の秋を呼吸する思がある。
4. この描法には一種の趣と特色がある。和紙ににじむ墨色の美しさ、抑揚ある描線の自由さ、沒骨式筆法のふくよかさ、處々に施された色彩の變化、それ等が沌然として趣ある畫境を形成してゐる。別に勾勒法によらず沒骨式に捉はれず、南畫でもあり、四條でもあり、そして又洋畫ともいへるであらう。この新らしい表現の形式は圖畫教育に於ける毛筆寫生に對して一つの暗示と使嗾とを與へる。
5. 圖畫教育に於ては日本畫も洋畫も其の區別はない。材料と描法の如何により所謂日本風にも洋風にも表現形式は色々あるのであつてこれを適當に按排することがよい。

指導

1. 題材は必ずしも山村に限らない。樹木、河川、沼澤等を求めて題材とさせる。
2. 用紙は畫用紙又は日本紙とし、何れもブロツク又は畫板に貼つて使用する。この上に鉛筆で淡く主要な部分のみを下描し、それを目安として墨で描寫させる。墨は日本墨でもよし又繪具の黑でもよい。
3. 次に着色する。繪具は水彩繪具を用ひることとする。最後に署名をさせる。これは日本風の味を出すためには濃い墨で畫くのが普通である。

注意

1. 畫用紙に畫くのは取扱上便利であるが、日本紙に畫くのは扱ひにくい。しかし畫用紙より日本紙の方が面白味がある。
2. 日本畫描法に於ける沒骨、勾勒の二形式について簡單に說明し、且つ日本畫の諸派中、四條、南畫、及び洋畫についての概念をも與へる。これは理論篇に詳しく解說してある。
3. 日本畫が風景や靜物を扱ふ場合に紙の地色を殘して餘韻を出すこと其他日本畫の所謂日本的なる點にも多少觸れることがよい。
4. 現場に於て直接寫生するとしては、鉛筆又は水彩による方が便利であるから、最初これによつて寫生せしめ、後教室內に於てこれを日本紙による毛筆畫に直させてもよい。
5. 本圖は參考用として載せたものであるから場合によつては寫生の取扱をしないで、單に說明のみに留めてもよい。

準備　日本畫の作品數點
參照　卷末 21 頁、理論篇 49 頁、57 頁
參考　下圖は秋の風景構圖二種

22 賞牌　　大智　浩

要旨

メダル、カツプ等の圖案を描かしめて賞牌類の一般知識を授け、考案創作を練習せしめる。

説明と鑑賞

1. 賞牌 Medal は學術や運動の競技に於ける優賞の記念章で、金屬又は陶製を以てつくる。最近は單に徽章を意味するものをもメダルと稱するやうになつた。

　劍道部メダル、辯論部メダル等は優賞牌でもあり又部員章でもある。

2. カツプ Cup はもと優賞せる運動選手の名譽をたゝへて之に與へたものであるが、今は學藝上の優賞者に對しても與へるやうになつた。金銀其他の金屬を以てつくる。カツプも又賞牌の一種である。

3. 上段の五個は何れもメダルである。弓道部のものは方形の金屬板に矢の根を浮彫にしこれに弓の文字を現はしたもの、グライダー部のものは圓形板を地球に擬し、これに緯線經線と雲を配し更に金又は銀を以てグライダー一機及びSKYの文字を浮かしたものである

4. 次は蹴球部用のメダルである。球形は蹴球ボールを意味し、その上に荒鷲と To Your H nour —貴君の名譽のために—の文字を入れたもの、其の下は音樂部のメダルでこれに關係ある高音部と字記號と五線とを正方板の上に刻してゐる。

　又右上は藝術部用のメダルである。ベークライトの素地の上に銀製メダルを裝置したもので、美術的の賞牌である。

5. 中央に大きく描かれたのは野球用のカツプである。(上部にかいたものはカツプの平面圖下部にかいたものは臺部の平面圖である。)

　基部の一番下の黑い部分は石、其の上が銀其の上はチーク(木材)である。無論カツプは銀製であらう。

6. 下段左は新型のカツプである。全く幾何的の曲線直線を用ひて構成されたもので、其の上の餘白の墨繪は、このカツプを投影圖法を以て示したもので、立面圖、平面圖、底面圖の三部が現はれてゐる。

7. 右端は通常の形のカツプである。基部に木製の臺がつき其の上に銀製のカツプを載せてゐる。形としては新味がないが、洗練された優美な形として一般に喜ばれてゐる。

8. 大智　浩氏　(卷二第十五圖參照)

指導

1. 生徒に考案せしめるにはこの中どれを見本としてもよい。但し形や意匠をそのまゝ眞似ることはさせないやうに指導する。

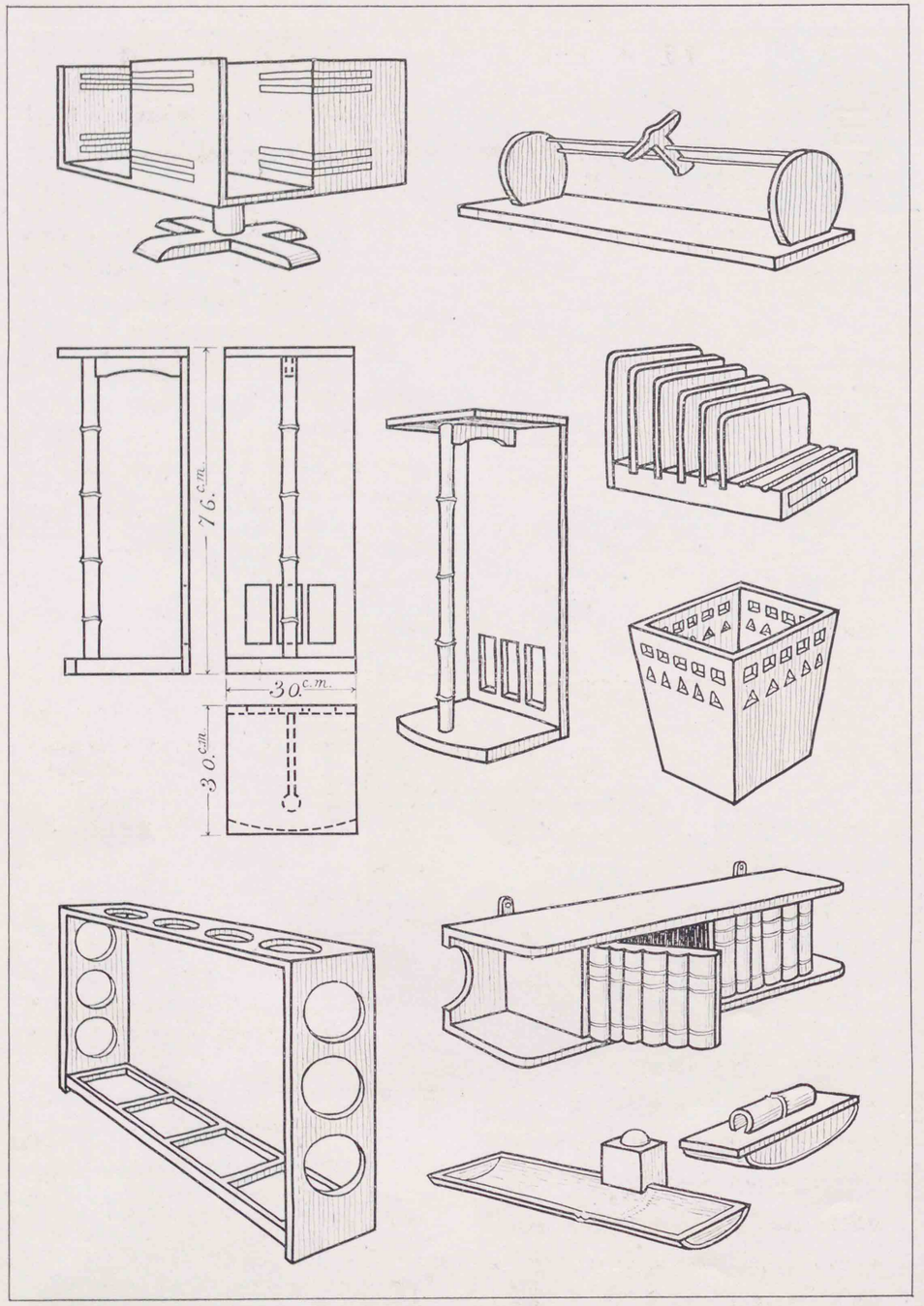
2. 最初には大體の形狀、意匠、色彩を考案しそれを見取圖風に略畫を以て現はし、これを基として投影圖風な表現形式によつて圖示する。メダルのやうに餘り厚味のないものは平面圖のみで現はしてもよい。尙又本圖左下のやうに繪畫風に表現させてもよい。

注意

1. 現代は賞牌として金銀其他の諸金屬、木材、陶器までも素材として使用するやうになつた
2. 立體圖案の描寫には定規やコンパスが必要であるから、生徒に用意せしめる。
3. 生徒各自が持合せてゐるメダルをも持參せしめて圖案上の參考に資せしめたい。

準備　メダル、カツプ各種
參照　卷末 22 頁

22 賞牌　　大智　浩



●木工品は材料の性質と用途とを考慮して其の工作法を理解し易く圖案すべきである。

23 木工品

上山　藹

要旨

本立、置物臺、杖立其の他の木工品圖案を觀察せしめ、これを說明して木工圖案の一般的知識を與へ次課の家具圖案描寫の準備とする。

說明と鑑賞

1. 木工圖案といふのは廣く木材を主要材料として製作した日用品、工藝品の形狀、色彩、構造を工夫描寫することで其の種類は頗る多い
2. 木工品の小なるものはペン皿、玩具の類から大なるものは机、本箱、其の他家具に至るまで其の種類が多種多樣である。何れも素材を加工して組立てゝ後着色塗裝して仕上げる
3. 上段左は廻轉式本立である。萬字形に板を仕組んで、これに本を立て自由に廻轉して何れの本をも拔きとることの出來るやうに工夫したものである。書齋用又は公衆共覽の本立等に應用する。
4. 右は本立である。底板の上に二枚の側板を立てゝこれに二本の銀色パイプを渡し、左右に移動する飛行機形の駒によつて常に本をおさへておく裝置である。
5. 中段左は花臺である。上下及び背面の三枚の板を組み合せ、竹の支柱を立てゝ體裁を整へ堅牢度を增す。背面の板の下部には模樣を切拔いて裝飾とした。構成に新し味があり竹を用ひたところに日本趣味も加はつてゐる置物臺をも兼用することが出來る。圖示したものは正面圖、平面圖、側面圖及び見取圖である
6. 右の上は帳簿立、下は植木鉢カバーである。帳簿立は厚みのある木材を臺とし、これに六枚の板を立てゝその間に帳簿を挾む。臺に彫られた二條の溝はペンを置くところ、正面には小抽斗をつけてゐる。植木鉢カバーは四方轉び形、透し彫の化粧鉢である。屑入としてもよい。
7. 下段左は傘立である。ステツキ立にも兼用出來る。板を枠組として上板に四個の圓を切拔き、これに應ずる四個の區切を底板につける。こゝに一人一穴づつ四人分の傘立とすることが出來る。側板の穴は裝飾のために切拔いたものである。
8. 右は吊戸棚と、ブロツターとペン皿である。吊戸棚は扉は子供部屋用、人形其の他輕いものを入れる。孤形に面をとつた板を張つたもので洋書の如く僞裝したものである。

   ブロツターは竹を主材としたもの、ペン皿も同樣である。これに附屬した角形のものはインクスタンドで、木製である。中を刳つてこれにインキ瓶又はブリキ罐を入れる。

7. この圖案の作者**上山藹氏**は東京美術學校出身の圖案家で、現に三越室內裝飾部にあつて圖案製作に從事されてゐる。(卷末參照)

指導

1. 木工品圖案は用途と使用材料とを考慮し合理的に設計することが必要である。美しいことと堅牢といふことを按排する。
2. 其の表現樣式は投影圖法によることを本體とするが便宜、等角圖、傾斜圖又は見取圖風に描いてもよい。

注意

1. 本課は次課の準備教材であるからこれを合併して同一時間內に扱ふことにする方がよい
2. 作業科工作との聯絡を十分にすることが必要である。
3. 次課金工品及び家具との聯絡を考慮する。

準備　木材小工藝品數種

參照　卷末 23 頁、理論篇 105 頁

24 金工品　　羽野禎三

要旨

燭臺、置物、ブツクエンド、盛器、其の他の圖案を描かしめて、金工圖案の一般的知識を與へこれが考案創作を練習せしめる。

説明と鑑賞

1. 金工圖案といふのは廣く金属を材料として製作した日用品、工藝品等の形狀色彩構造を工夫描寫することで、其の種類は多種多様である。
2. 金属器具の製作には各種の方法がある。鍛金、鑄金、彫金が重なる別け方で、これ等の方法が、銅、鐵、亞鉛、金銀其の他を材料として行はれ、種々の方途が決定する。
3. 上段左は燭臺、銅に鐵を使用し、簡單な工作法によつて出來る圖案である。鐵の代りに太い針金を使用してもよい。馬の背形に曲げた鐵は安定の感を與へ、又把手としても便利である。
4. 中央は金属を材料として作つた造花である黑いところは金網、茶色は銅、青色はニツケル、石又は硝子玉を嵌入、社に掛け又は机や床に置いて裝飾とする。
5. 右はブツクエンドである。眞鍮、鐵等一枚の板金の中央を切拔いて折りかへせば出來る幅、高さ十五糎程度とする。
6. 二段目左は蝸牛形置物、少年の勉强室の本箱や机上に置く裝飾物である。金属の彈力性を利用したもので、時計や蓄音機の古ゼンマイ又は眞鍮、銅、鐵の帶金を使用する。胴はニツケル又はブリキ、角は留針、各部を半田附してエナメル塗りとする。
7. 右はインクスタンド、銅、鐵、青銅等の胴に二つの口をつけ木製の蓋及び摘みをつける脚も同様である。胴は鑄物でもよし、鍛金でもよい。落(オト)しは硝子又は石、若し生徒に製作させる場合は小さな湯呑等を利用してもよい簡易な鑄物としてはアンチモニーがよい。
8. 三段左は盛器である。青銅の鑄物又は鐵、銅の鍛金を以て造り、臺は木の塗物、果物等を盛るに用ひる。徑三十糎前後の鉢である。
9. 右はブロツター(インキ吸取器)、銅板、眞鍮板等を材料として作る。生徒は製作させるやうな場合は丸い空鑵を切つて其の曲面を利用することも出來る。糸鋸で透し模様を入れれば尙よい。
10. 四段左はシガレツトケース(卷莨入)である銅又は眞鑄の板金工によつたもの、摘物、覆輪は銀、之は竹細工としても簡單で面白く出來るであらう。長さ十二糎、幅八糎位である。
11. 右は電氣スタンド、笠はニツケルとして反射度を强くし、支柱は青銅又は眞鍮、臺は金属又は木、青玉は硝子又は石である。高さ三十糎位である。
12. 下段左隅は灰皿である。青銅の鑄物、板金工により隅を鑑附とするも可。蟹を圖案化したものである。長さ十五糎幅八糎位である。
13. **羽野禎三氏**　東京美術學校出身の新進圖案家で、現に母校に勤務し後進の誘掖に努められつゝある。(詳細は卷末 25 頁)

指導

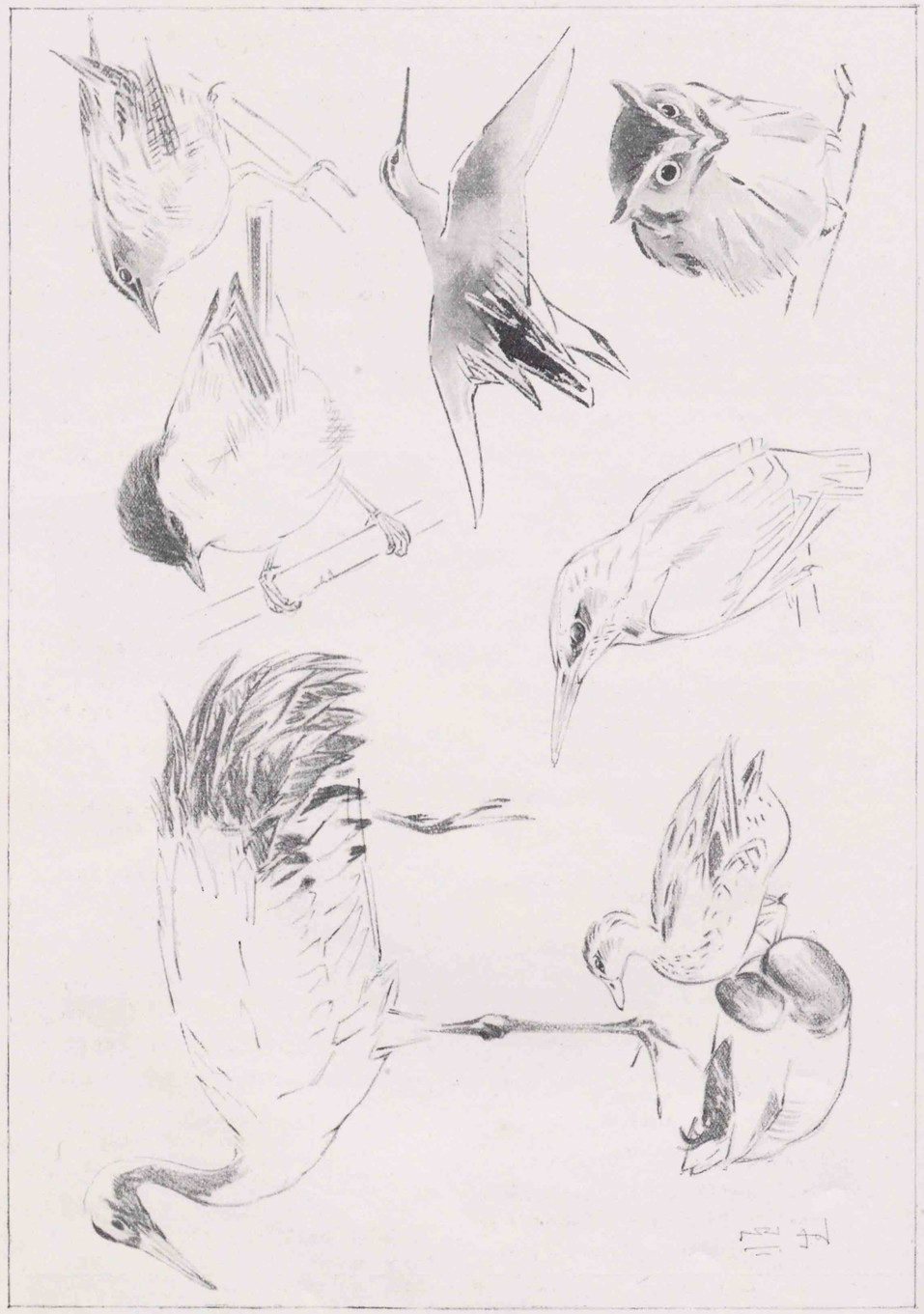
1. 金工品は其の材料の性質上多種多様な配色は困難である。從つて構成の美しさを主眼として圖案するやう指導する。
2. 表現の形式は投影圖法を本體とするが、本圖の如くフリーハンドの繪畫風表現をなさしめてもよい。

注意

1. ここに示した圖案は大部分生徒の工作實習に於て製作し得るものであるからこれに準じて考案せしめた生徒の圖案は**工作科と聯絡し**てこれを立體化するやうにしたい。

準備　金工品各種
參照　卷末 25 頁、理論篇 104 頁

● 金工品は其の材料の性質上色彩よりも用途竝に形(面と線)の美しさを考慮して圖案すべきである。



井上恒也

25 鳥類のスケッチ（參考用）

25 鳥類のスケッチ（參考用）　井上恒也

要旨

鳥類を鉛筆畫又は其の他の描法によつて速寫せしめ、各種の姿態と特徴とを研究せしめやうとするのが目的で、ここにはその參考用として鉛筆及び毛筆による描寫例を載せたのである。

説明と鑑賞

1. ここには七種の鳥類が夫々違つた姿勢と特徴とを以て寫されてゐる。何れも略畫に近い描法で輕快に取扱はれてゐるが、各々の鳥の感じがよく表はれてゐる。

2. 上段左は鶺である。丹頂の鶴といふ種類で古來日本畫の題材として取扱はれ、しかも瑞祥的畫題として好んで用ひられる。嘴と頸と脚の長いのが特徴、尾にまぎらはしい黑い羽は實は兩翅の末端である。この圖は、鶺が片脚で立つて他の脚を曲げてゐるところ、鉛筆は輕妙のうちに抑揚があり巧に使はれてゐる

4. 中央は四十雀である。頭が黑く胸毛が白く體は小柄で尾が細い。輕々と枝から枝へととび移つた姿勢を寫したのがこの圖である。日本畫家の描いた鉛筆畫であるだけに洗練され要約された描線が用ひられて説明も感じも確かである。

4. 右はみそささえである。うぐひすに似た小禽で藪の中や樹枝の間をとび廻つてゐる。これは小枝にとまつたみそささえの鉛筆スケツチである。柔かい羽毛、嘴や頭や尾の特徴が簡單な筆のうちによく表はれてゐる。

5. 下段の左は家鴨である。二羽のうち右の一羽はなきといふ種類で、これはもと鴨を馴らして家鴨にしたものといはれる。嘴や頸や胸に水禽の特徴が見える。素朴な筆致に姿態や習性を寫して遺憾がない。

6. 中央はかはせみである。日本畫には度々畫材とされる鳥で綠青がかつた瑠璃の美しさと嘴の長い頭の大きい姿の特色が畫家に喜ばれる。頭から背へかけての流麗な描線、嘴の鋭さ、羽の描き振りなど流石に表現の確かさを思はせる。

7. **右端の兩圖は毛筆によるスケツチで、上はしぎ、下はみみづく**である。面相筆を用ひた輕快な描線に、墨の濃淡を配したものである。しぎは飛立つた姿態、みみづくは枝にとまつたところ、兩圖ともこの鳥の特徴が表現されてゐる。

8. **井上恒也氏**　文展系新進日本畫家である。

（詳細は卷末 27 頁參照）

指導

1. 一時間に二種又は三種を寫す程度の略筆を以て寫生させる。鉛筆淡彩を以て描いてもよく、又毛筆、鉛筆何れでもよい。毛筆淡彩の場合にも可成直接毛筆で描かせるやうにしたい
2. 動物園へ引率することが出來れば何よりである。不都合の場合は剝製の標本を寫生せしめる。
3. 筆數は可成少くして表現は極めて簡素のうちに特徴を捉へるやうに指導する。

注意

1. 次課に於ては鳩一羽を丁寧に寫生させるのであるが、本課に於ては一時間に數羽寫生せしめようとするのである。次課と聯絡して、物の表現に精粗の兩方面があり、夫々意味のあることを教へる。
2. モデルを自由に求めることは困難であるから宿題として之を課し家禽などを寫生させてもよい。
3. 臨畫の取扱をしてもよい。

準備　鳥標本

參照　卷末 26 頁

26 傳書鳩　　井上恒也

要旨

鳩其の他の鳥類を寫生せしめて毛筆による表現の力を養ひ、且つ鳥類描寫に關する知識と一般的の技法とを授ける。

說明と鑑賞

1. 圖は傳書鳩を毛筆によつて寫生したものである。二引（ニビキ）と稱する鳩で、傳書鳩中の最も普通のものとされる。
2. 傳書鳩は其の歸巢性を利用したもので通信に使用するのでかく呼ぶやうになつた。いへばと(鴿)から出た品種である。
3. 作者**井上恒也氏**は東京美術學校出身の日本畫家で舊帝展及び文展へ出品。新らしい感覺と獨創的な手法を以つて製作に精進してゐる（詳細は卷末 27 頁參照）
4. 傳書鳩が地上に下りて上體をかゞめ、餌を啄まうとするときの姿勢を寫したもので、畫面の中央より稍前方に鳩を描き右の餘白へは落款を押した單純な構圖である。
5. 形は丁寧に着實にとられ、線描は各部一樣にすることなく嘴、羽毛、翅、尾等夫々の特徴を發揮するやうに工夫してゐる。
6. 色調は寫實に卽して羽毛固有の色彩を出してゐるが、明暗は全く取扱つてゐない。描線、色彩を單純化して裝飾的な表現を試みてゐる
7. 原畫は絹本へ日本畫用の顏料で描いたものである。バツクも落ついた色で塗られ全體から受ける感じは上品高雅で、どことなく手法、色感の上に近代味が漂つてゐる。

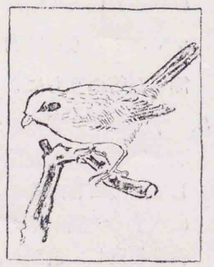
指導

1. 寫生材料としては傳書鳩以外に靑鳩、土鳩、鴨、家鴨、鴛鴦、鷄、雉子、山鳥等を題材としてもよい。
2. 動いてゐる鳥はこれを寫生するのに不便であるから剝製の鳥を用ひることとする。
3. 畫用紙の上に鉛筆を淡く用ひて輪廓をとらせ、十分訂正させた後、毛筆を以て線描をさせ、次に餘分な鉛筆の線を消し去る。
4. 着色をさせるには實物をよく觀察せしめつつ淡い色から順次塗り重ねて仕上げさせる。バックは途中に於て塗らせて置くのがよい。
5. 若し畫用紙の代りに日本紙を使はせるならば礬水を引いた畫箋紙がよい。最初畫用紙上に下描をさせ、正しい形を決定した後、これを畫箋紙に轉寫して淨寫させる。

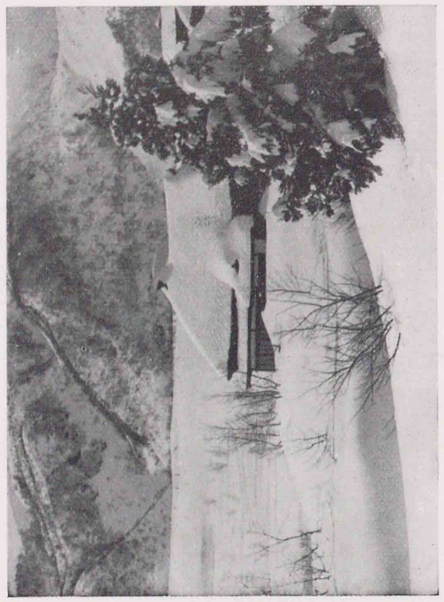
注意

1. 繪具は水彩畫の繪具でよい。
2. 筆は習字用のものでは不十分であるから面相又は削用を使はせ描線に十分努力すること
3. 臨畫教材として取扱つてもよい。其の描法は寫生の場合と同樣である。
4. 生徒は畫面を汚し、彩色が濁るものであるから特に注意してすつきりとした仕上げとなるやう注意をすること。
5. 日本畫用紙には其の他、靑六疋、玉版箋、鳥の子、美濃紙等がある。そのままではにじみが出て面白いけれどもむづかしい。礬水を引けば描きよくなる。

準備　鳩其の他の鳥類標本
參照　卷末 26 頁
參考　各種の構圖、上のカツトは鶉、下圖はみみづくともず。

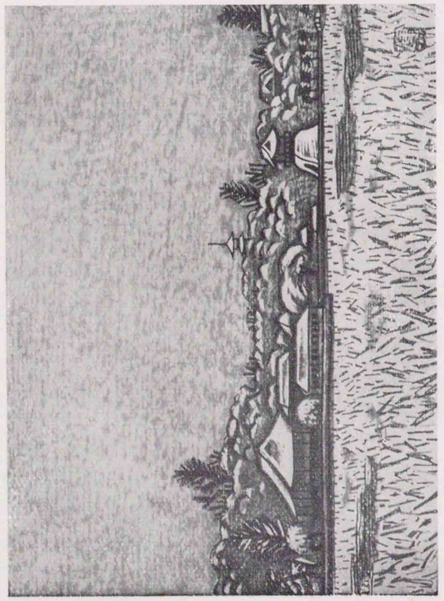


26 傳書鳩　井上恒也

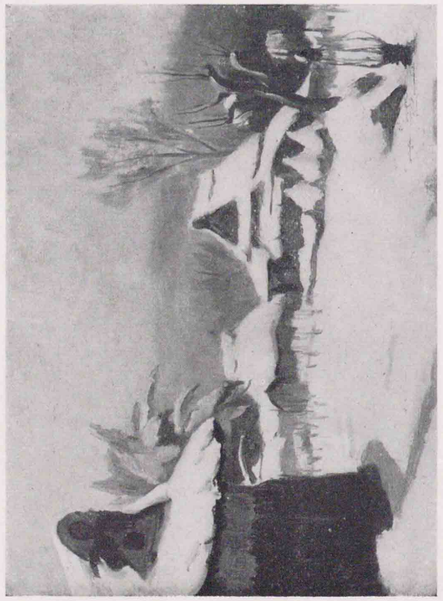


2

4



1



3

27 雪景色（參考用）　1は木版畫、2は寫眞、3は油畫、4は毛筆畫である。

27 雪景色（參考用）

要旨

次課「冬の風景」は赤塚忠一氏の雪景であるから、これと聯絡して各種の雪景描寫を知らしめるために載せた參考資料である。

說明と鑑賞

1. 圖例は雪の表現各種で、版畫、寫眞、油繪、及び日本畫を示したものである。

2. **1は木版畫上野不忍池雪景**、平塚運一氏の作品である。天地 20 cm、左右 24 cm の大きさで、用紙は鳥の子、藍、岱赭、黑、鼠の四色手摺、卽ち藍は森と水、岱赭は門、堂、堂裏の大樹、枯蓮の處々、黑は森、蓮、水、建物の輪廓等である。作者は現代版畫の名家。

3. 空には版の板目を利用し巧みな手法によつて雪もよひの雰圍氣を出してゐる。辨天堂の屋根、門、五重塔と森、枯蓮一帶には眞白い化粧が出來てゐる。右方の橋から門をくぐつて辨天堂へ參詣する者は、堂の背後へ出て池中の細道を本郷方面へぬけることも出來る。

遠景の五重塔は東照宮の塔で、これにつづく左手の木立は動物園の森である。右端に見える洋風建築の屋根は上野精養軒。

4. **2は山田應水氏撮影の寫眞**である。信州赤倉附近妙高山麓の雪景。山田氏は岡田紅陽氏と共に我國風景寫眞界の權威として並び稱せられる作家である。

5. 雪に埋もれた原野、家屋、水邊の樹木、遠景の山裾、近景の老杉等、雪の山村を如實に寫し出してゐる。構圖、遠近の調子等繪畫表現上參考となる點が多い。殊に調子研究上、近い雪と遠い雪とに白さの差異あることを注意する。

6. **3は田原輝夫氏作油繪**で、十號風景型に東京郊外を寫生したものである。作者は太平洋畫會會員、東京高等師範學校にあつて實技を指導されてゐる。（詳細は卷末）

7. 圖は農村の雪景である。灰色の山を背景にして藁屋根がならび、遠景の高い樹木と對照の位置に農家の一棟近景に配してゐる。地上には雪の中からすいすいと桑の株が見え、又積藁が見える。色彩は黑、茶、鼠、白等が基調になつてゐる。

8. **4は山元春擧氏作の日本畫**作品で、天地 40 cm、左右 50 cm の絹本である。深山の雪を描いたもので、飛雪紛々たる情景が遺憾なく表現されてゐる。

9. これは墨繪であるが二頭の鹿にのみ岱赭が加へられ、そのため畫面が引締つて見える。樹木は松の老樹。飛雪は胡粉を吹きつけたものである。

10. 山元春擧氏は京都畫壇の元老として多年斯道に貢獻するところ多かつたが、昭和八年物故せられた。（詳細は卷末 29 頁）

11. 雪は藝術作品の題材となることが多い。よく繪畫に描かれ、文章につくられる。雪の純白、雪の淸淨は自ら襟を正さしむるものがあり、寒地にありては冬のシムボル。暖地にありては年に一二回の淡雪さへどんなに待望の的であらう。

注意

1. 本課は參考用の說明教材として利用する。
2. 次課の指導に聯絡をとり且つ早く作品の出來上つた生徒にはこれを題材として鉛筆で臨寫せしめ淡彩の雪景とさせたい。
3. 寫眞は器械的の作品ではあるが、取材、構圖、調子は全く繪畫と同樣であるからこれに關心を持たせ描畫を參考とさせたい。

準備　雪の作品數種
參照　卷末 28 頁

28 冬の風景　　赤塚忠一

要旨

郊外の冬を題材として水彩による風景描寫をなさしめ、且つ季節による色彩の變化を觀察させ、冬の雰圍氣を表現せしめる。

說明と鑑賞

1. この作品は山村の雪景を寫生したもので、季節は冬、場所は新潟縣六日市である。畫面は一面白皚々たる積雪である。空は霽れてゐるが遠山にも野の面にも家の屋根にも雪が消えず流石に雪國を思はせる。僅に樹木だけは雪を拂ひ落して冬枯れの寂しさを一層强調してゐる。
2. 構圖は垂直線と水平線の交叉によるもので樹木、家の柱等の垂直線に對して、地平線、山の峯、道や橋等によつて作られる水平線が畫面を大小のスペースに分け且つ手前の廣いスペースを占めて小川が横はり、安定のうちに變化を見せてゐる。殊更に新味はないが、穩健な構圖といふことが出來る。橋の袂に來かかつた黑いマントは學校がへりの小學生であらう。
3. 色調は青系統の寒色が畫面を占め、樹木や家屋に僅かに岱赭系の暖色が用ひられてゐるのと、前景の小川の水やマントの少年に黑が用ひられてゐるだけで色數は極めて少いが、調子が濃淡各種で豐富に使驅され所謂同種色の落着いた調和を示してゐる。
4. 霽れた午後の日ざしは白雪の上に强くかゞやいてかなりに濃い陰影を印してゐる。近景は濃く遠景は淡くといふ調子法の原則がここには如實に語られてゐる。
5. 描法については大筆を以て大膽に描いた風が見える。大まかなタツチでよく質感を捉へてゐる。

作者**赤塚忠一氏**は日本水彩畫會の會員で其の作風は平明穩健であるから生徒の描畫參考として誠に適はしい。(詳細は卷末 30 頁)

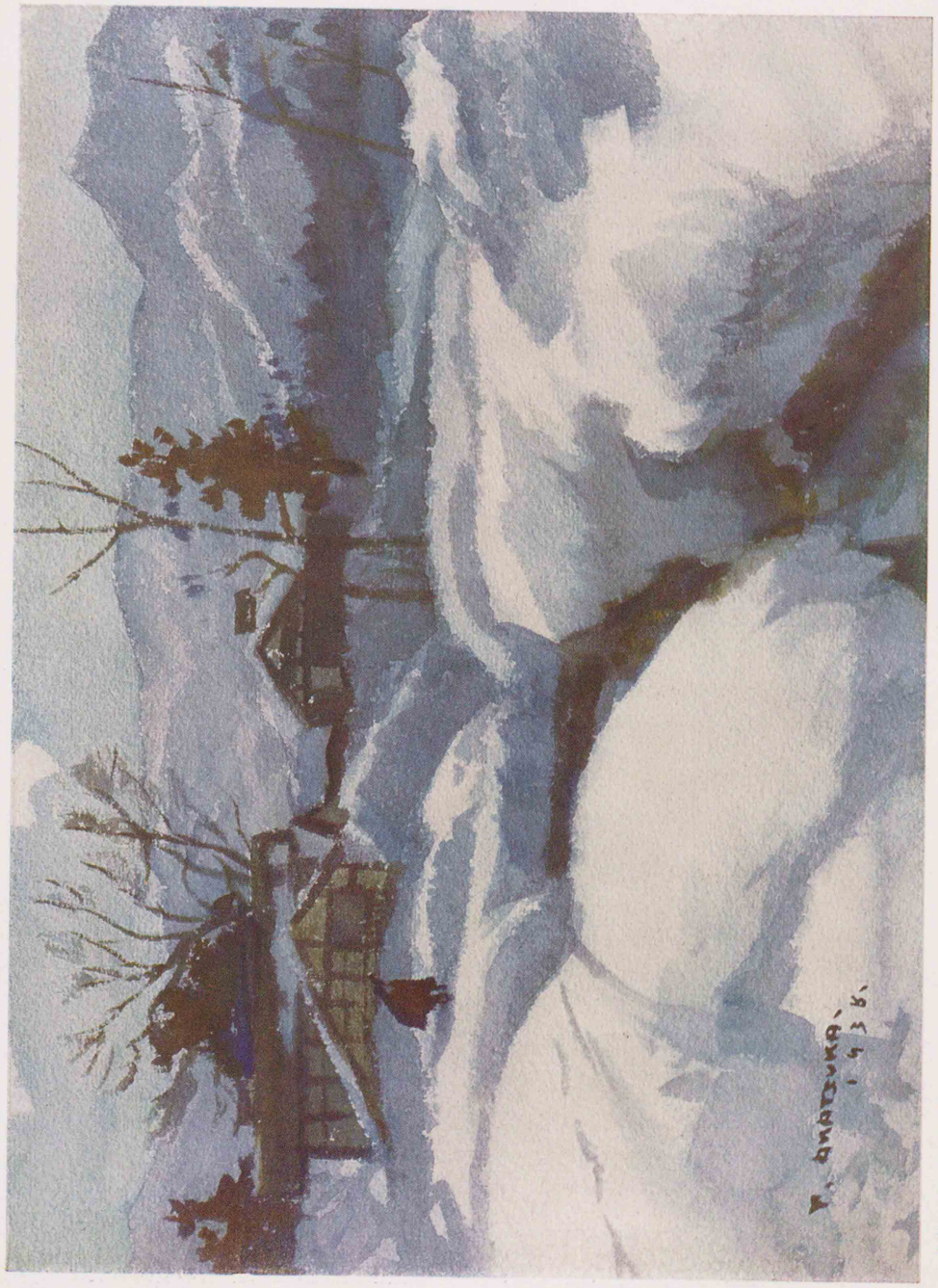
指導

1. 學校附近の郊外に題材を求めて冬の景色を寫生せしめる。雪の寫生をなし得るところは何よりであるが、雪はなくとも、又郊外でなくても致方ない。
2. 最初には畫題をきめさせる。見取枠を用ひ又は指を組合せて自然をのぞき、其の一部分を切取り構圖を決定させる。
3. 對照を十分に觀察しつつ大體の圖取りをし繪具で描かせる。下圖にのみ賴ることなく常に對象の形、色彩、明暗に留意して筆を進めるやうに指導する。
4. 繪具は淡色から順次濃色に重ねてゆくのを原則とするが、最初から適確な色調で描寫し潑剌たる筆觸を見せることも技法の一つである。**白を濫用せぬやう注意する。**筆は可成度度洗はせること**と**である。

注意

1. 屋外の寫生に於ては生徒は兎角開放氣分になつて不規律になり易いものであるから、管理上特に注意が必要である。
2. 成績物は可成一齊に提出するやう訓練すること。
3. 本圖は臨畫教材として取扱つてもよい。その場合構圖、色調、筆觸等すべて手本の趣を摸すやうに努めしめる。

準備　範畫數點
參照　卷末 28 頁
參考　下圖は雪の構圖二種



28 冬の風景　赤塚忠一

29 漆 器

山崎覺太郎

要 旨

硯箱、卷煙草入、菓子器、盆等の圖案を描かしめて漆器圖案の一般的知識を與へ、これが考案創作を練習せしめる。

說明と鑑賞

1. 漆器は漆液を以て塗裝した器具で、この製作技術は我國に於て著しい發達を遂げ、今や我國產業工藝品中重要な位置を占めてゐるばかりでなく、其の技術は世界に誇り得る狀態で亦我國の重要輸出品である。
2. 顏料と漆とを混和して最近種々の色漆が出來たが、其の色彩はまだ繪具のやうに自由ではない。殊に現在のところ冴えた白色はまだ工夫されてゐない。隨つて漆器の圖案は色彩の上に相當の制限がある。
3. 漆器は木、竹、紙、金屬等を素地として作られるのであるが、木材を素材としたものが多く、本圖に示した四種は何れも木材を素地としたものである。
4. 上段左は硯箱の圖案である。被せ蓋の構造による硯箱で、平面及び立面を示してゐる。全體が鼠色で、蓋の表面には黑色に塗つた兎が描かれ、更に金粉を用ひて兎の輪廓と草とを描いてゐる。落ち着いた高尙な感じのする圖案である。
5. 右は煙草入(シガーレツトケース)である。上から順次平面、側面、正面を見せてゐる。蓋は拔き差し自由の構造で、色は鮮麗な赤、他は黑である。黑と赤との美しい對比、それに金と白との曲線を以て新味のある模樣を描いてゐる。
6. 下段左はボンボン(菓子)入の平面圖と立面圖、素地は刳物で、これに塗裝したもの、赤と黑と黃の地塗に赤と綠で草苺をかいたものである。派手な感じのする器物である。
7. 右は丸盆の平面圖と立面圖、これも素地は刳物である。綠と綠の類似色と黑とを以て內側と緣と緣の外側とを區別し中に一羽の七面鳥を描いたものである。淸新さの裡に上品な感じのする盆である。
8. **山崎覺太郎氏** 漆工家で文展審査員をやり現に東京美術學校助教授である。(詳細は卷末31頁)

指 導

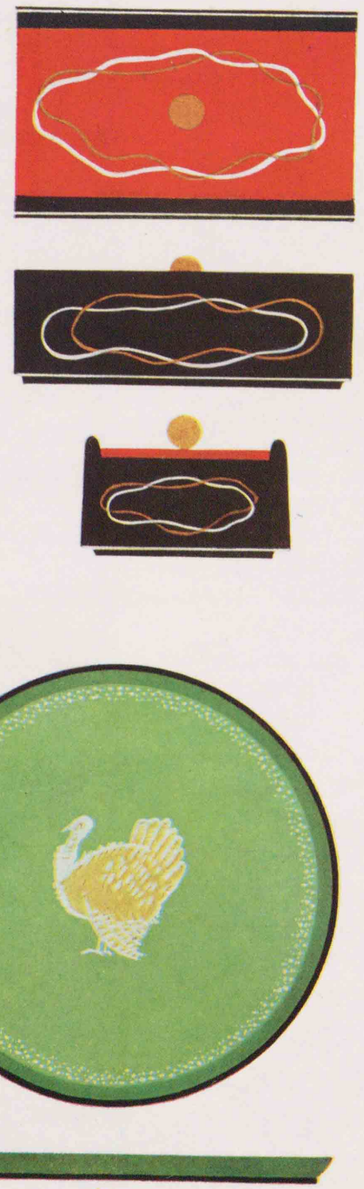
1. 硯箱、卷煙草入、菓子器及び盆の中一種を選ばしめ、先づ形の考案をさせる。形の考案には定規、コンパスを使用せしめる方がよい。
2. 模樣の資料を決定し、これによつて便化と排列を考へさせる。この練習には可成反古の畫用紙又は雜記帳を使はせるのがよい。便化と排列の樣式は獨創味があり、且つ淸新さがあるやうに注意させる。
3. 次に日本紙の上に下圖を描かしめ、別に畫用紙に地塗をした上へ下圖を轉寫させ、下圖に從つて着色描寫する。
4. 色はすべて不透明繪具を用ひること。卽ちすべての繪具に白を混ぜて描くのである。
5. 輪廓を描くに直線は毛筆の定規引によることも出來るが、圓の場合はコンパス用の烏口を用ひることとする。

注 意

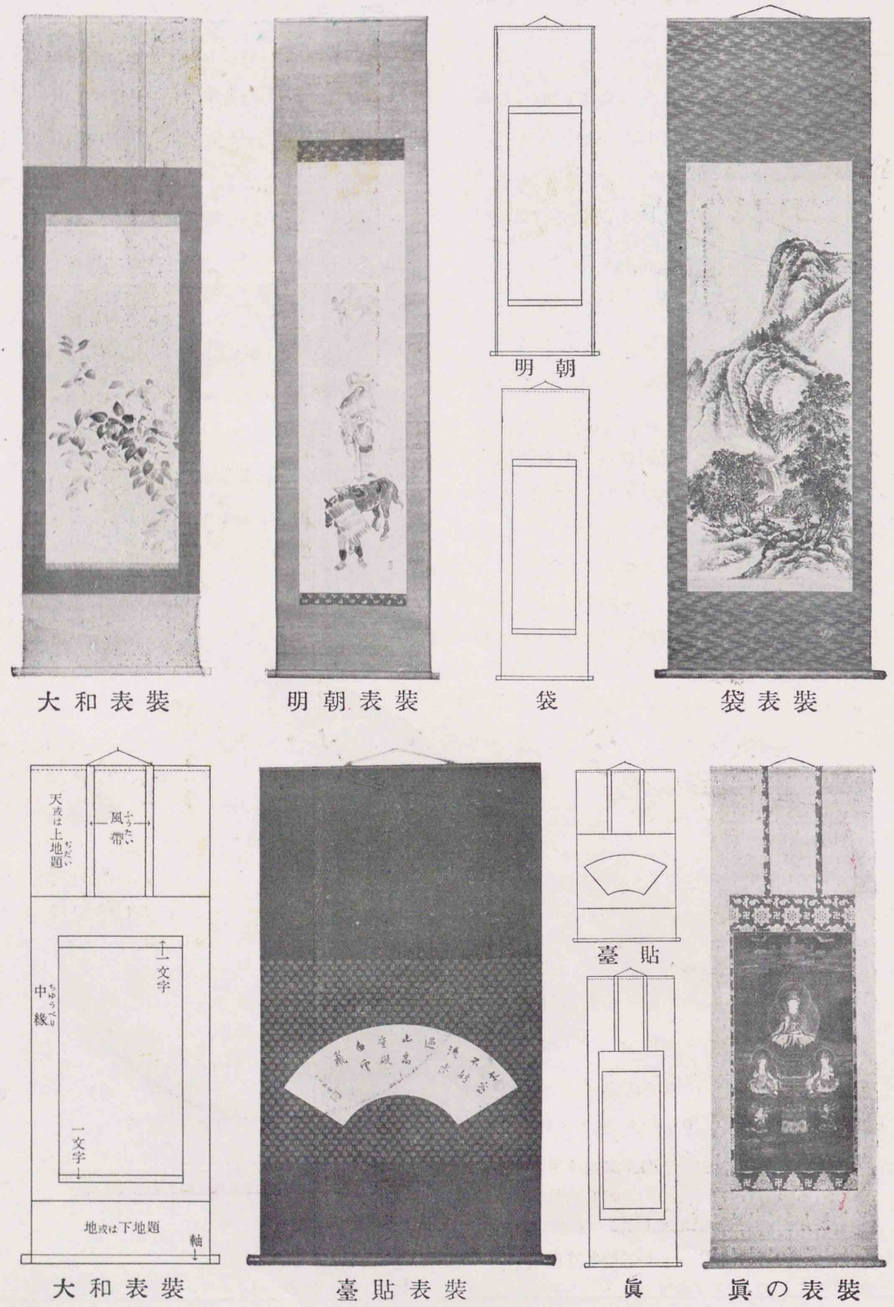
1. 形狀及び色彩については用途を顧慮して決定せねばならない。
2. 器體の形と表面の裝飾とを調和あらしめるやう工夫することが必要である。
3. 圖案の描寫は相當の時間を要するもので正規の時間內に仕上げることは困難であるから家庭に於て課外としてこれを補充させる。

準備 漆器の實物數種

參照 卷末31頁、理論篇80頁、101頁



● 漆には最近種々の色漆が出來たが其の色彩はまだ繪具のやうに自由ではない、隨つて漆器の圖案はこの點に相當の制限のあることを考慮して圖案すべきである。



大和表装　明朝表装　袋　袋表装

大和表装　臺貼表装　臺貼　眞　眞の表装

30 掛物の表装 (説明用)

要旨

掛物表装の知識を與へ、これを鑑賞せしめると共に掛物の扱方についての作法を知らせる。

説明と鑑賞

1. 書畫を軸物に表装したものを掛物といふ。表装とは書畫をかいた紙や布を裏打し、これに相應した縁を貼り軸其の他の附屬物をつけて仕立てることをいふ表装は又表具ともいふ

2. 掛物には竪横、大小、種々の形があり、仕立に用ひる材料も種々、其の仕立方も色々である。圖示したものは大和表装、明朝表装、袋表装、臺貼表装、眞の表装の五種で、表装様式の主なるものである。(巻末参照)

3. 圖例上段左から1は**大和表装**を示したもので紙本、布表装である。小泉勝爾氏作畫箋紙半折雪中紅椿の圖で、墨繪に花と蕾のみ紅色の彩色がしてある。

4. 紙の大きさは中畫箋半折、掛物の大きさは幅36糎、長180糎である。

掛物各部の名稱は圖示の通りである。大和表装といふのは繪の廻りに中縁をとり、更に天地を添へ、風帯をつけたものである。この掛物は中縁、一文字及び風帯が金襴、天地が紙(パー)、軸が牙軸である

5. 上段中央は**明朝表装**で紙本布表装である。小畫箋紙半折、掛物の大きさは幅42糎、長2米、墨繪淡彩の馬市の圖で、作者は岡野榮氏。馬五頭と馬方二人が達筆で俳畫風に描かれてゐる。岡野氏は洋畫家ではあるが、この種の作品には特に情趣溢れた逸品がある。

明朝仕立といふのは、天地中縁の區別がなく、唯一文字をつけて作るもので、左右に明朝縁といふ縁をつけるのが特徴である。この掛物は地が紙(パー)一文字は金襴、縁も紙で、軸は陶製卵色のもの、俳畫に適はしい仕立である。

6. 右は**袋表装**を示してゐる。紙本布表装で、繪の大きさは所謂畫箋聯落、掛物は幅66糎、長2・2米、繪は猪瀬東寧作の南畫水墨山水である。東寧は幕末から明治にかけての畫家で、日根對山の門から出た逸材であつた。

袋表装は地題中縁の區別なく一文字のみをつける。極めて簡素な仕立である。圖示したものは一文字は金襴、地は緞子、軸は木質である。

7. 下段左は**臺貼表装**である。紙本布表装で、作品は十三松堂筆の扇面、十三松堂とは正木直彦氏の號で、扇面には「竹密不妨流水過、山高豈礙白雲飛 十三松堂」と記されてゐる。

この表装は小品横物の仕立方で、地題、中縁だけで、一文字はない。風帯を缺くこともある。軸は木、天地は斜子、中縁は本緞子である。

8. 下段右は**眞の表装**といはれるもので絹本布表装である。繪は鎌倉時代の五尊佛、掛物の大きさは幅60糎、長1・8米である。

眞の表装は大和表装と大差なく、繪の外圍に金の縁を附して一文字を用ひない。この掛物はすべて金襴を以て仕立てたものである。

9. 表装は書畫の種類やかき方によつて色々な様式を用ひる。しかし如何なる場合に於ても表装材料や色合や、仕立方が不調和になつてはいけない。表装も一種の藝術であると見られてゐる。

注意

1. 掛物は生活上に關係の多いものであるからその取扱上についての常識や作法をも併せ授くるやうにしたい。(巻末 32 頁)

2. 表装は洋畫の額縁に等しいものであるから繪と額縁との調和を實例について示しつつ表装の藝術的價値を知らせる。

準備 額縁、表装各種
参照 理論篇 161 頁、巻末 32 頁

31 家具

上山　藹

要旨

机、飾棚、椅子其の他の家具圖案を描かしめて、木工圖案に關する知識を確實にすると共にこれが考案描寫を練習せしめる。

說明と鑑賞

1. 家具は住居に附隨した生活用具の總稱で、木竹、金屬を主要材料としてゐるが、特に木材を材料としたものが多い。

2. 箪笥、本箱、戸棚、机の類から、火鉢、本立、手箱等に至るまで、其の種類は極めて多く、樣式も多種であり、又人々の好みによつて構造形狀も一樣ではないが、何れにしても其の實用性と裝飾性とを顧慮した合理的なものでなければならない。

3. 上段に描かれたものは座机である。左が正面圖、右が側面圖である。簡易な施工法によつたもので四本の竹を脚とし、竹と竹との間に側板を入れて堅牢度を增し裝飾を兼ね、背面左右は幅の狹い板を、二本の後脚間には貫を添へて一層堅牢な構造にしてゐる。竹は錆竹である。**樣式が嶄新で且つ日本趣味**を加味してゐるところに特徵がある。

4. 中段は飾棚の正面及び側面である。二枚の板戸と五箇の抽斗と上段の棚及引戸とが構成上の要件となつてゐる。抽斗と板戸の手法に新鮮味があり、上段の棚及び引戸をガラスにしたところに新らしい感覺がある。尙支柱に錆竹を利用して日本趣味を取入れてゐる。

花瓶や飛行機型置時計や球型菓子器も夫々この棚に適はしい裝飾である。

5. 下段右は椅子二種を示してゐる。何れも直線と弧との構成により新らしいデザインで上は小椅子、下は肱掛椅子である。

6. 以上の各圖に記入された數字は寸法を意味し、單位は糎である。

7. 下段左は室內裝飾を示してゐる。この部屋は洋風建築に於ける應接室又は食堂ともいふべきで、これに適應した家具を配してゐる。

日本趣味を取入れた洋間で構成材料としては木材を主とし錆竹も各所に使用されてゐる入口の戸、明り窓、行燈式の電燈照明などに特に日本趣味が感じられる。このやうな樣式は現代では最も多く試みられてゐる。

8. 室內裝飾の表現形式は成角透視圖(寫眞)によつたのであるが、其の他の三圖は何れも投影圖法によつてゐる。

指導

1. 描かうとするものを豫め決定し、其の準備として自家の家具又は店頭陳列品其の他につき十分觀察し、其の物の概念を得させて置くことが必要である。

2. 表現の形式は投影圖法による。投影圖は工作圖として尋常小學の三年以後度々繰り返へして習つたのであるから、これを復習し、更に知識と描法とを確實ならしめる。

3. 鉛筆製圖としこれに着色させ、寸法を記入させる。

注意

1. 机、飾棚其の他につき其の一種を描かせる

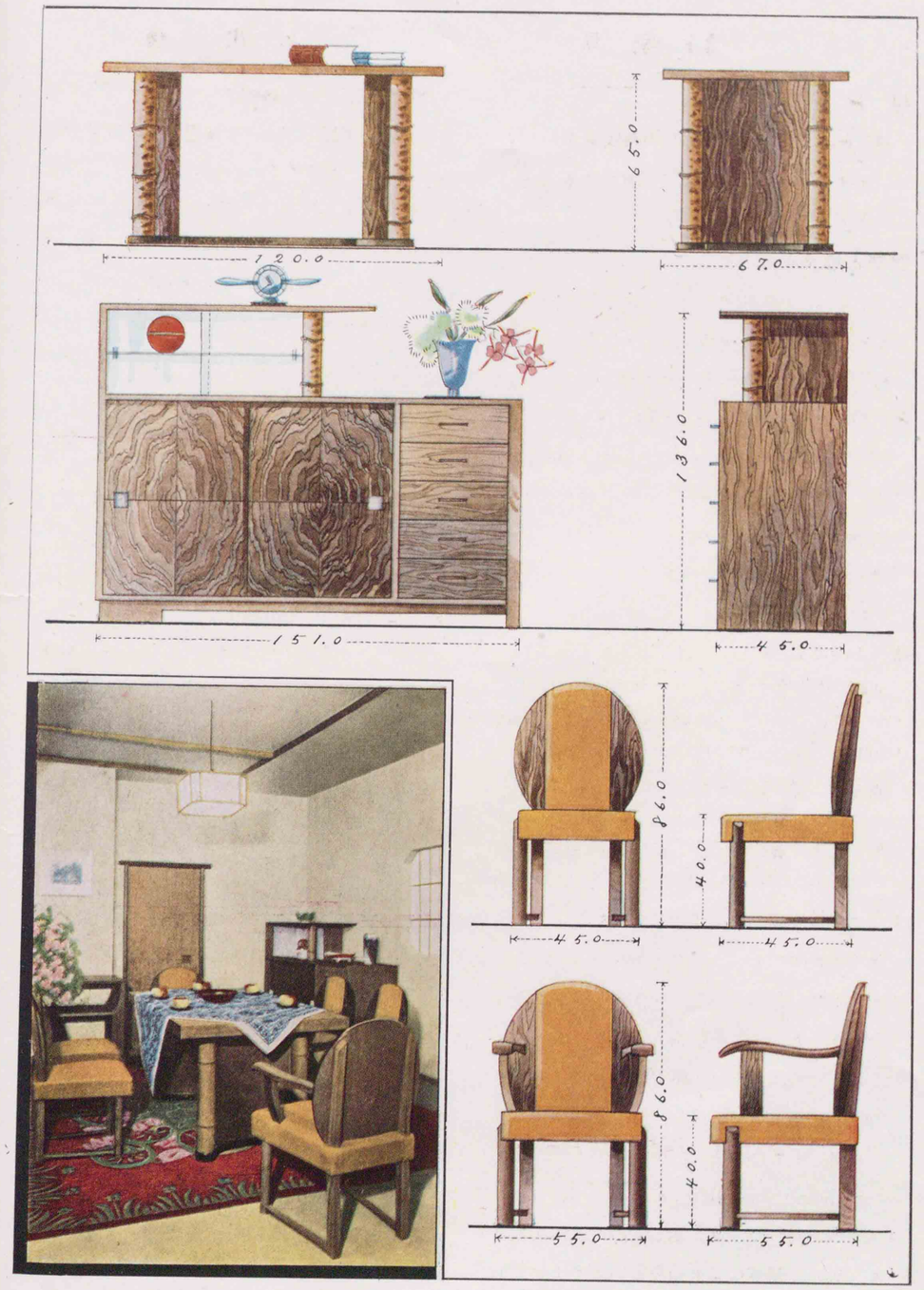
2. 工作法の大要を授け、又自由に生徒の質問に答へて工作法を基礎として圖案させるやうにしたい。

3. 構成や裝飾のうるさい圖案はこれを避け、なるべく簡素ですつきりしたものを心掛けさせる。

4. 工作科との聯絡に注意する。

準備　參考圖數種

參照　卷末 33 頁，理論篇　105 頁及び 109 頁



教授指導の要項補遺

第一圖　薔　薇

宮　本　三　郎

1. ばら Rosa　Rose

薔薇　薔薇科

いばら又は、うばらといふ。薔薇科植物中薔薇屬の總稱で、主として落葉性の灌木で幹枝に刺を有してゐる。葉は羽狀複葉で互生し托葉が葉柄に着生してゐる。花冠は野生品は主に五瓣花であるが栽植品には重瓣のものが多く、色も亦濃淡各色さまざまである。雌蕊が多數あつて筒形又は罎形の花床内に隱在してゐる。

美花をつけるものが多いので觀賞用として廣く栽培され、英國では國花として愛好してゐる。品種の改良も盛んに行はれ、交配によつて得た園藝品種は極めて多數に達する。又芳香のある麝香薔薇、西洋薔薇、苔薔薇からは香水を製造する。

せいようばら　はまなす　なにはいばら

種類　我國產の野生種には、のいばら、ふじいばら、かいどうばら、やまいばら、なにはいばら、さんせういばら、はまなす、てりはのいばら等がありその中には觀賞用として庭園に植栽されるものもある。いざよいばら、ときんいばら、かうしんばら、もつこういばら等は專ら觀賞用として栽植されてゐるが、近年ではせいやうばらが到る處に栽培され美花芳香を競つてゐる。本邦植栽の園藝品種は一季咲、二季咲、四季咲等がありその數は六十餘種に及んでゐる。

本圖はその西洋薔薇を畫けるものである。

2. 琉球壺

薔薇を差した壺は琉球陶器である。我國の燒物中頗る特色あるもので、形を造りまだ軟かいうちに彫刻してから燒く。その彫刻は植物、動物、人物等何れも原始的の形が多く、陶器の色彩は朱や黑を多く用ひ一體に雅致豐かなものである。

3. 作家小傳

宮本三郎氏

明治三十八年五月石川縣能美郡御幸村に生れ川端畫學校洋畫科を修業された。大正十三年より中央美術展に出品された。同十四年京都に東山美術研究所設立同十五年再度上京。昭和二年から二科會に出品し、昭和六年同志と新美術家協會を起し、同展に毎會出品された。昭和七年第十九回二科展に「觀客席」その他二點を出品して好評を博し昭和十一年二科會會員に推擧せられ、昭和十四年春渡歐された。

氏の作品の主なるものは左の通りである。

昭和二年二科會第十四回展、初入選「白き壺の花」
同　三年第十五回展「食卓の女」
同　四年第十六回展「N婦人の像」
同　五年第十七回展「酒を呑む男」、「乘客」
同　六年第十八回展「はだか」、「休憩室」、「粧ふ女」
同　七年第十九回展「花と女」、「觀客席」、「待合室」會友となる。
同　九年第二十一回展「裸婦」、「家族席」、「海女」
同　十年第二十二回「赤松と渓流」、「夏山」、「青い敷物」、「赤いクッション」この年推奬となる。
同十一年第二十三回展「ゆかたの女」、「野に憩ふ」
同十二年第二十四回展「牛を牽く女」、「蚊帳」、「裸婦」
同十三年第二十五回「式根の女」

〔住所〕　東京市世田ケ谷區上馬町一〇七三六

第二圖　風景のスケツチ　赤城泰舒

次の一文は萬富三氏が其の著旅のスケツチの卷頭に書かれたものである。生徒に讀み聞かせてスケツチの興味と心構へとを與へるにはよい資料であると思ふのでここに紹介する。

自然は神の創造せる藝術である。そして其の姿には少しの破綻もない。天衣無縫といふ言葉がある。如何にも率直な純眞な、そして絶對な悠久を含んでゐる。自然に觸れたい心は實に和かな喜ばしい心である。

舊い社殿や寺院に詣でる。又舊い藝術品をまのあたりに見る。これは多くの吾人の祖先の內から選び出された匠人の精進潔齋による藝術である。

自然といひ、遺跡といひ、吾人が旅をして觸れるそれ等のすべてには虛飾や街氣を微塵も含んで居ない。これが目まぐるしい現代世相に疲れた吾人を、頭を、全精神を洗滌する。

諸兄の生活には隨分多くの人の談話を聽く機會があらう。そしてその話は形式といひ內容といひ實に問然するところがないといつてもそれ等の時に於て談話の形式や內容を除いてそこに感じがあり雰圍氣がある。その雰圍氣には時に人慾の動きを感じたり、街ひに觸れたり、何となく邪氣の瀰漫したのを覺えることがあるであらう。

自然にはそれが少しもない。そればかりか、喜びにも悲しみにもひしひしとして深刻に迫つて來る絶大な何物かを絶えず放射して居る。

眞に泣き眞に笑ふ心はそのまゝに自然の姿であり、眞の藝術である。それは形式でもなく內容でもない。唯一の眞である。旅をして觸るゝ自然から受くる氣や、古藝術の遺蹟から受ける感じはそれである。

旅の心は喜びにつけても悲しみにつけてもそれは朗らかなものである。卽ち旅をしてこの美しい天地と藝術とに觸れることは、吾人の心から醜きものを洗ひ落すことである。この淨化することを求めて吾々は旅に出るのである。一片の紙に山川遺蹟の姿を寫す心は、その作品の巧拙を別として最も意義あるそして美しい無邪氣の境地に遊ぶものである。

故に旅にして出來たスケツチには、たとひその技巧が巧緻を缺いてゐても天眞爛漫、幼兒の笑に似たものが含まれてゐる。旅行のスケツチはその心に於て出來た記錄である。凡そ數枚の紙片と一本の鉛筆とがあればそれで準備は整つたのである。

作家小傳

赤城泰舒氏

明治二十二年六月、靜岡縣駿東郡長泉村に出生された。初め太平洋畫會及び日本水彩畫會に於て洋畫の研究を積まれ、明治四十二年第三回文展に水彩畫「高原の朝」を出品して好評を博され爾來每年同展に「綠色の流」、「白き砂」、「夏の水」、「赤き村の午前」等を出品された。

帝展になつてからは大正八年第一回に「向日葵」第二回に「霧深き夏の朝」、第三回「山上の小祠」、第五回「小兒像」、第六回「山上の湖」、第八回「鏡」、
二科會へはその第一回に「山」と「畑」との二點を出されたがその後長い間これへは出品されず、帝展にのみ出された、しかし昭和三年から帝展出品をやめて再び二科に歸り第十五回展へ「ギター彈く少年」と「赤い上衣」とを出され、引きつづき第十六回に「靜浦風景」、「內海遠望」、第十七回に「赤衣」、「少女と花」、第十八回に「少女像」、「靜なる海景」、
第十九回に「高原の青沼」、「夏裝」、
第二十回「アツコルジョンを奏く」、「夏季寮記念」
昭和九年第二十一回には「雨海を渡る」
昭和十四年第三回文展「城山」出品。

現に文化學院に教鞭をとられ、日本水彩畫會及び光風會の會員に列せられてゐる。「水繪の手ほどき」の好著がある。

蓋し、多年水彩畫壇のために健鬪されつつある人で斯界の重要な存在である。

〔住所〕　東京市淀橋區下落合三の一、一二五

第三圖　春の風景　木下義謙

本圖は春の風景を繪畫によつて寫生したのであるがこれは又文學的にも表現することが出來る。次に島崎藤村氏の寫生文をのせる。

麥畠　島崎藤村

青い野面には蒸す樣な光が滿ちてゐる。

彼方此方の畠側にある樹木も活々とした新芽を着けてゐる。雲雀、雀の鳴聲に混つて鋭いヨシキリの聲も聞える。

火山の麓にある大傾斜を耕して作つたこの邊の田畠はすべて石垣によつて支へられる。その石垣は今は雜草の葉で飾られる時である。石垣と共に多いのは柿の樹だ。黃勝な、透明な、柿の若葉のかげを通るのも心地がよい。

小諸はこの傾斜に添つて、北國街道の兩側に細長く發達した町で、本町、荒町は光岳寺を境にして、左右に曲折したる主なる商家のあるところだが、その兩端に市町、與良町が續いて居る。私は本町の裏手から停車場と共に開けた相生町の道路を橫ぎり、古い士族屋敷の殘つた袋町を通りぬけて、田圃側の細道へ出た。そこまで行くと、荒町、與良町と續いた家々の屋根が町の全景の一部を望む樣に見られる。白壁、土壁は青葉に埋れてゐた。

田圃側の草の上には土だらけの足を投出してあをのけさまに寢て居る働き勞れたらしい男があつた。青麥の穗は黃綠に熟しかけて居て、大根の花の白く咲き亂れたのも見える。私は石垣や草土手の間を通つて石塊の多い細道を歩いていつた。その中に與良町に近い麥畠の中へ出て來た。

若い鷹は私の頭の上に舞つて居た。私はある草の生えた場所を選んで、土のにほひなどを嗅ぎながら、そこに寢そべつた。水蒸氣を含んだ風が吹いて來ると、麥の穗と穗が擦れ合つて私語くやうな響をさせる。その間には畠に出て『サク』を切つてゐる百姓の鍬の音もする……。耳を澄すと、谷底の方へ落て行く細い水の響も傳はつてくる。その響の中に、私は流れる砂を想像して見た。

讀み行くに從つて情景躍如たるものがある。これは藤村氏の「千曲川のスケツチ」の一節である。

作家小傳

木下義謙氏

木下友三郎博士の次男として明治卅一年東京市に出生された。木下孝則氏は氏の令兄である。

大正七年東京高等工業學校機械科を卒業されたが、其の儘母校に留つて二箇年間助教授として後進の指導に當り、傍ら獨學を以て油繪の研究をつづけ大正十年第八回二科展に初入選、其の後每回出品を續け、昭和二年には二科賞を得更に昭和三年から五箇年間渡歐、佛、獨、墺、伊等に遊學せられた。在佛中はサロンドートンヌ、サロンアンデパンダン等に出品し、又巴里に於て個展を開かれた。

昭和七年歸朝、同年秋二科展に滯歐作品三十六點の特別出品をなし畫壇に確固たる地位を築かれたが、昭和十一年に二科會を脫退、石井、安井、有島諸氏及び令兄孝則氏等と共に一水會を創立し其の會員となられた。

著名な作品は父の肖像、日曜日の公園、二人の裸女、ベニスグランカナル、ボンヌフ、滿洲小史等。著書にアトリエ社發行の「エドアール・マネ」がある。

現に文化學院大學部教授である。

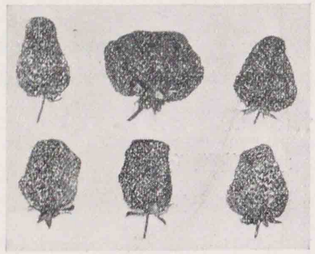
〔住所〕　世田ケ谷區赤堤町一ノ一四八

第四圖　いちご　小泉繁

1. オランダイチゴ Fragaria grandifolia

和蘭苺　薔薇科

西洋いちごと稱し舶來の多年生草本である。和蘭苺の名は本邦人が和蘭と通商せる頃に同國人によつて傳へられた故命名されたものである野生の蛇苺と同じく匍匐莖で、葉は三個の小葉より成る掌狀複葉をなし緣邊に鋸齒がある。春葉間に花梗を抽き白色五瓣花を短總狀に開く。果實は細粒で肥大せる肉質の花托上に附着する。この花托は紅色で酸味を有し甘く、夏季の果實として生食され又ジヤム、苺酒を製するにも用ひる。



オランダイチゴ

品種　苺には晩春より晩秋に續けて結果成熟するものと、晩春より初夏に結果するものとの二種がある。一般に優良品として栽培される品種は、「ドクトルモーレル」「ビクトリア」「サージョセフ・バツクストン」等である。四季苺の改良されたものに、「レツドパイン・テイロン」といふ品種がある。果實が細長くて獨特な尖りと鮮紅色を持つてゐるから、よく他種と區別が出來る。

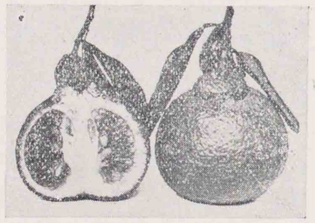
栽培法　繁殖は匍匐枝又は株分けによる。株分したものは結果が小さいが甘味が多く、匍匐枝による新株は大形となるが酸味が強い。匍匐枝は結果後發生し夏より秋に根を生ずる故これを切取り假植し、十月頃に移植する。先づ整理した畑に畦幅 80—90 糎の溝を作りその中に元肥として堆肥を入れ覆土し、株間 30—40糎位に一株宛植込む。肥料は春季畦間を中耕し小溝を作り施肥するのである。

促成法には溫床内で栽培して冬季中に美果を得ることが出來るが、暖地では石又は瓦を株間において溫度を高め促成する方法がある。靜岡縣久能地方に盛んに行はれてゐる。

2. さんぼうかん Citrus sulcata

三寶柑　芸香科

三寶蜜柑ともいふ。夏蜜柑の一種であつて、樹勢が强健である。葉は稍大形で濃綠色をしてゐる。果實は稍大形で果梗部が著しく突出してゐるのが特徴である果皮は濃黃色で質が脆く、剝皮は容易である。果肉は淡色柔軟で甘味が多く風味が頗るよい。成熟は四五月頃で、和歌山縣地方に多く栽培せられる。



さんぼうかん

3. 作家小傳

小泉　繁氏

明治三十一年八月東京市日本橋區に生れ、大正九年東京美術學校製版科に入學されたが、氏の天分に合致しないことを覺つて圖畫師範科に轉じられた。併しこれ亦自らを滿足せしめ得ないものなることを知つて遂に斷然退學し、爾來一意洋畫の研究に沒頭された。

大正十四年第六回帝展に「靜物」を出品され大正十五年第七回帝展に「果物とビスキー」を出品された。昭和四年第十回帝展に「裸婦」を出品せられ、昭和五年第十一回帝展にも「裸體」を出品された。以後引續き畫道に精進せられ官展系の洋畫家として重きをなしてゐる。

〔住所〕　東京市杉並區西荻窪二の七〇

第五圖　石膏像　その一

1. 石膏像のつくり方

石膏像は石膏の粉末が適量の水と混つて硬化結晶する性質を利用して製作したもので、其の製作は先づ原型から雌型をとり、之によつて石膏像を作るのが順序である。

石膏は天然石膏として產出するか、又は人工によつても製せられる。性分は硫酸カルシウムである。

原型　創作及複製の場合があるが塑像(粘土、油土作品)、石彫、木彫、金屬作品、石膏像果實手足等あらゆるものが原型となる。

雌型　寒天型と石膏型とが用ひられるが、形の簡單なもの、浮彫に屬するもの、同種の作品を多數とらない場合等で小形のものには寒天型を用ひることもあるが、多くは石膏型を用ひる。

寒天型は寒天の溶解液を寒冷紗で濾して原型に注ぎ、其の凝結を待つてこれを水中に浸しつつ原型を離脫させて雌型をつくる。

石膏型は燒石膏を水に落し、これを攪拌して一樣の濃度とした後原型に注ぎ、其の硬化を待つて原型を離して雛型をつくる。この場合雛型はその目的、原型の形、及び質等によつて平型毀し型、寄せ型の三つとする。平型は一枚の平板、寄せ型は中型と外型との複式型で、而も中型は細かく割れてゐる。毀し型は丸型であつて石膏作品一個を得るだけで破毀してしまふものである。寫生用の石膏像は概ね寄せ型によつてつくる。

石膏どろ　石膏を溶かして其の泥狀液を雛型に流し込み、硬化の後雛型から離す。雛型の種類に應じて其の取り方にも三種ある。即ち平型法は浮彫類に用ひ、毀し型、寄せ型の二法は丸彫又は自然物、器物等に用ひられる。但し平型、寄せ形は何度も用ひ立てることが出來る。往々石膏像の各部分に細い糸のやうな盛り上りの線を見ることがあるが、これは寄せ型による型の小片と小片の繼目である。

2. 石膏像の略解

圖畫教育で使用される主なる石膏像について次に解說を述べよう。

ミロのヴイナス半身像　ギリシヤの最盛期に作られた傑作で全長七尺の大理石彫刻、半身像はその腰以下を切つたものである。其の胸像もこれからとつたもの。

アグリツパ胸像　ローマの名將アグリツパの像で、羅馬時代肖像彫刻の好範例とされてゐる。等身より一倍半位の大きさ。

セネカ頭像　羅馬の哲學者セネカの像である顏面の筋肉と頭髮の變化に特色がある。

プルタス胸像　羅馬の刺客プルタスの像と稱せられるものである。面のはつきりした男性的な顏である。

カラカラ胸像　羅馬の皇帝で、其の深刻な表情と堂々たる體格とこれに纏つた布の變化など絕好のモデルである。

ラオコン半身像　傳說によればラオコーンはトロイの神官である。トロイ戰爭の末期、希臘の陣營に遺された木馬に疑を抱いたために神の怒りに觸れて二人の子と共に二匹の海蛇に卷かれて悶死したといふ苦悶の狀が表はれてゐる。

その他中等學校で使用される石膏像には次のやうなものがある。

アポロ胸像、ダンテ頭像、アマゾン像、ミケランゼロ半面像、シセロ胸像、シーザー胸像、獅子冠女神胸像、小兒笑像、大顏面、ダイアナ半面像、花鳥人物のレリーフ各種其の他。

第六圖　石膏像 その二　齋藤素巖

1. デツサン

デツサン Dessin は佛蘭西語で、素描は其の譯語である。一色を以て形と調子とを研究する寫生畫で、別に下圖といふ意味もある。

デツサンは繪畫を學ぶものゝ必ず最初に研究しなければならない修道の法である。それは素描は色彩の粉飾を避けて、物の本質的見方に直面するからである。卽ち物體描寫の本源は形であつて、形を注意して見、形を正しく寫すことが必要になる。次に明暗の關係卽ちヴアリューといふものが調子の基本をなすもので、これがデツサンには最も明瞭に表はれる。而してこれが出來て後そこに濃淡、遠近、色調といふものが生れいづるのである。尙デツサンは複雜なる面と面との交錯から形態、調子が構成せられて立體的存在の美を表現するものであるから色彩的感覺に醉はされたり、色彩上の遊戯に終つたりする危險は少しもない。

デツサンの練習として石膏や人體がその對象とされるのは、石膏は初めから色彩なく形と調子とから成つてゐるのに起因し、人體はその形態、線、調子といふものが他の一切の物象よりも複雜であり微妙であり、美しくあることによるもので、尙西洋畫が元々人體研究に發生したことから自然人體を描くことを本位とした一ツの慣習にも基くものと見ることが出來る。又事實人體を研究することによつて繪畫的表現に役立つあらゆる目と手と心とが養はれるのである。

歐洲の中等學校に於てはデツサンの練習が盛に課せられ、優秀な成績を示してゐる。學校の圖畫教室は無論のこと、廊下などまで壁一面にレリーフを掛け連ね、生徒各自が一個宛その力倆に應じて選擇するやらにしてある。かくデツサンは盛に課せられるが、その題材は大方レリーフで、高學年に至つて人物の頭像、胸像、半身像が課せられる。

古來繪畫に於ける巨匠は悉くデツサンの大家であつた。ミケランジエロ、レオナルド、デユーラー、レムブラント、シヤバンヌ、ドガ、黑田淸輝、中村彝などいふまでもない。日本畫に於ても雪舟、元信、蕪村の作品など全くデツサンの妙味といふことが出來る。

2. 石膏モデル

石膏像はデツサンの勉强には是非なければならないものである。浮彫と立體とに大別し、模樣、動植物、人體部分模型、顏面像、頭像、胸像、半身像、立像等多種多樣である。

石膏像は古代ギリシヤ、彫刻を複製及び模作したものが多く、我國へは明治初年西洋畫の輸入と共に將來されたのであるが、最も早く其の製作に從事したのは其の當時工部大學美術學校で彫刻を研究した菊池鑄太郎氏で、同氏の事業は今尙續いて居り、各學校の石膏模型は殆ど全部菊池製であるといはれる。

3. 作家小傳

齋藤素巖氏

明治二十二年十月、東京市麹町區平河町生。

明治四十五年東京美術學校西洋畫科卒業、大正二年英國に赴きローヤルアカデミー美術學校で彫塑を學ぶ。大正九年帝展推薦。大正十一年平和記念東京博覽會審査官となり、同年帝展審査員、大正十三年帝展委員とならる。

大正十五年構造社を組織し、昭和二年九月第一回展を開き爾後年一回づつ開催せらる。

昭和十年六月帝國美術院會員となり、昭和十一年文展審査委員、昭和十二年帝國藝術院會員となり、文展審査員を兼ねらる。次の傑作がある。

第二回帝展特選「敗殘」等身五人の勞働者の群像、第三回「朝歐」、第四回「遣された人達」(推薦)、第六回「空」(横二間半のレリーフ)人物九人。第一回構造社展「相」(五十人の群像レリーフ)、「像を彫る」、「六人の群像」等。

第二回「行路」(七人の等身人物群像)、其後「射手」(九尺人物)、泉(薄肉五人群像)、母子像(等身)、楠公像(一丈二尺)、農工商人物(各腰かけた八尺の人物)等その他數十。

昭和十一年文展には「貝」(男女六人のレリーフ)、十二年文展に「避難者」(五人の群像)を出品。

〔住所〕 東京市豐島區池袋四丁目三八三

第七圖　中學生　伊原宇三郎

1. 中學生の服裝

中學生の服裝は詰襟が普通であるが、ダブル襟や折襟もある。地質は大抵ヘル、小倉で色は冬は黑、紺、夏は白、霜降ときまつてゐたものであるが、近來は冬夏共カーキ色を用ひ、地質もステーブル・フアイバーのはいつたもので間に合せる向も出來て來た。

ボタンは殆ど金色の眞鍮製である。金釦の制服は少年のあこがれの的となつてゐる。

帽子は黑の羅紗を普通としてゐるが、これも制服のやうにカーキ色を用ひることが段々ふえて來たやうである。

2. 自畫像

畫家が自分の像を描いたもので、多くは鏡に向つて鏡の中の自像を寫生するのである。着物の合せ目、洋服のボタン等何れも逆になつてゐるのはそのためである。

3. 中學生の標準體格

生徒發育參考表

種目 / 年齡	身長 cm	體重 kg	胸圍 cm
13	139.9	33.6	66.7
14	145.9	38.0	71.7
15	152.7	43.5	75.5
16	155.8	48.2	77.8
17	160.7	51.6	80.5
18	161.7	53.3	81.8
19	161.9	54.5	82.7

この表は昭和八年度公私立中學校生徒身體檢査表(文部省調査)によつたものである。年齡は十二年一ケ月より滿十三年までも 13 年とした。以下之に準ずる。

運動能力測定實施要項 (男子)

少年級 (滿十四歲以下) 種目	等級	二級	一級
走	60 米疾走	10 秒	9 秒 4
跳	走幅跳 又ハ三回跳	3 米 60 5 米 30	4 米 20 5 米 70
投	送球投 スポンヂボール	16 米 40 米	18 米 55 米
力	逆上(脚懸上) 又ハ懸垂屈臂 又ハ臂立伏臥臂屈伸	脚懸上 三回 (八回)	逆上 (五回) (十二回)
綜合	國民保健ラヂオ體操	同第一	同第二

青年級 (十四歲一日以上) 種目	等級	二級	一級
走	100 米疾走 2,000 米走	15 秒 10 秒	14 秒 5 9 分
跳	走幅跳 又ハ走高跳	4 米 60 1 米 20	4 米 60 1 米 35
投	砲丸投(八封度) 又ハ送球投	9 米 22 米	10 米 27 米
力	逆上(脚懸上) 又ハ懸垂屈臂 又ハ臂立伏臥臂屈伸	脚懸上 六回 十三回	逆上 十回 十七回
綜合	建國體操 又ハ國民保健ラヂオ體操	同前終操 同 第一	同前後終操 同 第二

4. 作家小傳

伊原宇三郎氏

明治二十七年十月德島市に生れ、大正十年東京美術學校西洋畫科を卒業された。

大正九年東京美術學校在學中第二回帝展に「明裝」、卒業の年第三回帝展に「よろこびの曲」を出品、大正十四年春佛蘭西に遊學し、昭和四年八月歸朝され同年第十回帝展に「椅子によれる」を出品、特選となり昭和洋畫奬勵賞を授けられた。昭和五年第十一回帝展「二人」特選、以來無鑑査出品。

屢々帝展及び文展の審査員を委囑され、現に東京美術學校助教授である。 (詳細は卷二の卷末 24 頁參照)

〔住所〕 東京市世田ケ谷區成城町六二四

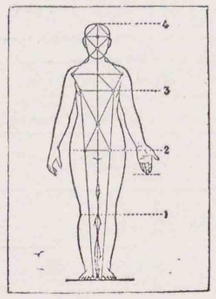
第八圖　人物のスケツチ
第九圖　運動服の生徒

木下孝則

1. 人體各部の比例

人體描寫で豫め心得置くべきは人體顏面各部の比例と共に、人體全身各部の比例である。

人體の比例は幼兒と少年と壯年とによつて相違することは勿論であつて、又男子と女子とによつても多少の差違がある。壯年の西洋人と東洋人とによつても亦相違し、而かも體重身長夫々一定ではないから全部一律に見ることは出來ない。



人體の比例

しかし大體の比例をあぐれば東洋人の壯年時代に於ける標準比例は右の挿圖の如く、全長を二等分すれば、其の中央は恥骨の上端に相當しそれより上を二等分すれば乳の位置となり、又下半分を二等分すれば膝關節の部分となる。尙眼、鼻、肩幅等の關係は圖によつて知られたい。

西洋人は東洋人に比して足が長く顏が小さく東洋人はこれと反對に足が短く顏が大きい。女子と男子とを比較すると女子の腰廻りは遙かに男子より太いものである。

子供は最初頭が大きく足が短い。それが漸次調和した體となつて大人になるのである。

2. 人體描寫について

人體描寫について先づ注意しなければならぬのは、そのモデルが持つ姿勢である。一般に初學者はモデルの顏にのみ氣をひかれて全體の姿勢をよく觀察することを忘れるものであるが、固より好結果は得られない。肖像畫としては顏面の構成や特徵に特別な注意を必要とするが、さうでない人物畫に於ては何よりも先に全體の姿勢を觀察し、よく會得することである。

ポーズ　姿勢のことを Pose といふ。製作に當つては色々に工夫を考慮してモデルによいポーズをつくらせるのであるが、スケツチの場合には必ずしもさうとは限らない。自然の動作、自然の姿勢を寫す場合が多い。何れにしても部分的の形にとらはれることなく、そのポーズの持つ組立や關係卽ち胸と肩、胸と胴及び腹の關係、頸と頭の位置、そしてどこに力がはいつてをりどこに力がぬけてゐるか、緊張した筋肉はどれか、弛緩した筋肉はどこか等を十分觀察してからはじめて畫布に手をつけることになる。各部の組立構成關係を動きといひ、緊張弛緩の關係を勢力といふ。

クロツキー　人體の動きと勢を觀察し、記憶し、寫形するためには短時間に出來るクロツキーによる研究が最も便利である。クロツキーはスケツチと同義である。これによつて姿態の研究が相當出來たところで畫布に木炭による素描にとりかかるのが順序である。

木炭素描、着彩、クロツキーによつて姿態を決定し、更に木炭をとつて畫布に向ひ、形と明暗とを研究する。これをラツクで止めて油繪の着彩にかかるのが一般的の方法であるが、無論馴れた畫家はこの手順をやめてもつと簡單に處理する場合もある。水彩寫生に於ては大抵の場合木炭素描を鉛筆の線描で代行し着彩過程に於ける色の混濁を避ける。尤も鉛筆淡彩、木炭淡彩の場合は調子までをつけるのが普通である。

胴の觀察　クロツキーばかりでなく一般素描の場合、およそ人體を描くに最も必要なことは胴の形と位置を正しく充分に觀察することである。起立してゐるのと臥してゐるのと坐つてゐるのとに關係なく、人體の動きの中心は常に胴にあるからである。胴の觀察が充分にされてゐると、手足の動き自ら自然の位置を得、勢を得るもので、その反對に如何に手足の形や位置によつて動きを表はさうと心掛けても胴を等閑にしては所詮姿態の勢を掴み表すことが出來ない

其の他の注意　前に度々述べたことではあるが、描き進めるに隨ひ餘りに局部的になるのはよくない。全體に加筆しつゝ完成に向ふのが妥當である。又調子の研究は特に大切である。全畫面を構成し統整する大きな明暗の變化を掴むことが肝要である。

3. 運動服裝に就て

贅澤に流れない樣にする。帽子、ユニフオーム、パンツ等は淸潔なものにして一般觀衆及び相手に不快を感ぜしめない物を着用することが大切である。

靴、足袋は隨意なれど形式統一の必要上及び經濟上よりして、普通の運動靴の方が適當の樣である。跣足は絕對に避けねばならぬ。

特に人の目を引き嫌厭を催さしめ、或は怪奇の念を抱かしめる樣な、服裝は絕對に避けねばならない。

4. ラケツト

ラケツトは木製の部は「シビ」で、つるの部分は生絲である。十オンスかつ十二オンス迄位まである。規定としてはないが中等學生十一オンス位である。軟式庭球と硬球庭球用のラケツトは價値に於ても異なる。軟式は二圓五十錢位よりある。硬球用としては七圓位からある。東京・大阪製が多い。

5. テニス

庭球の基源地は不明であるが、一番早く英國で發達し、第十七世紀から行はれた。我國も最近優秀な選手を出してゐる。第一卷三十一圖招待券その他 (31 頁) 參照

6. 作家小傳

木下孝則氏

明治二十六年東京生。前明治大學長法學博士木下友三郎氏の長男で、學習院卒業、京大法科から東大文科美學哲學科に學ばれた。

大正十年二科展初入選、同年渡佛、大正十二年歸朝、同十三年二科展出品樗牛賞、同十四年二科展出品、二科賞を受け、大正十五年前田寬治、佐伯祐三、里見勝藏、小島善太郎の四氏と共に「一九三〇年協會」を創立し、同年春陽會員に推された。

昭和三年再渡佛、滯佛中、サロン・アンテバンダン、サロン・ドウトンヌに出品。昭和九年春陽會を退會。昭和十年歸朝。昭和十年二科會員に推され、第二十三回二科展に特別出品「マドモワゼル・レイモンド」は李王家御買上げの榮を賜り京城德壽宮美術館に納めらる。「I氏の肖像」國民美術協會買上げ、帝室博物館に納められた。

昭和十年二科退會、石井柏亭、安井曾太郎、山下新太郎、有島生馬、俗伊之助、小山敬三の六氏並に令弟義謙氏と共に一水會創立今日に至つた。

〔住所〕東京市澁谷區千駄ヶ谷五の九〇二

第十圖　往　來　　中西利雄

1. 往　來

都市市街地の内部を通ずる道路、又は地方道路をいふ。都市街路は工業地域、商業地域、住宅地域によつて異なる計畫施設が行はれる。幹線通路・商業道路・住宅道路・遊歩道・廣場等が造られる。

街路網　街路の都市生活に對する重要性は都市の發達と共に益々その大を加へ、文化史上極めて重要なる役割をはたして來た。勿論現在に於ては道路が唯一の交通機關でなくなつた。然し、都市生活の要望は殆んど今日道路築造技術を完全にした。道路面積の都市の面積に對する比率は出來るだけ多くとることは得策である。我國の都市の大部分は低く、狹い不衛生的な迷路ともいふべきであつて、最近都市計畫の實施と共に、漸次改良されつゝあるのは喜ばしい。街路網の樣式には不規則形、同心圓形、放射形格子形等種々ある。利害得失はある。一種だけ採用することは、他の形式のもつ、長所の利用に缺けることになる。

街路交叉　街路の交叉を設計する爲には、交通の安全、歩行者の安易と便宜及び雨水の處理の三つの要素を考慮すべきである。

街路の衛生　堅牢で塵埃の發生少く、雨天の際にも泥濘となることなく、滑る危險なく、且つ足に强く感ずることなく、炎天の際其表面の熱せられる事少く、車輛によつて大なる音響を發しない事を要する。

街路樹　街路に沿ひ一定の距離を隔てて規則正しく植ゑられた樹木である。都市の美觀を添へ、夏季の適度の日蔭を作り、强烈な熱氣を和げ、都市市民の保健衛生上効果極めて大である。

2. 作家小傳

中西利雄氏

明治三十三年十二月東京市京橋に出生、昭和二年東京美術學校西洋畫科卒業、昭和三年五月渡佛、六年十一月歸朝せられた。生粹の水彩畫家で現水彩畫壇に於ける第一人者であり、新興水彩畫のために盡されつつある殊勳者でもある

現に新制作派協會會員、日本水彩畫會會員、蒼原會會員、上社會會員として毎回出品し、其の他國產水繪用材料研究會に關係し、又曾ては光風會員及び二部會員でもあつた。春鳥會發行中西利雄作品集の著がある。主なる畫歷は次の通りである。

大正九年より日本水彩會展に毎回出品、大正十三年には同會の會員に推された。この年は又帝展第五回に「盛夏麗日風景」が入選された。この間白日會、太平洋畫會、光風會、中央美術展等にも出品あり、光風會では受賞された。昭和四年五年と引續きサロンドートンヌに水彩各二點出品入選され、歸朝の翌年昭和七年日本水彩畫會第十九回展には滯歐作二十七點を特陳、又上社會には滯歐作二十點を出陳して畫名を高め、帝展には其の後年年外國風景を出品されたが、昭和九年第十五回帝展に於て「優駿出場」が特選を得、翌十年第二部會では「婦人帽子店」が特選となつて文化賞を授けられた。

昭和十一年には帝展推薦の榮を擔はれたが、同年新制作派協會創立に參加、其の第一回展には「夏の海岸」「婦人像」の二點、第二回展には「人物」對四點を出品され、日本水彩畫會、上社會、蒼原會等には引續き毎回出品されてゐる。

昭和十一年五月には日動畫廊に第一回個展を催し、水繪、グアツシュ等三十點を發表され昭和十四年資生堂に第二回個展を開催された。

〔住所〕　東京市中野區桃園町四八

第十一圖　風景の構圖　その一
第十二圖　風景の構圖　その二

1. すゐれん　Nymphaea tetragona

睡蓮　午時蓮、不午蓮　睡蓮科

和名をひつじぐさといふ。沼澤地に自生する多年生草本で根莖は水底を匍匐する。葉は長い葉柄によつて水面に浮び、廣卵形で全緣基脚が深く缺刻し脚端は稍鋭く徑7—10糎ばかりあり稍馬蹄形をなす。七八月頃に花を着生し朝開き午後閉ぢ。この花は花梗がながく花蓋は白色で蕚片は四個を有する。雄蕊は多數心皮も亦多く相合生する。花後花梗は漸次下曲し水中に入り壜形の蒴果を結び熟すると水中で裂開するが種子は水面に出て、水の流れのまにまに遠く送られる。水槽や池にも培養せられる。

種類　種類には次の如きものがある。

にほひひつじぐさ、「ニンフエアアルバ」、「ニンフエア・チユベローサ」、「ニンフエア・カペンシス」、「ニンフエア・ヂンジバリエンシス」、あかばなひつじぐさ、以上の外晝間咲、夜間咲、耐冬性、不耐冬性等その栽培變種はなかなかに多い。

2. 並　木

同じやうな樹木の竝んだのを並木といふ。通例道路の兩側に竝んだものが多い。西洋に於ても我國に於ても見られる。プラタナス、杉、松柳等が多い。日光街道の杉並木、東海道の松並木等は有名である。

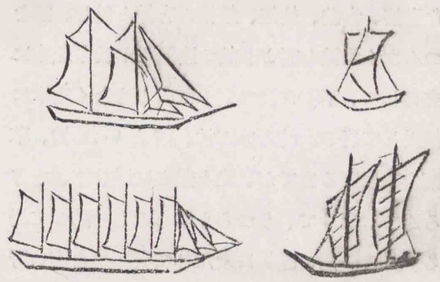
3. 紅　葉

本圖下段左圖は秋の景色で、正面にあるのは紅葉した樹木である。空氣が冷え、或は霜をうけると葉綠素がなくなつて木の葉は色づく。新綠も美しいけれど紅葉は又一入の趣がある。よく紅葉する樹木では楓、はぜ等を第一とする。

4. 帆　船

帆を裝備し風力を利用して航行する船の事で常に畫家の好題材となる。世界の各地に於て固有の形式を見るが、最も進歩せるは西洋型帆船である。我國古來の帆船を和船といふ。和船にも荷船、漁船等その使用により且又その地方によつて多少各形式を異にしてゐる。

圖中の帆船は漁業を目的とする船で、帆は西洋型帆の加味せられてゐる篠帆(シノホ)である。



左二圖は西洋型帆船二種、右上圖は昔の和船、下は篠帆による和船

第十三圖　夏の風景　板倉贊治

次の作品は獨歩の「武藏野」の一節で、武藏野の夏をスケッチしたものである。本圖と比較して見るのも一興であり、又「武藏野」の夏を繪畫化して見ることも面白いであらう。

夏　國木田獨歩

空は蒸暑い雲が湧きいでて、雲の奥に雲が隱れ、雲と雲との間の底に蒼空が現はれ、雲の蒼空に接する處は白銀の色とも雪の色とも譬へ難き純白な透明な、それで何となく穩かな淡々しい色を帶びてゐる。其處で蒼空が一段と奥深く青々と見える。ただ此ぎりなら夏らしくもないが、さて一種の濁つた色の霞のやうなものが、雲と雲との間をかき亂して、凡べての空の模樣を動搖、參差、放任、錯雜の有樣と爲し、雲をつんざく光線と雲より放つ陰翳とが彼方此方に交叉して、不羈奔逸の氣が何處ともなく空中に微動して居る。林といふ林、梢といふ梢、草葉の末に至るまでが、光と熱とに溶けて、まどろんで、怠けて、うつらうつらとして醉つて居る。林の一角、直線に斷たれて其間から廣い野が見える。野良一面、絲遊上騰して永くは見つめて居られない。

自分等は汗をふき乍ら、大空を仰いだり、林の奥をのぞいたり、天際の空、林に接するあたりを眺めたりして、堤の上を喘ぎ喘ぎ辿つてゆく。苦しいか？どうして！身うちには健康がみちあふれて居る。長堤三里の間、ほとんど人影を見ない。農家の庭先、或は藪の間から突然、犬が現れて、自分等を怪しさうに見て、そしてあくびをして隱れてしまふ。林の彼方では高く羽ばたきをして雄鷄が時をつくる。それが米倉の壁や杉の森や林や藪に籠つて、ほがらかに聞える。堤の上にも家鷄の群が幾組となく櫻の陰などに遊んでゐる。水上を遠く眺めると一直線に流れてくる。水の末は銀粉を撒たやうな一種の陰影のうちに消え、間近くなるにつれてぎらぎら輝て矢の如く走てくる。自分達は或橋の上に立て、流れの上と流のすそと見比べて居た。光線の具合で流の趣が絶えず變化して居る。穴上が突然薄暗くなるかと見ると、雲の影が流と共に、瞬く間に走つて來て自分達の上まで來てふと止まつて、急に横にそれてしまふことがある。暫くすると水上(みなかみ)がまばゆく輝いて來て、兩側の林、堤上の櫻、あたかも雨後の春草のやうに鮮かに綠の光を放つて來る。橋の下では何んとも言ひやうのない優しい水音がする。これは水が兩岸に激して發するのでもなく、又淺瀨のやうな音でもない。たつぷりと水量があつて、それで粘土質の殆んど壁を塗た樣な深い溝を流れるので、水と水とがもつれてからまつて、揉み合て、自から音を發するのである。何たる人なつかしい音だらう。

作家小傳

板倉贊治氏

明治十年一月愛知縣碧海郡新川町に出生された。東京高等師範學校圖畫手工專修科明治四十一年卒業、後同校教授となり、現に圖畫手工專修科の主任として教員養成を擔當せられ、外附屬中學校に於て親しく中學生の指導にも當つて居られる。

國定教科書編纂委員、或は文部省圖畫科檢定試驗委員、日本水彩畫會員、一曜會會長。

〔住所〕東京市小石川區小日向臺町一ノ三〇

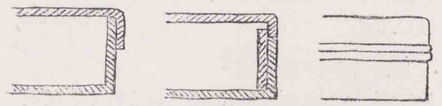
（詳細は卷一卷末12頁第十二圖バナナ參照）

第十四圖　陶磁器　その一
第十五圖　陶磁器　その二　山田喜外義

1. 容器各部の名稱

容器に於ける各部の名稱は其の容器の種類によつて色々であるが、其の最も一般的のものにつき述べる。

見込　皿、鉢、盆等の中央をいふ。
高臺　皿、鉢、茶碗等の裏に一寸高くなつてゐるところをいふ。陶磁器では糸尻ともいふ。
口　容器の上部、物を入れるところ。
頭　容器の形によつて其の上部をいふ。
頸　上部の細くなつた部分をいふ。
胴　其の中央部をいふ。
脚　其の下部である。
底　容器の最下部である。
蓋と實　物を入れる部分を實といひ、これを被ふ部分を蓋といふ。蓋には被せ蓋、印籠蓋覆輪の三種がある。



被せ蓋　印籠蓋　覆輪

2. 組物

普通にセツトといふ。テーブルと椅子、茶器膳椀の如きものは何れも一組となつて居り、自然その形や色や模樣は同一系統のものとせねばならない。其の數も色々で對といへば二つ、五客といへば五つ、これ等は主に日本風のものに用ひられ、洋風のものは多く一打又は半打を一組としてゐる。

重ねといふのも組物、揃へといふのも同樣である。

3. 陶磁器の輸出

陶磁器は我國輸出品中重要な位置を占め、產額亦年々增加してゐる。

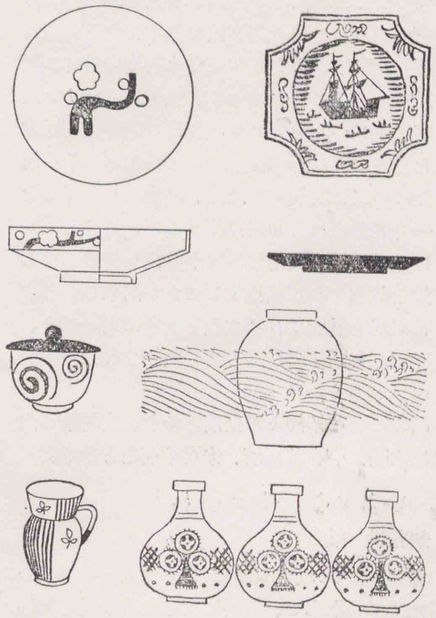
輸出額（單位千圓）

昭和六年	九年	十年	十一年
19,307	41,877	42,734	43,191

4. 圖案の描き方

立體圖案は一般に投影圖法を以て平面、立面側面を描寫するのが普通である。陶磁器も其の原則に從ふのであるが、其の形狀によつては立面、平面、側面の一つ又は二つを省略して現はす場合もある。

これに施す模樣の配置と其の描法には次の如き種々の樣式がある。



5. 作家小傳

山田喜外義氏

大正二年十一月石川縣羽咋郡柏崎村に生れ、昭和十二年東京美術學校圖案科を卒業された新進圖案家で、大倉陶園技師として重きをなしてゐられたが昭和十四年春軍隊に入營せられた。時代陶磁器並に漆器に關する研究深く、時代椀大觀に執筆せられてゐる。

第十六圖　柘榴といちぢく　松村巽

1. ざくろ　Punica granatum

柘榴　柘榴科

ざくろは地中海沿岸の原産であるが、日本、支那、ロシア、北米等の暖地に栽培されてゐる。落葉の灌木で高さは2米—3米半に達する。葉は長楕圓形で光澤があり略對生する。梅雨の頃赤い筒をしてゐる蕚と、深紅色の花瓣を有する美花を多數に着生し、花後蕚は發育して果皮をなす果實となる。果實は熟すると裂開し、紅色の肉でつゝまれた種子を出す。觀賞用の變種には重瓣のものや白色其の他の色を有する。

果實は食用、幹皮及び根皮は柘榴皮と言ひ藥用にする。この主成分は、ペルレチエリン及び、イソペルレチエリン、其の他に柘榴鞣酸を含有する。縲蟲驅除として特効がある。用法は一二日間絶食した後、根皮は凡そ五匁を一合五勺の水に廿四時間浸出し、これを一合に煎詰め適宜服用し、三十分後少量のひまし油を飲用すれば驅蟲することが出來る。其の他根皮を燻燒すれば水蟲を治すに効があり、花全體を蔭干にしたものを煎用すれば下痢止の効がある。

品種には花柘榴と實柘榴とあり、實柘榴の内には水晶柘榴、甘柘榴、赤實柘榴などある。

2. いちぢく　Ficus caria

無花果　桑科

北部アフリカ、小亞細亞、南部ヨーロツパの暖地に多い木本で、我國には寛永年中長崎に移植繁殖せしめたものといふ。この植物は挿木として活きやすいものであるから、現今では各地に栽培されてゐる。落葉の喬木で幹の高さは丈餘に達し、樹皮は粗糙で皮面を切ると白色の乳樣液を出す。葉は桑の葉よりも大形で厚い。この葉には全葉のものと二三裂するものとあるが何れも緣邊に鋸齒がある。六月頃に葉腋上に花をつげる。遲れた頂部の果實は小さいまゝ越冬し六月下旬に熟する。この花は單性で花托の中にかくれてゐる故隱頭花序といふ。花托は球狀又は倒卵形多肉で中心は空で頂上に小孔を有する。

果實は初め綠色で熟すると通常紫色となり甘味である。内に白色の細子があり大いさは罌粟の實の樣である。この食用となる部分は花托である。生食する外、青果をぬかみそ漬として食し、ジヤム、乾無花果ともする。蛋白質の消化劑を有する故、女、子供、重症患者の嗜好品としてよい。葉も亦藥用となる。

品種　左の如き種類がよく栽培されてゐる。

ホワイトゼノア　晩成種で夏秋二期結果し、果肉は淡褐色で甘味が強い。

ブラウンターキイ　晩成種で夏秋二期結果、豐産肉質暗紅色で粘りがとく甘味が強い。

サンペトロブラツク（ドウフイン）　晩成種夏秋に結果、夏果は大形で秋果はやや小さい。長倒卵形で暗紫色をなし、强健で豐産する。

白無花果　黄白色の果實を生ずる。小さいが美味である。

3. 瀨戸物　（水差）

陶磁器の別名、瀨戸市に於て最も古く、又最も多量に生産せられ、諸國に分布せるが故に、關西、關東、中國地方に於て、陶磁器を一般にかく呼ぶ樣になつた。北陸、九州、山陰地方に於て、陶磁器を唐津物と呼ぶ類である。

瀨戸燒　瀨戸市及びその近傍で製造する燒物の總稱である。最初は爐器或は粗磁器に限られてゐたが、現在では殆んど磁器を主とする樣になつた。上古時代から瀨戸から燒物を調貢したが、起源は不詳である。後堀河天皇の朝に至り山城の人加藤四郎左衞門景正なるもの僧道元に從ひ、貞應二年支那に渡航、安貞元年歸朝瀨戸に至り始めて良土を得、宋風の陶器を製し、子孫にこれを傳へた。更に豐太閤征韓後肥前に磁器の創製があつた後、尙瀨戸では磁器の製法が出來なかつたが、享和四年加藤民吉、磁器の製法を開く。現今では各原料の精製から成形、並に燒成に至るまで殆んど歐洲風である。

4. 硬質陶器　（卷二卷末第三圖靜物の講圖參照。）

5. 作家小傳

松村巽氏

洋畫家文展無鑑査（卷一第六圖卷二第八圖參照）

第十七圖　獸類のスケツチ　寺内萬治郎

1. とら　Felis tigris

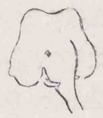
虎　哺乳類　食肉類猫科

とらはアジアの特産で、南はジヤワから北はシベリアに及び、東はマライ群島から西は中央アジアに及んでゐる。ボルネオ、セイロン島には居ない。分布が廣い故地方的變化が多い。大なるものは頭胴1、8米、尾0、9米内外で地色は黄色で黑色の横縞がある。現今世界に七亞種程識別されてゐるが、我國にはてうせんとら、まんしうとらの二亞種を產する。

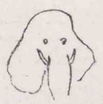
2. ぞう　Elepha maximus

象　哺乳類　長鼻目象科

陸棲動物中最大のもので、皮膚厚く毛が少く鼻は圓筒狀をなし屈伸が自由で藁一本でもよく拾ひ取ることが出來る。門齒は上顎にだけ一對あつて長く犬齒はない。象牙といふはこの門齒のことである。種類にはインド象とアメリカ象とある。印度ぞうは頭頂が凹形で耳は比較的小さく、門齒も亦小さい方で、1・6米を超ることは稀である。性質は怜悧でよく人に使役される。アフリカ象は印度ぞうより大形で頭頂が凸形である。耳が大で肩を掩ひ、門齒が大で2米に及ぶ。性質は柔順でない故勞役に使用されない。壽命は百歲以上である。



インド象



アフリカ象

3. ぶた　Sus scrofa var domesticus

豚　哺乳類　有蹄目野猪科

家畜として有用なものである。現今我國で飼育してゐるものは、在來種のものは殆んど影を留めず、外國種の增殖せられたものである。元來豚は昔時野猪から人爲淘汰されたもので、印度野猪よりアジア豚、それより支那豚が生じ、それが琉球に移入され茲に在來種といふべき琉球豚が生じ九州其の他に移入されたもので、體は黑色で長味があり肉付きがよくない。歐洲豚は一は在來種として殘り、他はタンワース種に改良された。英國でアジア豚と歐洲豚の雜種を改良したものが現今盛んに飼育されてゐるヨークシヤ、バークシヤである。

4. やぎ　Capra hircus

山羊　哺乳類　有蹄目牛科

山羊は昔時小亞細亞、ペルシヤ地方の野生山羊とひまらやの西部アフガニスタン地方の野生種との雜種を作り、スイスで人爲淘汰し家畜としたものが多いといふ。我國へは德川時代に支那より、琉球を經て九州に輸入したといふ。山羊の畜養品種は多く、其の形狀色彩、角形、毛量など千差萬別で一定してゐない。

山羊

5. にほんいぬ

Canis familiaris var japonicus

日本犬　哺乳類　食肉目犬科

にほんいぬにも實は少くとも三通りの系統があるといふ。第一は最北系統でバレシベリア民族に飼はれたもの、體は大形で毛が厚く尾は太く短かく之を背上に卷く、耳は圓く左右に開く

體は白色に黑色を混じ鼻黑く髭があり吻尖り虹彩は褐色で眼は上向してゐる。第二は中北系統でネオンベリア民族に飼はれ日本海沿岸地方に多い。體は中形で、耳は長く立ち吻長く額は三角形、尾は卷くも少しく横に向ふ。毛は長く粗で體は黑又は黑と赤、灰黃、灰等ある。背は眞直で腹は凹狀をなす。第三は南方系統で東印度より比律賓に飼はれる。我國では臺灣、九州、中國、四國等に多い。小形で赤色、毛は短硬である。

本圖は最北系の秋田犬である。

6. うま Equus caballus

馬　哺乳類　有蹄類馬科

家畜として古い歴史を有する。飼養の起原は有史以前である。日本馬は朝鮮馬と同じく其の祖先はプルツエフアルスキーといふ蒙古の野生種であらうといふ。現在は外國種が多くその用途により左の種類が飼養される。乘用ではアラブ、サラブレツト、アングロアラブ、ハンガリー馬、ロシア馬、輕挽用ではハツクニー、クリーヴランド-ベイ、アングロノルマン、重挽用にはベルシユロン、クライズデール、ブランバンタがある。日本馬は專ら農耕、駄用、乘用で、南部馬、秋田馬、最上馬、薩摩馬などがある。

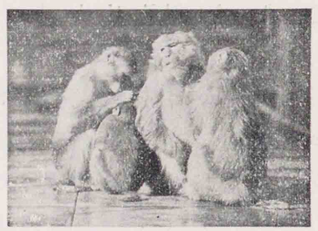
7. ねこ Felis ocreata var domestica

猫　哺乳類　食肉目猫科

畜養動物として廣く世界に飼はれてゐる。歐洲產の家猫は、元アフリカ山猫より生じたものといひ、アジア產のものは印度地方の山猫より變化した品種であらうとの說がある。色は白、黑、三毛を普通としてゐる。三毛猫は牝に多く牡に稀であることは限性遺傳としてよく知られてゐる。

8. さる Macacus fuscatus

獼猴　哺乳類　靈長目猿科



さる

我國の特產で南は屋久島から青森縣まで分布してゐる臀胝が大で頰囊を有する。深山にすみ性怜悧である。別名にほんざるといふが、靈長類全體をもさると稱する。

9. 獸類畫

日本畫洋畫の別を問はず、獸類を題材とする例は甚だ多い。殊に虎、馬、山羊、猿、猫等には有名な作品もある。探幽や應擧や崋山の虎、金岡やドラクロアの馬、狙仙や栖鳳の猿、春草の猫等はその例であらう。

之等の獸類には夫夫特有の感じがある。虎は勇猛果敢、象は溫和と偉大の象徵、豚には何か野卑と貪欲の感じがあり、山羊には思索的な匂ひがあり、馬の俊敏、猿の狡智、猫の陰險等は又圖案の題材等になるであらう。

10. 作家小傳

寺內萬治郎氏

明治廿三年十一月大阪市に生れ、大正五年三月東京美術學校西洋畫科卒業、文展無鑑査、日本大學藝術部教授、光風會會員、昭和八年以來帝展及び文展審査員に屢々任命せられ洋畫壇の覽將として重きを成してゐる。

その畫歷の主なるものは、大正七年第十二回文展「茱萸」を出品以來。大正十四年帝展第六回「裸婦」は特選。昭和二年第八回帝展「インコと女」特選。昭和三年推薦、昭和十三年第二回文展「赤いコート」は文部省買上となつた。（詳細は卷二卷末第一圖チユーリツプ參照）

第十八圖　犬

清水良雄

1. いぬ Canis familiaris

犬　哺乳類　食肉目犬科

いぬは家畜として最も古くより飼はれたもので、その原種については種種の說があつて詳かでないが、狼の或種であらうといはれ、古い時代から狩獵や他の家畜の護衞等に用ひられたものである。種類は原產地により日本犬と(和犬)洋犬とに分ち、用途によつて獵犬、番犬、愛玩犬、警察犬、軍用犬、勞役犬の六種に分つ。

獵犬　獵類の獵に使用するものでは日本種、グレーハウンド種、ビーグル種等があり、鳥類の獵にはセツター種や、ポインター種が最適である。

番犬　マスチーフブルドツク種、ブルテリア種を使用する。羊の番にはコリー種が注意深く忍耐强くてよい。

愛玩犬　よく飼養されてゐるのはテリア種と狆である。その外にポメラニアン種がある。何れも小さい。

警察犬　犬の鋭敏な嗅覺を利用して犯人搜索夜警、登山遭難者の發見などに使用するが、我國では未だ利用されてゐない。ニユーフアウンドランド種、グロネンダル種が使用される。

軍用犬　傳令、警戒、搜索、運搬、捕鼠等に使用される。現在我陸軍で指定せる軍用犬はシエパード種、ドウベルマン・ピンシエルは、エアデール・テリア種であるが、日本犬も近年軍用として研究される樣になつた。

勞役犬　牛馬と同樣に勞役させるもので、マスティフ種、グレート・デーン種が用ひられる。

本圖の犬はポインター (Pointer) 種で、鳥獵用として最も優れてゐる。體は中等大で、口唇が垂れ耳朶はうすく大きく垂れ下り、被毛は短かく滑かで、毛色は暗褐色、赤褐色、墨色及びそれ等の駁である。嗅覺は特に鋭敏獵鳥を發見しこれに接する時は、必ず前肢の一方を擧げて指示する特性有をする。

ポインター

セツター

2. 作家小傳

清水良雄氏

明治二十四年東京生、大正五年東京美術學校西洋畫科卒業、大正二年以來文展帝展に出品を續け、大正六年特選、大正七年再び特選、大正八年三度特選、大正十一年又々特選となり、畫名愈々上り、大正十五年より帝展委員となり、昭和十一年よりは新文展に出品し洋畫界に重きを成してをられる。詳細は卷一第十七圖梨と葡萄參照。(卷一卷末17頁)

第十九圖　舟

藤島武二

本課は海景の描寫であるから、これに聯關して水や河や海の寫生に關する一般的の注意を述べる。

1. 水

日本畫に於ても西洋畫に於ても水は風景畫中の大切な部分である。水の種類は大變多く川も海も、湖水も、瀑布、溪流、池沼何れも水である。畫者は自然が示すそれ等の水面の變化を逸せずに現さねばならない。水の色は空の反射のみではない。水底からの透射もある。天候の具合にもよる。心して畫くべきである。

2. 河

河川は水の描寫中では一番變化の少いものであるが、唯船舶の往來がはげしいので寫生はやり難いとされる。その寫生で注意を要するのは水と陸との境界線を巧に現すことである。この線の屈曲は樹木の姿勢同樣多少强調し變化を出してかく方が感じが出る。河水の色は一定ではない。水の流れのゆるい川は空の色の支配を受け、又川岸の樹木や家屋の倒影もあるが、急流にあると概ね白波に支配される。

3. 海

日本は島國の恩惠をうけて海景が到るところで描ける。海も季節天候時刻による變化ははげしい。晴朗の日の海は暖いコバルト色を呈して居ても、一朶雲起り日光が遮られる時は暗黑に化する。同じ日光でも無風の日と風の日では大變色彩が違ふ。

春の海はローズマダー、コバルトブリューが主色であり、夏の海はウルトラマリン、秋から冬への海はプルシアンブリューを呈する。しかしこれも一概にはいへない。太平洋と日本海とは全く別の世界であつて前者は明るいが後者は冬は暗灰色、夏でさへ暗い藍色である。波の描寫は特殊の技巧を要する。之は波の刹那の形と色を先づ頭に入れて、記憶によつて描かなければならない。白波をかくに三つの技巧がある。紙の白地を塗り殘すこと、ホワイトを用ふること、ナイフで削ること之である。しかし技法は結局は個性的のものでありたい。

4. 湖

湖水は平穩な海の寫生と思へばよい。風のない靜かな日の早朝の湖面に、四周の山や樹木が倒影して水が青く澄んでゐるのや、秋冬の湖面の冴えた色などは、到底海や川では味へない。倒影の描き方は實景を寫すのと區別はない。湖面の明さ暗さによつて調子の別はあるが、總じて實景よりは暗い。湖面の遠近を說明するためには手前に草や木を入れるのは効果的である。

5. 溪流

溪流は形や線に微妙なものがあるから波の寫生が相當手についてからでないとむづかしい。

6. 作家小傳

藤島武二氏

慶應三年九月鹿兒島に出生、夙に出京して幸野楳嶺、川端玉章、山本芳翠、中丸精十郎、松岡壽等について洋畫を學ばれたが明治二十九年東京美術學校に洋畫科が新設されるに及んで、入つて助教授に任ぜられたのが氏の美校教官生活の最初である。明治三十八年には美術研究のため、歐洲に留學を命ぜられ、巴里國立美術學校に入り、フエルナン・コルモン氏について學び、更に四十一年羅馬に於てカロリエス・デュラン氏の指導を受けたが、明治四十三年歸朝後東京美術學校教授に進んで現在に及んでゐる。現に帝國美術院會員、帝室技藝員として名實共に畫壇の大御所、從四位勳三等に叙せられた外、昭和十二年には文化勳章を賜つた。昭和十四年には聖戰美術展覽會の審査長を拜命し、更に川端畫學校の洋畫科主任として令名がある代表作として赤星鐵馬氏藏「天平の面影」、鈴木六郎氏藏「草の香」、東京美校藏「池」等著名である。

〔住所〕　東京市小石川區曙町一五〇

第二十圖　山水圖

1. 北宗畫

支那畫の南宗畫に對する稱呼である。單に北畫ともいふ。其の祖を唐の李思訓父子となし、宋の趙幹、趙伯駒、劉松年、夏珪、馬遠等をも其の派に數へる。宋代宮廷の保護を受け畫院の畫として發達し特に院體派とも呼ばれる。

北畫の名稱は江北の地勢が險峻奇聳であるのに起因したといはれる。即ち北方支那に發達した繪畫は自ら筆法遒勁剛壯の趣を示すといふのである。これに對して南畫と稱するのは支那南方の地勢の山水溫雅にして秀麗なるに影響されて自ら高雅輕快な筆法をなしたといふ。北畫は鎌倉末期我國に傳來したが其の畫風が當時の人心に適ひ忽ち天下に流布するに至つた。僧明兆僧如拙、啓書記、僧雪舟等は其の代表的作家である。後北畫は狩野派出現の主因となつた。

雪舟（2080 — 2166）　足利時代の畫聖で備中赤濱の人、本姓は小田氏、名は等楊、十三歲で同國寶福寺に入つて僧となり、後京都相國寺、鎌倉建長寺等にも學んだ。天資畫を嗜み、如拙周文を模して更に新意を出したが應仁元年畫筆を載せて明に遊び大いに彼地の風景を寫した。明朝の君臣雪舟の畫技を賞し、勅して禮部院の壁畫を揮毫せしめたといふ。文明元年に歸朝し周防の山口に居を定めた。雪舟が入神の畫筆に成るものは何物を表現しても生命を宿したが、殊に山水は古今獨步の概があつて、其の氣格の豪宕と用筆の端正と、其の發墨の豐潤とに至つては眞に千古絕倫といはれる。狩野派の重んじた「破墨法」といふ手法は彼の畫技から出たのである。永正三年に歿した。年八十七。遺墨の中で有名なものは京都本法寺の「十六羅漢」、淺野侯藏の「金山寺、育王山」、東京博物館の「破墨山水」、毛利侯藏の「山水畫卷」、攝津の小西氏藏「自畫像」等である。「涙の鼠」「大內侯と雪舟作無落欵畫」等の逸話が多い。（理論篇 119、146 頁參照）

2. 四條派

寶曆明和の頃京都に圓山應擧が出で實物寫生を主義として一家を成した。應擧は初め狩野派を學び、又宋元畫を習ひ、更に元の錢舜擧の寫生畫を慕ひ、西洋畫をも研究して遂に寫實の一派を起した。これを圓山派といふのである。

然るにこの頃京都に松村月溪があり、初め蕪村に師事して南畫を學び非凡の才を稱せられたが、蕪村の死後應擧の畫風を慕つてこれと交り、大いに寫生に傾注し南畫を圓山派化した情趣豐かな一派を創出した。好んで側筆斜掃の沒骨法を用ひた。月溪は京都の四條に住んでゐたから世に之を四條派といふ。圓山派の流れと見ることが出來る。月溪の弟景文は筆致輕妙で花鳥を得意とし、長澤蘆雪、森狙仙等亦有名である。

松村月溪（2412 — 2472）　京都の人で四條派の祖である。吳春とも稱した。通稱は嘉右衞門、また允白とも號した。彼は京都の金座の平役であつたが、家貧しく當時島原青樓の遊女の代筆などをして、糊口の料としてゐた。後攝津吳服里に隱れて春を迎へたところから吳春と署名するやうになつた。

初め大西醉月に學んだが、のち蕪村の門に入つて南畫と俳諧とを修めた。蕪村が彼の畫

を評した言に、春の人物は吳彬に愧ぢず、花鳥は林良に唐突すといつたことがある。非凡の手腕を有してゐたことが、これによつて知られる。後應擧と交り、互に畫道を討論して深く悟るところがあつたと傳へられる。果然彼は蕪村の風を變じて寫生に努め、古來和漢に通じて流下してゐる南北二派を打つて一丸となし、ここに一家の面目を開いた。卽ち四條派の源流である。

京都四條通東洞院の東に住したためにこの名稱が出たのである。月溪の作は用墨滋潤で多く刷毛を用ひ、濃淡自在の妙を發揮して圓轉滑脫洵に神に入るものがある。西本願寺書院の「耕作圖」は彼が畢生の大作、藤田男藏の「雨景雪景」、三井男藏の「宇治川合戰圖」は著名である。文化八年年七十で歿した。

(理論篇 121 頁參照)

3. 南宗畫

南畫ともいふ。支那畫の北畫に對して用ひられる稱呼で、支那南方に發達した繪畫であるとされる。文人畫とも呼ばれ高士、文人の餘技として喜ばれたものである。手法は簡潔溫潤、淡白輕快、氣韻を主として形似を求めず、好んで披麻、解索の皴法を驅使し、瀟洒脫俗の概があり自由濶達の態度を以て、畫家の主觀を山水花鳥に藉りようとするのである。

唐の王摩詰を始祖とし、張璪、荆浩、董源、米氏父子に傳つて元の四大家に及ぶとされてゐる。我國に傳來したのは享保年間淸人伊孚九、沈南蘋の長崎渡來によるもので、この畫風は當時の儒者文人の喜ぶ所となり、祇園南海、柳澤淇園等がその先驅をなし、池大雅、與謝蕪村等がこれを大成した。かくて德川末期に及んで流行愈々盛となり、京畿を中心として關東、九州に傳播するに至つた。

渡邊崋山、椿椿山、田能村竹田、浦上玉堂、田崎草雲等は有名である。

田能村竹田 (1237 — 1295) 江戸時代の文人畫家である。名は孝憲、字は君彛、竹田は其の號である。豐後の竹田に生れ長崎、熊本に遊び、後江戸に出て谷文晁にも敎を受けたが滿足せず、又京都に行つて村瀨栲亭について漢學を學び、歌道、詩歌にも精通したが畫道は元の山水畫家王叔明に私淑し、元、明淸諸家の畫蹟を廣く採り、土佐、狩野を深く研究したが、古代に偏せずして近代の畫蹟をも涉獵した。後、致仕して風流を旨とし山水の間に優遊して賴山陽や篠崎小竹等と交遊した

竹田の畫は運思深く落筆熟して、實に近代南畫の巨擘たる名に恥ぢぬものがある。詩畫の著書も亦多く、「山中人饒舌」と題した畫論の如き最も著名である。天保六年八月大阪に歿した。年五十九歳。本山豐實氏藏「亦復一樂帖」大辻久一郎氏舊藏「船窓小戲帖」、眞島明文氏藏「松巒古寺圖」等は其の傑作とされてゐる。(理論篇 121 頁參照)

第二十一圖　秋の風景　結城素明

秋の風景の圖に寄せて次の一文を味はせたい。

秋　上司小劍

秋は物の凋落を意味するやうに、昔から人々の頭を支配して來たけれども、凋落の裡に復興の氣が溢れてゐるのを見のがすことは出來ない

澄み切つた大氣……それは秋の有する寶ではないか。山も野も皆一つ一つ磨きあげられたやうに鮮やかな光を放つ。遠くにあつた山は近くに引き寄せられた如く、近くの野はいよいよ近く、呼べば應へんばかりである。

秋晴の日に赤蜻蛉の飛び交ふのを見るのは、風情のあるものだ。秋の太陽は春の太陽よりも人に優しい。日月に親しみ、星辰に親しみ、天體と人間とが融和するのも秋の特色である。宵の明星の美しく柔らかい光がまづ夕涼の客に親しむ。團扇片手に顏を掩うて「お星さま、ぼあゐないゐない、ぼあ」を宵の明星に向つてしてゐる幼兒の姿も愛らしい。

寂しみを主とする日本の詩人は、殊に秋の天地に於て活躍してゐる。「鳴立つ澤の秋の夕暮」の西行法師や「芭蕉野分して盥に雨をきく」芭蕉なんど、皆秋の詩人と稱し得る。枯木寒鴉の寂しみに生きる芭蕉は、秋といふよりも、寧ろ初冬の情趣に生きた詩人といはなければならないが、彼の讃美した時雨、枯野なんど、俳諧の季に於ては冬に屬するけれど、情緒の上からはどうしても秋である。

澄みきつた、さうして寂しみのある秋といふ時季あるが故に、よく生きて來たとでも言はなければならない詩人が日本には多い。

天體の一つとして最も我々の世界に近い月は昔から多くの詩人によつて讃美された。わけても東洋の詩人は、月に向つて感傷的な言葉を投げてゐる。さうしてそれがすべて秋に於てである。月といへばもう秋のものといふ氣がするではないか。「明月を抱いて……」の名句を赤壁の賦に殘した蘇東坡の秋を讃美した心と、我が芭蕉翁が深川の庵室に明月を仰ぎつつ、たゞ一人「池をめぐりて夜もすがら」の寂しみを歌つた心とは、同じやうな詩趣である。

- 心なきみにはあはれはしられけり鳴つた澤の秋のゆふぐれ　西行法師
- さびしさはそのいろとしもなかりけり槇立つ山の秋のゆふぐれ　寂蓮法師
- 見わたせば花も紅葉もなかりけりうらのとま屋の秋のゆふぐれ　藤原定家
- みよし野の山の秋風さ夜更けてふるさとさむく衣うつなり　藤原雅經
- みる人もなくてちりぬるおく山のもみぢはよるのにしきなり　紀貫之
- 夕近くまだしめりゐる張りたての障子にひびくかなかなの聲　前田夕暮
- 仰向けに體浮けたれば靑空をひえびえと感ずわが臍のほとり　同
- 路下の瓦の屋根のうつぼぐさ仔馬ゐるらし脚のみが見ゆ　同

作家小傳

結城素明氏

明治八年十二月東京市本所に生れ、初め川端玉章翁の門に學ばれたが、明治二十五年東京美術學校に入學して、三十年日本畫科を卒業された。更に西洋畫科に入つて三十三年まで在學された。明治三十二年福井江亭、島崎柳塢、平福百穗、渡邊香涯、石井柏亭氏等と光聲會を起し又大正五年に鏑木淸方、吉川靈華、平福百穗、松岡映丘、田口掬汀氏等と金鈴社を結び、每年その作品を展觀された。大正十三年には文部省在外研究員として外遊の途に上り、各地を遍歷多數の油繪作品を得て翌年三月歸朝された。

これより先き明治四十年には東京勸業博覽會に「蝦蟇仙人」を出品して受賞され、文展へは第一回に「無花果」第五回に「轉」、第六回に「甲ふたる馬」「樹下小集」、第七回に「相思樹下把金絲圖」、第八回に「箇是劉家黑牡丹」等の諸作を出して褒狀三等賞二等賞を次々に得られ、更に大正五年第十回展に「歌神」、翌年第十一回展に「八千草」は共に特選の名譽を得られた

大正八年第一回帝展には審査員、大正十四年帝國美術院會員に任命、その後明治神宮聖德記念繪畫館の壁畫を謹作せられた。

編著書としては「巴里スケツチ集」「東京美術家墓所考」「伊豆長八」、石井柏亭等との共編「美術辭典」等がある。現に東京美術學校敎授として日本畫科主任の重職にあられる。昭和九年九月滿洲國首都新京に於て開かれた日滿合同大美術展覽會に「那須山」を出品して、のち滿洲國皇帝に獻上され、友邦の皇廷府壁間に久遠の名譽を殘す光榮に浴せられた。昭和十二年帝國藝術員會員に任ぜられた。

〔住所〕 東京市本郷區西片町一〇

第二十二圖　賞　牌　　大　智　浩

1. メダルとカツプ

考案の參考として各種の賞牌を例示する。

カツプ各種

2. 作家小傳

大智　浩氏

明治四十一年八月、岡山縣に生る。昭和四年長岡高等工業學校電氣工學科卒業、昭和十二年東京美術學校工藝科圖案部を卒業。美術學校卒業の際銀時計を受けし程の秀才である。

トヨタ自動車車體設計懸賞に應募三等及び佳作を受く。又東京市水道局水道設置ポスター懸賞募集に應募一等賞、又國民精神總動員ポスターに一等當選し、昭和十四年七月內閣情報部週報、寫眞週報の合同ポスター二等當選。同八月國民精神總動員主催時局ポスター三等當選、現在、味の素本舗株式會社鈴木商店廣告課勤務。

〔住所〕　東京市目黑區上目黑七の一、一一八

（詳細は卷二卷末14頁第十五圖ポスター參照）

第二十三圖　木　工　品　　上　山　　藹

1. 木　工

我々の住居及び日用の家具什器は多く木材を材料として造られ、木製品は人類の生活上極めて重要なものとなつてゐる。從つて我々が木工に關する知識の大要に通ずることは、生活上便利が多いばかりでなく、延いては木材に富む我國情に於ては木工工藝品の進步發達をも促すことになる。

而して又木工品の圖案に於ては材料構成等に關する知識を持つことも必要である。

木材　木工に普通使用する木材は松、杉、檜樅、朴、楓、鹽地、栓、桂、桐、櫻、楢、栂、檜等であるが、近來比律賓からラワン材が盛に輸入される、これ等は製品の目的によつて夫々の使途を有してゐる。

工作法　木工工作の方法は第一に木材を目的物の大きさに從つて切斷し木取をすること、第二に木取したものの鉋削、鋸斷、形の修正、第三に組立と仕上である。

そして之等の工作法中極めて簡易なものについては木取、鉋削、形の修正だけで足るものもあり尙又接合、着色(塗裝)彫刻等の工程を必要とするものもある。一般に工作の順序としては木取、板削、鉋削、鋸斷、接合、仕上等の諸工程を經て出來上る。

板の各種　樅、檜、朴、桐、杉等材質軟く白色に近い肌を有してゐる木材を**白木**といひ、櫻、栗、樫、榛等の如く材質硬いものを**堅木**といふ又紫檀、黑檀、鐵力木等材質更に硬いものを**唐木**といふ。

人造板といふのは木材を外側から機械力でむき取り平に展ばしたものを縱橫に三枚乃至七枚位糊付したもので四粍から一糎位まで色々ある**ベニヤ板**といふのがこれである。

2. 家具の類別

家具はこれを大別すると、

1 小物類(衣類掛、土瓶敷、盆、文具其の他)、
2 箱物類(硯箱、煙草盆、火鉢、本箱其の他)、
3 臺物類（机、食卓、花臺、鏡臺類)、
4 棚物類（飾棚、書架、簞笥、陳列棚等)、
5 卓子類（諸卓子)、
6 椅子腰掛類(小椅子、長椅子其の他)、
7 建具類(衝立類、屏風類、衣桁類、建具類欄間類）となる。

3. 製　圖

製圖は製作に先立つて其の形狀、構成、色彩等を圖示することで、これに圖案、工作圖、設計圖等の言葉が用ひられる。何れも劃然たる區別はなく、往々同義にも用ひられてゐるが、大樣、次のやうに心得て置けばよい。(理論篇 80 頁參照)

圖案　製作せんとする器物の材料、形狀、構成色彩を外觀的に扱つたもの、つまり出來上り圖を主としたもので綿密な施工法にまで及ぼないのが常識である。しかし施工法の一班を示しても決して惡いことはない。

工作圖　製作品の形狀、大小、構造、仕口及び材料等を明示し、實際製作の指針としたものである。尙この圖によつて施工法の一切が分るのでなくてはならない。

設計圖　諸構造物の製作法、組立法、形狀、材料等の一切を計畫しこれを圖示するものをいふ。從つて設計圖の基礎となるものは科學であり、これを具體化するものは技術である。而し

て工作圖は全く設計圖と同義であるが、一般に大がゝりの構造物、例へば建築、機械等に對して設計圖といひ、小形な構造物、家具、小工藝等に對して工作圖といふ。

圖示の形式　一般に圖案の場合は立面圖（竪圖）平面圖（伏圖）、側面圖によつて圖示し、物によつてはその何れかを略すこともあり、又等角圖傾斜圖、透視圖風に描くこともある。工作圖に於ては更に截斷圖、部分詳細圖を必要とすることもあり、尙綿密なる工作に於ては其の透視圖を畫き、之を配景圖或は見取圖といひ、又別に各部の仕口、構造等を理解せしむるために等角圖を附加することもある。

縮尺又は伸長尺　縮尺は大なる物體を畫く場合、伸長尺は小なる物體の細部を明瞭に畫くために用ひる。縮尺は通常二分の一、五分の一、十分の一、二十分の一、五十分の一、百分の一等であるが、特に建築製圖に於ては二百分の一五百分の一、一千分の一を用ひる。家具製圖に於てはこの外原寸圖も用ひられる。

寸法記入法　寸法線は一般に細線、破線を用ひ、着色のときは青線を引く。寸法の數字は其の縮尺の如何に拘らず實物の寸法を以てする。從來我國に於ては尺、寸を用ひたが、現在はメートル法に改正された。外國では佛、獨がミリメートルを單位とし、英、米は呎、吋を用ふる習慣がある。

4. 作家小傳

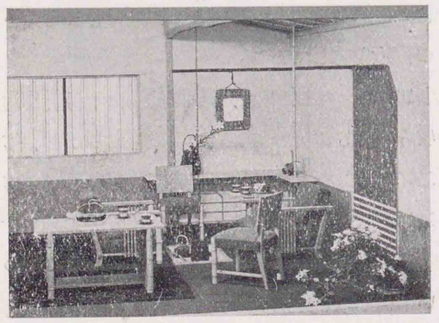
上山　藹氏

明治二十七年九月東京市本郷區森川町に生れ初め五島耕畝氏に就いて日本畫を學び、大正十年東京美術學校圖案科を卒業された。

美術學校を卒業直ちに東京三越本店に入り、その室内裝飾部にあつて、實地家具の圖案に、從事せられつつ今日に至つてゐる斯界の先達である。昭和三年十月、室内裝飾研究の爲め、外遊せられ 米・英・佛・獨・伊・瑞・諸・和・白・西班牙瑞西・ポーランド・墺・チェツコ 等十七ケ國を視察せられ、翌年十二月歸朝後三越本店改築に當り内部の裝飾を指導完成、日本風のうちに歐米風を加味した新樣式の研究指導に當り創作界に重きをなしてゐる。その設計と作品は常に三越に於ける室内裝飾展覽會に出陳せられ好評を博されてゐるが、第一回實在工藝展には「ベランダ用家具セツト」第二回展には「書齋用家具セツト」を何れも無鑑査にて出品せられた。

〔住所〕　東京市本郷區駒込林町二一六

下圖は上山藹氏設計の木工品家具セツトである



山莊の一室（部分）　新設計室内裝飾展觀、1938年

玄關脇應接室　新設計室内裝飾展觀、1939年

第二十四圖　金工品　羽野禎三

1. 金工の種類

金工の種類を大別すれば鍛金、鑄金、彫金、板金、管金、線金とする。

鍛金　板金を打ち展ばして器物を造る。藥鑵菓子器等はこの方法によるもの多く、特に鎚金法ともいふ。銅、鐵、青銅、眞鍮等を用ひる。

鑄金　金屬を熔融して鑄型に流し込んで鑄造し仕上げを施す仕事で、花瓶、火鉢、置物等がこの方法による作品である。銅、鐵、青銅等が用ひられる。易熔金屬としては蒼鉛、鉛、錫等で、これ等は生徒の手輕な實習によつて出來る。

彫金　板金に鏨で模樣を彫る技法で、置物、衝立其の他種々の工藝的作品に應用される。材料は銅、鐵、眞鍮、金銀等である。

板金　ブリキ、亞鉛鐵板、銅板、眞鍮板其の他を其の儘切つたり曲げたり接合したりして器物を造る技術を板金工といふ。罐、バケツ、煙草入、本立、置物、燭臺等、これによつて出來る。

管金　鐵管、眞鍮管、鉛管其の他金屬パイプを應用して椅子やテーブルや花瓶等をつくる仕事である。

線金　所謂針金細工である。鳥籠、餅網等はこれに屬する。

2. 燭　臺

蠟燭を立てて火を點する臺で、我國に於ても電燈の以前は多く使用されたものである。各國共古代は隨分多く使用され、國によつて各種の樣式がある。

3. 置　物

鑄金によるものが主ではあるが、最近新味のあるものとしては鍛金又は板金を以て造られるものも見られるやうになつた。

4. 盛　器

材料も工作法も多種多樣である。何れも物を盛るに用ひる。果物、菓子等が一般的である。

5. 灰　皿

灰皿は煙草の灰を落すに用ひるもので、これも材料、工作法共多種多樣である。

本立、インクスタンド、ブロツター、電氣スタンドについては、第一卷第三十一課文房具その他の項參照。（卷一卷末34頁）

6. 作家小傳

羽野禎三氏

明治三十五年九月、石川縣金澤市に生れ、昭和二年東京美術學校圖案科を卒業された。

昭和四年第二回聖德太子奉讚展に「狩獵文鑄銅花瓶」を出品せられた。同年東京歌舞伎座緞張圖案に佳作として入選せられ、昭和十三年第二回文展に「凝視蒔繪文庫」を出品せられた。現に母校東京美術學校に勤務し、後進の誘掖に努められつつある。現代中堅の圖案家でもあり工藝作家でもある。

〔住所〕　東京市板橋區練馬南町二の五八九三

第二十五圖　鳥類のスケッチ
第二十六圖　傳書鳩

井上恒也

1. たんちやう　Megalornis japonensis

丹頂　涉禽類

鶴科の内最もよく知られる種類で、形態優美のもの、頸及び脚が長く嘴は強大で眞直である。尾は短かく白色であるが、翼を疊む時は黑色である。風切羽の一部が尾を覆ふために、尾が黑色であるかの如く思はれる。嘴は淡綠色で脚は灰黑色である。分布は滿洲朝鮮地方で冬季には北海道、鹿兒島縣等に飛來する。

たんちやう

2. しじうから　Parus major minor

四十雀　鳴禽類

小形で擧動敏活な愛らしい種である。全國に極めて多く都會地に於ても庭園等に多く目擊せられる。これは果樹などの害蟲を啄食する有益な鳥である。嘴は短かく太く、翼は短かくて丸い。尾は長い方で脚は纖弱である。頭部は光澤のある黑色で顏は白く背面は黃綠色で下方は灰青色に變ず。北海道以南の全國に多いが、南部地方に至るに從ひ羽色が濃厚となり黑色を增してゐる。

3. みそさざい

Troglodytes troglodytes fumigatus

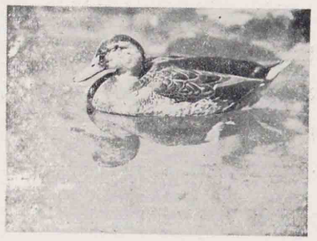
鷦鷯　鳴禽類

極めて小形の鳥で多く陰濕の低い叢中等に生活してゐる。羽色は背面は全部焦茶色で背以下の部分は尾に至るまで一面に微細な黑褐色の横斑がある。琉球諸島の外は全國に分布してゐる。

4. あひる　Anas domestica

家鴨　鴨（アヒル）　遊禽類

肉用、卵肉兼用として飼養せらるゝ水禽である。まがもを原種として馴致せられたものといふ。我國の在來種は青首鴨と稱せられ、よく原種の色彩を存してゐる。本圖中右側の種類は鳴鴨（ナキアヒル）と稱し、この青首鴨とまがもとの交雜種である。



あひる

5. かはせみ　Alcedo atthis japonica

翡翠　鳴禽類

一名せうびんといふ。溪流沼地等の樹上に棲み靜かに水中の餌物を探り、水流に一直線に飛翔す。羽色は鮮麗で頭部は暗綠色をなし鮮青色の細かい斑點がある。全國的に分布してゐる。

6. しぎ　Scolopax

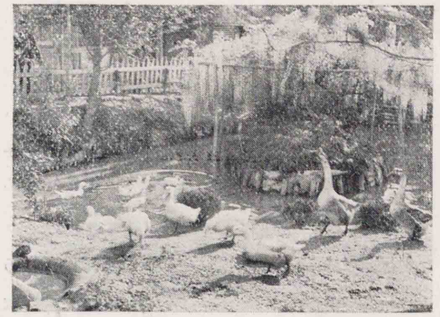
鴫　鷸　涉禽類

しぎ類は肉味が佳良で、又よく山野水邊から飛び立つので獵鳥として最も名高い。大尺鷸、襟卷鷸、三趾鷸、田鳴、青鳴、山鳴等その種類は三十餘種ある。

7. みみづく　Otus

木菟　猛禽類

梟の頭部に羽耳を有するものゝ稱で、我國に



飼鳥群

は數種ある。最も普通なるはおほこのはづくである。最も大形なものをしまふくろといひ、中形なるものにあをはづく、とらふづくがあり小形なるものにこのはづくがある。何れも夜間よく活動する種である。

8. でんしよばと

傳書鳩　鳩鴿科

歸巢性を利用して通信に使役する鳩をいふ。かはらばとの變種鴿（ドバト）（いへばと）より出た品種である。鳩を通信用に使用した最初の記錄は紀元前四二年モデーヌの攻圍に守將が攻圍線を超へて通信を行つた事がローマ史家に錄されてゐるその後オランダ人が研究し、次いでベルギーで最もよく研究された。現在の傳書鳩は殆どベルギー種で、リエージ、アンベルスの兩種が名高い。前者は輕快で近距離の飛行によく、後者は強重で遠距離の飛翔に適する。

用途は軍事通信の外漁業者の海上から陸上への通信、島から島へ、飛行機から基地へ、登山通信などその用途はなかなか廣い。

鳩に通信文を運ばすには成るべくうすい紙に細字で認め、これをアルミニウム製の圖の樣な通信筒に入れて脚につける。その通信距離は鳩の種類、年齢、訓練の程度、天候、地形などにより一定しないが、一定の鳩を一定の方向にのみ使ふ場合、固定鳩舍にあるものは約三百粁、鳩舍の鳩ならば五十粁、夜間及び往復通信用鳩は五十粁位を標準とされてゐる。通信速度は良好な條件の場合一分間に一粁とされてゐる。

傳書鳩はどばとに類似してゐるが、嘴長くして先端銳く、眼の周圍裸出し、頸と軀幹とは共に長い。飛翔迅速で一時間によく五粁餘に達するといふ。

軍事用としては各國共相當研究が進み、營舍内に鳩舍を設け、軍用鳩係の兵士をも定めてゐるといふことである。

9. 作家小傳

井上恒也氏

明治二十八年靜岡縣に出生された。大正八年三月東京美術學校日本畫科本科卒業後、中央にあつて畫道に精進されてゐる中堅作家である。

川合玉堂門下の逸材として將來を期待されるところ多く、昭和十四年の解散まで、戊春會、東臺邦畫會々員として作品を發表された。作品の主なるものは次の通りである。

大正六年舊文展第十一回「綠蔭のさゝやき」、
大正九年帝展第二回「秋まつ裾野」、
昭和五年第十一回帝展「池畔小景」、
第十二回帝展「友呼ぶおきつどり」、
第十四回帝展「多摩川にて」、
第十五回帝展「みだれたつ」、
昭和十一年新文展「河霧」等。

〔住所〕　東京市澁谷區代々木初臺五四六

第二十七圖　雪景色
第二十八圖　冬の風景

赤塚忠一

1. 雪

冬の景物は何といつても雪である。吹雪、淡雪、初雪、暮雪、殘雪、春の雪などといつて詩歌の題材となつてゐる。

大氣の上層で水蒸氣が凝固する際、溫度が氷點以下の時は水滴にならずして雪の結晶となる

札幌附近の雪

雪は主として六方晶系に屬する氷の結晶で柱狀板狀、板柱狀、針狀の結晶が組合さつて六角形の多種の形狀をなしたものである。溫度が氷點を相當下つた時に生ずるものは細かくて粘着力なく、さらさらしてゐる。これを粉雪といふ。牡丹雪又は綿雪といふのは、溫度が氷點附近の時に生ずるもので、水分が多く結晶がいくつも結合して雪片となつたものである。

雪が地上に積つて溶けずに居ればこれを積雪といひ、積雪が永くとけずに冬ををこす時は、根雪又は臥雪といふ。積雪の密度は種種であるが、表面ほど小さく、內部にゆくほど大である。雪轆といふのは積雪の表面を强い風が吹く時に轉轉として生ずるローラ狀の圓筒で可成の大いさになる事がある。雪紐は塀上、樹枝上に細長く積つた雪が落ちかかつて紐狀に垂れてゐるもの、雪冠は柱杙等の上に圓く積つて帽子の如くなつたものである。積雪が强風に吹き散らされる現象を吹雪といひ、降雪に際し强風を伴ふものは風雪といふが、兩者は同時に起ることもあつて混同される。雪浪は吹雪のために積雪面が波浪狀となつたもの、雪丘は吹雪に吹きよせられて高く丘になつたものである。高山などで夏まで存在する積雪を萬年雪といひ、その雪が凹地を掩つてゐる時雪田、溪谷をうめてゐる時雪溪といふ。雪線とは萬年雪の存在する境界の高さである。山腹の積雪が滑り落ちる現象を雪崩(ナダレ)といひ、山嶽の積雪が春にとけて一時に流れ出すものを雪汁といふ。洪水を起すこともある。赤雪といふのは赤土の風に飛んだのが雪に混じたのや、又雪の面に降つたもの、微生物の夥しく發生したもの等その原因は種種である。

雪　　德富蘆花

起き出でて見れば滿天滿地の雪。

午前は粉雪紛紛霏霏、午後は綿雪片片飄飄、終日間斷なく降り暮らす。

障子を開けば王屑霏霏亂れて斜に飛び、後山も雪のためにおぼろなり。風大に到れば積りし雪また亂れ立つて走る。午後はいよいよ降りしきりて、馬車も通はずなりぬ。積る雪の重量に、何の木にやぽきと折るる音するもの兩三度。

滿天滿地一白の中に獨り前川のみ鼠色にして黑く、鷗十數羽來りて泗ぎつるあり。時時其二三羽、水を起つて十分に翼を廣げ風雪に向ひて飛ばむとすれど、吹きやられ吹きやられして、空しく水に下りぬ。

盡日霏霏濛濛、天地雪に埋れ、人風雪に閉ぢられ、斯くて降りながら夜に入りぬ。

夜十時燈をとりて外を覗へば、飛雪猶紛紛たり。　　(二月十六日)

□

2. 作家小傳

山元春擧氏

明治四年一月滋賀縣の大津に出生せられ、畫名を成してからは京都に常住された。少時森寬齋の門に學んだ逸材で、圓山派をよくし、明治三十七年には海外に遊學し、歸朝後京都繪畫專門學校並に京都美術工藝學校の教授として京都畫壇に重きをなし、文展第一回以來日本畫部の審査員を續け、大正六年には帝室技藝員、大正八年には帝國美術院會員に任ぜられた。昭和八年七月歿。年六十三であつた。早苗會を統率せられ其の門下からは川村曼舟、故小村大雲、林文塘、桑本一洋、勝田哲、山下竹齋、山元春汀氏等の名家を輩出してゐる。

主なる畫歷は次の通りである。文展第一回「海月」、二回「雪松圖」、三回「鹽原の奧」、四回「寂寥」、六回「嵐峽」、七回「春夏秋冬」、十回「山二題」
帝展四回「山上樂園」、五回「天馬奮迅」、六回「深山の冬」十回「富士二題」、十二回「しぐれ來る瀟峽」。

平塚運一氏

平塚運一氏は明治二十八年十一月十七日島根縣松江市津田町出生、鄕里及び東京にあつて洋畫に精進されたが、傍ら版畫に志され、遂に版畫家として大成された。現に東京美術學校囑託として版畫科を擔任せらるる外、國畫會會員、日本版畫協會會員、文展無鑑査として斯道に重きをなしてゐる。

曾て島根縣物產陳列所にて圖案の指導をせられたこともあり、又「中央美術」、「美術月報」の編輯に當られたこともあるが、その間常に制作と研究とを續けられ、二科會、國畫創作協會、國畫會、日本版畫協會、日本水彩畫會等に出品の外、「版畫の技法」、「創作版畫の作り方」等の著書もある。
氏の出品作品の主なるものを次に擧げる。
昭和七年第七回國展「出雲風景」、第八回國展「段々畑」、第十回國展「百濟舊都」、第十二回國展「平壤牡丹臺」、第十四回國展「峭巖深淵、內金剛萬瀑消」、
昭和十三年第二回文展「佐渡尖閣灣」
昭和十四年第三回文展「平壤大同門」
古代佛教版、古版繪入本、朝鮮古代、天平時代の古瓦塼、古代裂地、民藝品(陶器)の蒐集は氏の趣味で世に知られてゐる。
〔住所〕　東京市淀橋區西落合町一丁目一六一

田原輝夫氏

明治三十三年三月佐賀縣佐賀郡大詫間村に出生された。大正八年佐賀縣師範學校卒業、更に大正十一年東京高等師範學校圖畫手工專修科を卒業され、大分縣立中津中學校教諭として赴任されたが、大正十三年四月同校を辭任の上上京東京高等師範學校と東京府立第七中學校の囑託として多年圖畫教育の實際に當られた。昭和十三年四月東京高等師範學校訓導兼助教授となり現に附屬小學校並に圖畫手工專修科の指導に關係してゐられる。

教務の傍ら畫道にも精進され、現に太平洋畫會會員として重きをなしてゐる。大正十一年平和博に「靜物」を出品以來、帝展に五回、二部會一回文展に每回及び大正九年以降每年太平洋畫會展に出品されてゐる。
〔住所〕　東京市板橋區練馬南町一丁目三四八五

赤塚忠一氏

明治二十年十月廿九日東京市神田に生れ、初め日本畫を鏑木清方氏に學び四十二年西洋畫に移り白馬會研究所に入り、更に中澤弘光氏に就き次第に水彩畫に興味を持たるるに至り、文展帝展等には水彩畫風景を連續出品し、日本水彩畫會員として同會展にも常に出品し異彩を放ち又國畫創作協會の洋畫部の設立された大正十四年第五回展に「木曾風景」その他第六回展に「柿生村附近」その他を出品好評を博されたが文帝展出品作は次の通りである。
大正五年第十回文展「薄曇りの河岸」
大正七年第十二回文展「靜かなる海」
大正九年第二回帝展「街頭雨情」
大正十一年第四回帝展「初秋の海」
昭和三年第九回帝展「朝の磯」
昭和四年第十回帝展「夕陽の燈臺」
〔住所〕　東京市世田谷區上馬町一の七三六

第二十九圖　漆　器　　山崎覺太郎

1. 漆　器

我國の美術工藝は多くは支那朝鮮或は泰西のものを輸入し、之を基調として、同化し應用し發達したものであるが、獨り漆器ばかりは日本獨特の工藝であつて、極めて古くから、行はれた。第六代孝安天皇の朝既に漆部連なるものがあつて漆に關する工技に當つて居たと傳へられてゐる。

漆器は日本各地に普及して現今では、產地として數へらるるもの可なりに多いが、京都、大阪、東京、名古屋、金澤、山形、高岡、廣島、會津、輪島、高山などが特に知られてゐる。

2. 產業としての漆器

產業方面から見ると、前述の如く全國各府縣に生產し、我國產業工藝品中重要な位置を占め我國の重要輸出品である。

	昭和九年	十年	十一年	
輸出額	2.570	2.513	2.098	(單位千圓)

3. 硯　箱

文房具。硯を入れる箱であるが、從來筆墨、水滴、小刀、尺、厝をも入れた。平硯箱、重硯箱、淺硯箱等の種類があつて、裏梨子地、黑漆塗、表蒔繪、螺鈿、描金を施し、上手物は極めて美麗につくる。文臺と連作になるものあり。光悅作船橋硯箱の如きは單獨のもので、甲盛被せ蓋、蒔繪描金の豪華な代表的作品である。物をもつて人に示すには又この箱にのせ、或は蓋にのせて出すことが中古よりの慣例であつた。宇津保物語にも「中納言の君、紙もがなとの給へば、みたる色紙一卷、白き色紙一卷、硯箱の蓋に入れて出されけり」とある。

4. 煙草入れ

卷煙草入れの使用は明治維新後始めて紙卷煙草が輸入されて後の事である。刻煙草入の如く腰佩用と懷中用の二種ある。又漆器にて机などの上に置く卷煙草入もある。圖は來客用に用ひられるものである。

5. 盆

水或は酒を盛る器、今の鉢、又洗滌具として時々祭禮に犧血を盛ることもあつた。現今では淺くして專ら物を盛るものとしてゐるが、元、洗、銅、盆は同種のものである。洗は淺く、銅は深く、盆は中間に在るといふ所から見れば、此の三器は同形で邦訓「ひらか」とも「ほとき」ともよむ日本の現今では扁平で緣淺く、專ら茶器食器等を載せるに用ひるもの、漆器類が多く、木製の刳物、曲物等その洋風の盆には、銀鍍金ニツケル鍍金、アルミニユーム等の金屬製のもの及び陶器製のものがある。用途よりは菓子盆茶盆、給仕盆等と呼び、形は種々ある。

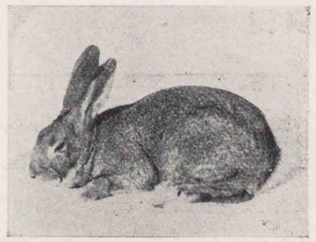
6. 菓子入　(ボンボン入)

菓子器は木製刳物、塗物、陶器、金屬器、硝子器等色々あり、其の用途に從つて大小形狀も種々である。菓子を入れて保存して置くに用ひるといふ意ではなく、菓子を客にすすめるための器である。ボンボンとは果實、酒等を入れた砂糖菓子のことで、キヤンデーに同じである。圖はボンボン入である。

7. うさぎ　Lepus brachyurus

兎　哺乳類　齧齒目兎科

我國產の兎にはのうさぎ、えちごうさぎ、あまみのくろうさぎ等がある。何れも耳がながい。



チンチラ

のうさぎ　內地に廣く分布し、體色は黃褐色又は淡褐色をなす。夏毛は冬毛よりも濃色である。

えちごうさぎ　越後地方に產するのでこの名がある。夏毛はのうさぎに似て黃褐色で背の正中線より尾の上面は黑味が强い。體の長毛は眞黑のものを混ずる。下面は白色で胸帶は背と同色である。十月中旬より冬毛にうつり、冬季は全く白色と化するが耳の先は常に黑色である。北海道にもこの種に似た白化兎がゐる。これはえぞうさぎといひ別種である。

あまみのくろうさぎ　のうさぎよりも遙かに小さい。一見黑色の樣であるが、褐色を帶ぶを普通とする。この種は奄美大島と德之島のみに限り棲息し、晝間は穴に潛み夜間のみ出て食を求める。

かひうさぎ　野兎より改良馴化したもので、一般には體色が純白で耳長く、眼はルビー色をしてゐる。その他種々の色彩のものがある。品種もなかなか多い。肉用ではベルジアン、フレミツシユ、パタゴニアン、イングリツシユ。毛及び毛皮用としては、アンゴラ、チンチラ。毛肉兼用では、ヒマラヤン、サイベリアン、ベヴエレン、白色日本種等で愛玩用には、ロツプイア、ダツチ、ポーリツシユ等がある。

うさぎは古來文學的に愛好され、又月に兎など配されて詩歌の材料、幾多の傳說を生んでゐる。

8. いちご　苺　薔薇科

オランダイチゴ又は西洋イチゴと稱し多年生の植物である。葉は三個の小葉から成る複葉、花は白色五瓣、實は細粒肥大の集合で、美しい紅色をしてをり晩春より晩秋にかけて結果、成熟し食用に供せられ、頗る美味である。詳細は第四課參照。(卷末4頁)

9. 作家小傳

山崎覺太郎氏

明治三十二年六月富山縣東岩瀨町に生れ、大正十三年東京美術學校漆工科を卒業された。

昭和二年第八回帝展第四部美術工藝に「化粧臺」を出品。昭和三年第九回帝展に「衝立」を出して特選となり、翌年第十回帝展に「蒔繪ストーブ前立」を出し再び特選、昭和六年第十二回帝展で「サイドボーアド(側棚)」が又々特選となられた。其の後昭和七年第十三回展に「遊魚手筥」を出品。昭和八年には帝國美術院推薦の榮譽を得られ、昭和九年第十五回帝展「漆器文庫」、昭和十三年第二回文展に「漆器奔放屏風」、昭和十四年第三回文展には蒔繪屏風「猿」を出品、同年審査員に選ばれた。

昭和十一年九月文部省及び商工省の囑託として歐米に使し巴里萬國美術工藝博覽會を視察の後、各國を經て昭和十二年九月歸朝し、輸出工藝品其の他の指導奬勵に當り、現に東京美術學校助教授、又日本工藝美術會及び實在工藝美術協會會員として漆工藝界に新人として活躍せられつつある。

〔住所〕　東京市荒川區日暮里町九の一〇三五

第三十圖　掛物の表裝

1. 掛　物

書畫を軸物に表裝して床の間、壁等に掛けて鑑賞し、又は室内の裝飾とするものを掛物といふ。卷いて保存し、或は持運び等の便を考へたもので、また軸物、軸、掛軸等ともいふ。俗稱かけじは掛字(書幅)から出てゐる。初めは高僧畫像、佛畫等を掛物に仕立てたものであつたが後に山水花鳥畫等をもかく仕立てることになつた。(理論篇 161 頁參照)

表裝　書畫をかいた紙又は布帛を糊で裏打しそれに相應した織物、紙を選び緣を貼り軸又は表紙其の他の附屬物をつけて卷物、掛物、書畫帖等に仕立てることを表裝といふ。これを業とする人を表裝師、表具屋、經師等と呼ぶ。表裝は又裱裝とかくこともあり、表具や表背といふこともある。

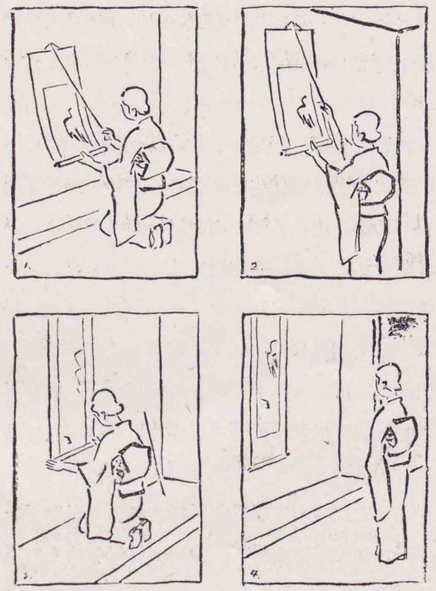
表裝に用ひる材料は紙と裂地で、紙は唐紙、畫箋紙、絓(シケ)唐紙、柔紙等、切地では金襴、印金竹屋町、緞子、繻珍、時代紗、斜子、絓、紀(パア)等がある。裏打に要する紙は半紙、美濃紙、美栖(ミス)、寸延、宇田、色判紙等、糊は生麩糊及びこれを腐らして長く貯へた腐糊とを用ひる。

掛物の種類　形體からいへば竪物、横物、巨幀、大幅、紙掛、柱隱等、表具についていへば大和表裝、明朝表裝、袋表裝、臺貼表裝、唐表裝、眞の表裝、神聖表裝等があり、掛方からいへば一幅掛、二幅對、三幅對、稀には四幅對もある。三幅對に於ては中を中尊、左右を脇繪と稱する。

又本紙の種類からは絁本、絹本、紙本、尺幅、尺二、尺三、尺五、尺八、長條幅、全紙、聯落、半折、細物、聯幅等がある。

掛け方　先づ床の前に跪き、掛物の緒を解いて約半米程開き、1、掛物を左手に、筈竹(掛竿)を右手に持ち、2、掛緒を筈竹にかけ、立つて之を折釘にかける、3、筈竹を下に置き、4、兩手を軸の兩端に添へ、靜にのべ下す。5、二幅對の時は客位、主位の順に、三幅對の時は中尊客位、主位と掛け、又外すときはこの反對の順序に行ふ。掛終つたならば床から約一米程退いて掛物の位置の正否を檢べる。

外すときは筈竹を持つて進み出で、1、掛物の前に至つて一旦筈竹を下に置き、2、兩手で下から掛物を卷上げて行き、約半米程開き殘して置いて、3、筈竹を右手で取上げ、掛緒を外し、其の儘退いて床の前半米隔てゝ坐し、4、掛物に筈竹を添へた儘下に置き筈竹を取去り、5、後掛物を全部卷納める。



掛物の見方　掛物を拜見する時は、1、先づ主人に一禮し、床に向つて一禮し、2、床の前約一米離れた所に坐し、落着いて拜見する。その仕方は貴顯の像、神佛の像、及び高山の繪等は下から上に目遣ひし、其の他は普通上から下へと見る。

掛物が二幅對ならば客位、主位の順に、三幅對ならば中尊、客位、主位の順とし、各幅については、軸、表裝、書畫、落款等順を追つて拜見する。拜見し終らば挿花を見る。この時床に向つて一禮し、次に主人に一禮して元の席に着く。尙掛物は季節及び時と場合に應じ、適はしいものを掛けることが大切である。

2. 作家小傳

圖示した表裝中の書畫の作者略歷を述べる。

(大和表裝、雪中紅椿圖の筆者)

小泉勝爾氏

明治十六年八月東京府下北品川に生れ、明治四十年東京美術學校日本畫科を卒業、大正六年母校東京美術學校の助教授に任ぜられ、後教授に進み今日に至る。文展無鑑査、日本畫院同人。

大正六年第十一回文展に「彩園雨後」を出品後引續き帝展へ出品、昭和六年第十二回帝展には「濤聲」を出品して特選となられ、同年帝國美術院推薦の榮を得られた。昭和九年第十五回帝展には審査員に擧げられた。(詳細は卷一卷末第二十七圖、卷二卷末第二十圖參照)

〔住所〕　東京市淀橋區上落合町一の四二五

(明朝表裝、馬市圖の筆者)

岡野　榮氏　號酒江又は酒枝といはれる。明治十三年四月東京赤坂に生れ、黑田清輝に師事、白馬會研究所を經て東京美術學校西洋畫科に入り、三十五年卒業、大正十四、五年外遊、現在女子學習院教授である。大正元年中澤弘光、山本森之助、三宅克己氏等と光風會を起された。

〔住所〕　赤坂區青山南町三の六三

(袋表裝、南畫水墨山水圖の筆者)

猪瀨東寧氏　天保九年下總國豐田郡三坂新田に生る。名は恕、字は如心、初め專齋と號したが、後東寧と改めた。十九歲京都に出でて日根對山に師事して南畫を學び、二十四歲で歸京佛國博覽會、內國勸業博覽會、繪畫共進會、東洋繪畫共進會、工藝品共進會、巴里萬國博、日本畫會展等に出品し、褒狀、賞牌等を受けること多く、後、日本美術協會審査委員を托された。著書に「名蹟撮要」がある。明治三十六年に病歿せられた。

(臺貼表裝、扇面書の筆者)

正木直彥氏　號を十三松堂といはれる。文久二年十月堺市に出生、明治十四年大阪府中學校卒業後大阪府五等訓導となり、二十年大日本教育會員森有禮の提出した男女文體を一にする方案の論文を寄稿して一等賞を受けられた。後高等中學を經て二十五年七月帝大法科卒業、翌年奈良縣尋常中學校長に任じ、二十八年九月同縣尋常師範學校長事務取扱を兼ね、三十年二月文部大臣祕書官に任じ、ついで文部省視學官、翌年第一高等學校教授を兼ね、三十二年歐米各國へ差遣せられ、歸朝後大臣官房文書課長及美術課長、專門學務局勤務、高等教育會議幹事、第一高等學校教授を兼ね、三十四年には東京美術學校長として美術教育を主宰せられることになつた。爾來三十有餘年の長く同校に留まり、昭和七年まで美術學生を薰陶せらるる傍、昭和六年より十年まで帝國美術院長の要職にあり、現在も猶ほ東京美術學校名譽教授、帝室技藝員銓衡委員、正倉院御物保存會委員、美術顧問等を兼ねられ、正三位勳一等の榮譽を帶びられる本邦美術界の偉勳者である。

〔住所〕　東京市牛込區矢來町三三番地

第三十一圖　家　具　　上　山　　藹

1. 家具圖案

一般製圖の樣式に從つて描けばよい。縮尺十分一が家具製圖では最も多い。家具圖案は鉛筆仕上を普通とするが、稀には墨入をする場合もある。鉛筆は下畫の場合は HB 又は H、仕上には 2B、3B を用ひる。

線を引くには始と終とを明瞭にし、其の間に少しの濁りも汚れもなく何處までも强さを均一に保つた澄んだ線を用ひる。着色は透明繪具を用ひて美くしく仕上げることにしたい。

2. 座　机

座机は普通甲板と脚部との二部分より構成せられ、脚の連絡に幕板を用ひ更に抽斗をつけたものが普通である。變つた構造としては脚が取りはづし出來るもの、脚が折れるもの、甲板の折れるもの、抽斗のないもの等種々あり、其の他工夫によつて形は色々に出來る。高さは32糎位とする。

3. 飾　棚　Cabinet

これは住宅の應接間、客間等に置かれて其の家の所藏にかかる書物、小工藝、骨董品等を載せ實用と裝飾との用に供する棚で、形狀、大きさ、材料樣々である。洋間と日本間とに於て又其の部屋に於ける他の家具との調和の上から考慮せねばならない。

棚類にはこの外陶器飾棚 China Cabinet、皿棚 Sideboard、食器戸棚 Kitchen Cabinet、書棚 Book Cabinet 等がある。

錆竹　座机及び飾棚に用ひた錆竹は鐵錆の如き褐色を呈した竹である。近來は着色によるか、又は硫酸を以て燒いて錆の色を出すものが多い。

4. 椅　子　Chair

其の種類は形態の上から次のやうに分ける。

小椅子 Small chair	肱掛椅子 Arm chair
安樂椅子 Easy chair	長椅子 Sofa
廻轉椅子 Revolving chair	逍動椅子 Rokin chair

寢椅子 Couch 等これである。

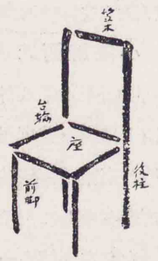
之等を用途の上から見ると應接室用椅子、居間用椅子、食堂用椅子、事務用椅子其の他に區別される。

椅子の定寸、座の高さ次の通りである。

（寸法は糎）

小椅子	42—43.5	肱掛椅子	39—40.5
安樂椅子	33—34.5	長椅子	30—31.5

構造　椅子は主として臺輪座、前脚、後柱、笠木の五部から成る。前後左右に臺輪を廻し前脚と後柱とを繋ぎ、その上に設けたものが座で、その形は方形、梯形圓形、半圓形等である。座には板張のもの、籐張りのもの、裂地によるもの等があり、その張り方に臺輪の外框を一部分殘して布を張り上げたものを薄張又は皿張といひ臺輪の外側から、裂で張り包んだものを厚張椅子といふ。座の下にはスプリングを入れる。



裂地　椅子の上張は、緞子、ヴエールベツト、モッケト、ビロード、クレトン、デレンプ等である。緞子は最上等品である。皮革も亦椅子張に多く用ひられ、これに本革と擬革の二種がある。本革はすべて獸類の革で、普通牛皮、水牛皮、馬皮、山羊皮、羊皮が用ひられる。中でも牛の皮が最も上品である。山羊皮はこれに次で有要である。

擬革は普通レザーと稱へ、雲齋地に可溶性硝化纖維の溶液を數回塗抹し十分乾かした後皺文をつけたものである。

5. 卓　子　Table

教材には擧げてゐないが、椅子と關係あるものであるから特に解說を述べる。卓子を使途の上から區別して見ると、

應接卓子 Reception table	食事卓子 Dining table
居間卓子 Living table	喫茶卓子 Tea table
讀書卓子 Reading table	喫煙卓子 Smoking table
書記卓子 Writing table	脇卓子 Side table
作業卓子 Wark table	化粧卓子 Dressing table

等となる。其の高さの定寸について個々の場合は省略するが、居間卓子最も低く、作業卓子最も高く、その間適當に高さを決めるとして57糎から80糎位までである。又椅子と卓子との關係からいふと椅子の高さに約30糎を加へたものが用ひよいといはれる。

構造　一般的の構造としては甲板、幕板、抽斗、脚の四部から成る。甲板の大さを卓子の大さとし、床の面から甲板の表面までの高さを卓子の高さと定める。

甲板の形には圓形、長方形、正方形、六角形八角形、半圓其の他種々あるが、要は其の目的に應じて使ひよいものにすればよい。甲板と脚の繼ぎ合せを强くするためと全體の形を調へるために附けたものが幕板である。この外脚と脚とを連結するに貫を用ひることも多い其の他工夫によつて形はいくらでも斬新なものが出來る。

6. 室內裝飾　House-decoration

室內裝飾は室內の構造裝飾一切を設計することで、窓の形、壁の色、電燈の構造、家具の樣式其の配置一切を圖示するのである。其の表現形式は透視圖法着色を普通するが、場合によつてはフリーハンドの描法によることもある。(24頁挿繪寫眞參照)

行燈　圖示された室內裝飾中に行燈形電燈があるから行燈についての解說を載せる。

あんどん（行燈）は宋音であんどんと訓む。古く夜行に携へたので此の名がある。起源は不詳。室町時代に旣に道路を照すに行はれた事が後變じて室內に用ゐられる。江戸時代民間では最も盛に行はれ、明治時代にランプが渡來してからは行はれなくなつた。形狀は普通木製角形の框に外部から紙を貼り、內部に燈蓋を置き之に油を入れて燈心をさして火を點ずるもの、或は圓形の丸行燈、圓筒形の遠州行燈等、小形枕行燈、廊下に用ゐる金網行燈、門口の掛行燈、花街に並列した街頭照明の誰彼行燈、祭禮又は京阪の地藏盆の折に文句や漫畫などを描いた地口行燈、其の他有明行燈、露路行燈、置行燈、聖行燈がある。

7. 作家小傳

上山　藹氏

明治二十七年九月東京市本鄉區森川町に生れ初め五島耕畝氏に就いて日本畫を學び、大正十年十月東京美術學校圖案科を卒業された。

美術學校卒業直ちに東京三越本店に入り、その室內裝飾部にあつて、實地家具の圖案に從事せられつつ今日に至つてゐる斯界の先達である

昭和三年、室內裝飾研究の爲め、米・英・佛・獨・伊等十七ケ國を視察せられ、昭和四年末歸朝後日本風のうちに歐米風を加味した新樣式の研究指導に當り創作界に重きをなしてゐる。(詳細は第二十三圖24頁參照)

〔住所〕　東京市本鄉區駒込林町二一六

昭和十四年十二月二日印　　別
昭和十四年十二月五日發　　行
昭和十六年四月三十日再版發行

（著作權所有）

發賣所　日黑書店　振替口座東京二八〇九番　東京市神田區駿河臺三丁目
發行所　晩成處　振替口座東京三三一七三番　東京市下谷區櫻木町二番地
印刷所　三協印刷株式會社　東京市京橋區銀座西二ノ三
印刷所　半七寫眞製版印刷所　東京市品川區大崎本町三ノ五八二
印刷者兼發行者　岩田僊太郎　東京市下谷區櫻木町二番地
著作者　美育振興會

中學維新圖畫の理論と實際（實際篇）

價　卷三金壹圓　卷二金壹圓　卷一金壹圓
特　卷一金壹圓

Y.S